
イレイザー —無貌彷徨—

ヒメノムラサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イレイザー——無貌彷徨——

【Nコード】

N9751J

【作者名】

ヒメノムラサキ

【あらすじ】

「 のっぺらぼう を見に行こうっ」
クラスメイトのオカルト愛好者笹ヶ瀬衛ささがせ まてゐの突飛な提案に混乱するココ。 のっぺらぼう の生息地は、何と学校の裏山！？
珠置山たまおきに棲むと噂される のっぺらぼう 、悠朝村はるか近辺にて相次ぐ家畜及びペットの行方不明事件、関連性の見えない二つの怪事件を追う先で少女たちが知ることになる秘められた 想い とは？
第一弾の主人公大野木ココ。ココと同じく 視える 眼を持つ大野木ささめ。ささめの友人藤枝蘇子ふじえだ もこ。ココの先輩氷垣蓮太郎ひがき れんたろうを中心に

語られるホラー活劇第三弾。

プロローグ

言葉を失う、とはきつとこういうことを言うのでしょうか。

美しい——彼の姿はまさにその一言に尽きました。

宵の闇にさえ紛れぬ白磁の肌膚は、

今、月の光を浴びて、妖しくも儂げな青を帯びております。

これまでに見た、ただヒトの輪郭を成しただけのそれとは違います。

寄せ集められた頭や手足が常に足並み揃うことなく蠢いているよ
うな——

そんな出来そこないの命とは、一線を描きます。

今、眼前に佇むこれは、紛れもない本物の命。

ああ、歩いています。彼が歩いています。

ゆつくりと静かに、しかし着実に一步一步歩んでゆきます。

これまでの失敗作を、私の不甲斐なさから生じた数多の汚点を、
跡形もなく清算していくかの如く、踏みにじってゆきます。

その場に崩折れました。視界は、もはや明瞭ではありません。

「ああ、これで……やっと……」

夜空に浮かぶ満月を仰ぎました。

あの人の罪が——償われる!!

「 のっぺらぼう を見に行こうっ 」

夕陽が静かに射す放課後の教室。

目の前には、ガッツポーズの笹ヶ瀬さん^{ささがせ}。残念だけど、冗談で言ってる顔じゃない。

笹ヶ瀬さん^{まぜる}は、私が中学に入って最初にできた友達。性格は明るく賑やか。ちよつと癖のある髪は二つにまとめていて、黒目がちの眼はどこかリスを思わせる。

友だちになったきつかけは、入学式当日に笹ヶ瀬さんの方から話しかけてきてくれたから。クラスの中で私が一番異彩なオーラを放っていたから話しかけてみよう、と思っただけ。単純に私の見ためが目立ってただけなんだろうけど、笹ヶ瀬さんのそういうところは素直に羨ましいなって思う。この子クラスで目立ってるから声かけてみよう——なんて発想、私にはないから。

ただ、そんな笹ヶ瀬さんにはちよつと困ったところがある。

「 えつと、ゴメンね。もう一回言ってくれるかな？ 」

「 だーかーらー、三人で のっぺらぼう を見に行こうって言ったの 」

笹ヶ瀬さんは、趣味に関して移り気だった。しかもそっち系限定で。

つい一週間前まで、笹ヶ瀬さんの趣味は「心霊」だった。その手の雑誌を愛読するのはもちろん、本人も村中を駆け回って、墓地や廃墟などそれっぽいところを訪れては写真を撮りまくっていたらしい。

そんなある日、笹ヶ瀬さんが気紛れにお父さんの仕事場に行くと、随分古そうなクッキー缶を見付けたという。中を開けてびっくり、そこにはこれまで何枚撮っても手に入らなかった 本物 が、数え切れないほど入っていたのだ。

最初は、宝くじで一等賞が当たったくらい喜んでいた笹ヶ瀬さんだったけど、段々怖くなってきたらしく、そもそも何でお父さんがこんなに心霊写真を、と思うといてもたってもいられなくなり、結局私のところへどうしようユツキーと泣きついてきたのだ。

何でそこで私なのって思ったけど、それだけ笹ヶ瀬さんはパニックだったんだと思う。

——笹ヶ瀬さんはある意味で心霊に取り憑かれていたのだ。

鏡花さんが教えてくれた、こういう状況の人にはいけないこと。それは、その人が怯えているモノを真っ向から否定すること。だから、すつごく申し訳ないとは思いつつも、鏡花さんに頭を下げ、さらにバイト代としていちご生クリームどら焼きをおごると約束し、芝居を打ってもらうことにした。

鏡花さんに「霊能少女」を演じさせ、除霊を行ってもらったのだ。

結果、笹ヶ瀬さんは呪いから解放された。私の想像してた除霊とは少し違ったけれど。

もう二度とやらないからね、と声を高くしていた鏡花さんの顔。

……うん、若干涙目で可愛かった。

鏡花さんが言うには、心霊写真はどれも現像時の事故で説明がつくものだったらしい。そういえば笹ヶ瀬さんのお家って昔ながらの写真屋さんだったっけ。でも、どうしてわざわざ取っておいたりしたんだろう？

……まあいつか。とにかく事件は一件落着。これで笹ヶ瀬さんは元気になってくれるはず。そう。そう思っていたんだ。なのに、それなのに——

「どしたのユツキー？ 頭痛いの？」

「うつ、うつん。何でもないよ」

強いて言うなら心が痛い、かな。

ちらりと鏡花さんを見る。笹ヶ瀬さんに向けている眼は、ゴミを見るときのように変わっていた。

……うわあ。

「それで、今度は妖怪に興味を持ったと？」

「ヨーカイ？ いやだなあキョーちゃん。あんなのに興味持つのは現実と空想の区別が付かないお子サマだけだよ」

一瞬、鏡花さんの瞳に殺意が過った。うん、気のせいであって欲しいけど多分気のせいじゃない。

「あたしが言ってる のっぺらぼう はUMAのことだよ」

「UMAって、その、ネッシーとか雪男とか？」

「そっ、未確認動物って意味のあのUMA。二人はインディアン・ETって知ってる？」

机に腰掛け、得意げに微笑む笹ヶ瀬さん。

もう一度鏡花さんをちらり。何とも言えないだるそうな眼をしていた。多分知ってはいるんだろうけど、口出しする気はないらしい。その方が早く終わると判断したんだろう。私もそう思う。

「確かウドンターニーってトコで見つけたヤツだったかな？ 牛が産んだんだけど、これがすごい見た目だね。頭はでっかいのに身体はほっそり、そこだけ見ると映画のETまんまなんだよ。まあ、ホンモノにはシッポも耳もあつたから、皆の知ってるET像とは違うんだけどねー。あつ！ なんなら今画像持つてるし——」

「ちよつと待て」

笹ヶ瀬さんが携帯——今どきの女子中学生っぽいピンクのラメ入りにやたらリアルなモケーレムベンベストラップがすごい浮いてる——を取り出したところで、ピタリと止まった。

珍しい。「待ちなさい」じゃないあたり、鏡花さんが本気だ。

「な、なんでしようか、キョーカさん……？」

「私もインディアン・ETなら知ってるわ。だから私は見ても平気でもね笹ヶ瀬、あの類の画像は得てしてショッキングなものでしょう？ 本意ならともかく、ああいったものを不本意に見てしまったせいで、精神的健康を損なう人も世の中にはいるの。というより、むしろそちらのほうが大多数なのよ。だから、そういった画像を提

示する際は、必ず相手の了解を得てからになさい。いいわね」

締め言葉に疑問符はなかった。

「ご、ごめんなさい」

笹ヶ瀬さんが携帯をしまう。本気で反省しているみたいだった。

鏡花さんの気配りは嬉しいけど、義妹に守られるってやつぱりちよつと複雑だなあ。

「それで、そのインディアン・ETとのっぺらぼうに一体どんな関係があるのかしら？」

「あつ、うん！ えつとね、そのインディアン・ETにそっくりなのが今いるみたいなの！」

「いるつて、何処に？」

「ウチの学校の裏山」

「……はい？」

「本気……で言ってるのよね？」

鏡花さんはこめかみを押さえ俯き気味だ。本当に頭でも痛いんじゃないかなって顔してる。

「そりゃあモチ本気だよ。私、昨日ネットで見たんだもんつ。『^{たま}珠^{おき}置山を彷徨い歩く謎の人影！ 正体はあの妖怪 のっぺらぼう か！？』みたいなの！」

「で、でも、それが本物かどうかなんてわからないじゃない」

「ふっふーん。ザツツライトだよツッキー。だからこそ」

笹ヶ瀬さんが、両手を机に付き、こっちへ顔を寄せる。

「真偽の程をツッキーとキョーちゃんの慧眼で見定めてほしいってスポンよ」

「……それ、私必要なの？」

鏡花さんが、小さく拳手をした。

「一応訊いとくわ。インディアン・ETの正体について最も有力な説は知ってるわね」

「もちろん。^{たんがんしょう}単眼症^{たんがんしょう}ってヤツでしょ。」

「タンガンシヨウ？」

鏡花さんは頷いてるけど、私は知らない。

「うーんと、先天奇形のひとつでね、お目々が一つで産まれてきちゃうの。で、それにやられた牛の特徴とインディアン・E Tの特徴は、ほとんど合致するみたい。単眼症の原因になる座禪草^{ザゼンソウ}なんかを牛が食べたんじゃない、とは言われてるけど、ビタミンA不足でもなっちゃうつて聞くと、結局は環境悪いから産まれたんじゃないかなあ？」

「そこまでわかってるなら――」

一体 のっぺらぼう に何を期待してるの、と言いかけたところ
で、

「つまり のっぺらぼう は明らかに奇形牛とは異なる、と？」

遮られた。そゆことそゆこと、と笹ヶ瀬さんは弾むように頷く。

「インディアン・E Tは耳や尻尾、手足の爪に牛っぽさが残ってた。でも今回珠置山で見付かった のっぺらぼう は違う。尻尾はないし、手足はまるで人間だし、背はインディアン・E Tよりずっと高い。だからもしかすると、今回は 本物 なのかも、って私は思うワケ」

どう気にならない、と念押ししてくる笹ヶ瀬さん。返事に困って鏡花さんを見ると、口許に拳を当てて、何やら考え込んでるみたいだった。……えっ、考え込んでる？

「笹ヶ瀬」

「うん？」

「期待に添えるかどうかはわからないけれど、とりあえずそれ見せてもらえない？」

えっ、という声を慌てて呑み込む。

信じられない。あの鏡花さんがこんな話に乗るなんて。

「さっすがキョーちゃん！ わかってるねー。じゃ、今から図書室行こっ！」

あそこならパソコンあるし、善は急げだよと言って、笹ヶ瀬さんが鏡花さんの手を引っ張る。

肝心の のっぺらぼう の画像は携帯にないんだ。昨日見付けたって言ってたし、入れ忘れたのかな。

「ちよっと、わかったから引つ張らないで」

立ち上がった鏡花さんの腕にしがみ付く笹ヶ瀬さん。絡まり合う華奢な――女のコの腕。小さく、息を呑んだ。けど、何でそんな反応をしたのかは、自分でもよくわからない。

「どしたのユツキー？ 置いてっちゃうぞー？」

正直 のっぺらぼう の話に興味はないし、ついてもいけない。でも、笹ヶ瀬さんが言うんだから行かなくちゃダメなんだろう。だって、トモダチなんだから。関係を維持する上で、明日も皆で気分良くお昼ご飯を食べる上で、こういうやりとりは欠かせないんだから。だから私は、

「ごめんね。今日はこれから用事があるんだ」

――嘘を、吐いた。

「悪いわね。こんな時間まで付き合ってもらって」

教科書とノートを片付けながらそう言う私に、

「別に構わないわ。私も教えることで勉強になったから」

蘇子はいつも通りの控え目な笑みを返した。

放課後の図書室、私と蘇子はいつ先ほど勉強会を終えたばかりだ。まあ、最初は私が居眠りしてとってなかった板書を写させてもらうだけの話が、それじゃあ大野木さんのためにならない、という蘇子の至極真つ当な意見によって勉強会に発展したつつ裏事情があるんだけどね。ただ、実際わかんないところもあったし、終わった今じゃ丁度よかったと思う。

「つつてもねえ。借りばつか作るのも何か気が引けるわ」

「もうっ、本当に気にしなくていいのよ、そんなこと」

口許に手を添え、ころころ笑う蘇子。

「でも、そうね。だったら今日の三時間目みたいに、またペアを組んでももらえない？」

「そりゃあもちろんいいけど——そんなんでいいの？」

「ええ。私、バレーはどうしても苦手で」

図々しかつたかしらと言つて、蘇子は眉を八の字にする。

この娘、バレーに限らずチームでやる競技はどうも苦手意識が強いらしい。体力テストの結果見る分、運動オンチじゃないんだろうけど、団体競技の「自分のミスが原因でチームが負けるかも」的な不安が人一倍責任感の強いこの娘には、どうも合わないみたいだ。

「まさか。むしろ欲のなさ過ぎるアンタの今後がちょっと心配」

「そうかしら？」

きょんとした顔で首を傾げる蘇子。うん、「今後が心配」っていうのはわりとマジ。

髪を二つに束ねて三つ編みにしたおさげヘアとココにも負けず

劣らずの白い肌。背は私より少し高く、セーラー服姿は田舎の女子中学生っていうより名門女子校に通うお嬢様って感じ。それこそ後輩から黄色い声で「お姉さま」と呼ばれ、慕われるような。

——まさに一片の隙もなく藤枝蘇子は優等生だ。

蘇子と友だちになったきっかけは、席が近くになったとき私から声をかけたから。

私は家じゃあどうも一匹狼タイプで通ってるみたいだけど、一応学校じゃあそう思われないうちに努力はしてる。学校は独りじゃ何かと困ることが多い。授業休んだときとか、ペア作って行動するときとか、普通にやってくだけでも色々。

だから 友達 は必要不可欠——なんて打算的な理由もあるにはあるんだけど、勿論その 友達 は誰でもいいってわけじゃない。私が蘇子に話しかけたのは、やっぱり他の娘にはない、このおつとりとした——傍にいて心地いい雰囲気招惹かたんだって思う。

「そういえば、義妹さん来ていたわね」

「ああ、鏡花のこと？ えっと、悪かったわね。騒がしくて」

実際騒がしかったのは連れの方だけど。そういえば、珍しくココがいなかったわね。

「別にいいのよ。ただ——」

「ただ？」

「ごめんなさい。何でもないわ。ただ少し気になるというか、不思議なお話をしていたから」

顔に影が射した。円らな瞳がどこか不安そうに揺れている。

あー、なるほど。頬杖をつき、苦笑した。

「びっくりした？」

「えっ？」

「鏡花のこと。あの娘、お昼のときはあんまり喋らないでしょ」

「そういえば……そうね。お家じゃ、よくああいうお話を？」

「あー、するのは父親かココくらい。私はああいう話題、振られたことないから」

警戒されてんのかもと言って、自嘲。警戒してるのはむしろこっちの方かもね。

「そうなの」

玉の入っていない鈴みたいな蘇子の声。それでも、いくらかほつとしたみたいに聞こえた。

図書室の鍵を閉める私の後ろで、蘇子がまあと驚いたような声を上げた。

リアルで「まあ」とか言って違和感ないのは、私の知る限りまことこの娘くらいのもんだ。

「どーしたの？」

振り返ると、蘇子がこれと言って図書室前の掲示板を指差した。

そこにあつたのは、猫の写真がプリントされた一枚のチラシ——猫の名前はマロン。性別はメス。猫種はアメリカンショートヘア。で、あとは行方不明になった場所と日時と連絡先の電話番号。飼主の名前は出家恵子^{でいえ}さん。悠朝中の二年女子。見ての通りペット探しのチラシだ。

にしても、一応これ四日前に貼ったチラシなんだけどね、コレ。その間にも二回、蘇子とはここに来ているのに。今日初めて気付くこの娘が鈍いのか、それとも元々この手のチラシが持つ効力つてのは、この程度なのか。

「またなのね」

一応——「また」に含まれるんだろうか。

今月に入ってから、この悠朝村^{はるあさむら}近辺では、ペットや家畜をはじめ動物の行方不明事件が相次いでいる。いや、現場の状況からして人為的なのは明らかなんだから、より正確に言えば「行方不明」じゃなくて「盗難」か。

一件目は犬、二件目も犬、三件目は鶏で、四件目には兎がやられた。犬の場合は首輪を繋ぐリードが、鶏の場合は小屋の鍵が、それぞれ切断されていたという。三件目までは、こんな田舎でもそうい

うことつてあるんだな程度にしか思っていなかった。世間の反応も大体そんな感じだったと思う。というか、実害被った人には悪いけど騒ぐほどのレベルにも達していなかった気がする。

そう、三件目までは。

四件目の事件は悠朝小の兎小屋で起きた。第一発見者は、兎の餌やり当番で早朝から登校していた女子生徒。その娘が兎小屋に着いたときには、すでに小屋の入口が開いていたらしい。それで中が空っぽならこれまでと同じ。でも……四件目は違った。

案の定、兎は一匹もいなかった。

残されていたのは――生臭い血の海だけだったという。

同じ村の中、同じような時間に、動物が殺られたという共通点から、過去三件に比べるとどこか浮いた感じこの事件は、気が付けば「四件目」としてカウントされるようになっていた。それが何を意味するのかというと、過去三件で消えた動物も世間的には死亡扱いされるワケで。飼主の気持ちをよそに、「盗難」事件は「殺傷」事件として広がるハメになってしまった。

以来、この辺りは多少ピリピリしたムードに包まれている。無理もない。これまでは実験動物の確保説とか、ペット業者への転売説だとか、少なくとも動物飼っていない人にはあまり縁のない犯人像が予想されてきた。それがここに来て、ガラリと変わった。犯人の目的は動物の虐殺、そのためなら鍵の一つや二つ破壊するヤバイ奴だ。当然人間だって危ない。

ただ――

「これを『また』の中に含めちゃうのはちょっと早とちりじゃない？」

「そうかしら？」

「そうよ。猫なんてどつかぶらついててなんぼみたいな生き物じゃない。まあ飼ったことないんだけど」

「もう、いい加減なんだから。でも、どうしてこれが図書掲示板に貼ってあるのかしら？」

ねえ、図書委員長さんと言う蘇子の顔には何だか知ったふうな笑み。

私は、わざと面倒くさそうに見えるような感じで、頭を掻く。

「あー、だって半泣きだったのよ？ それでここに貼って下さいなんてお願いされたら、断りきれないじゃない」

「ふふっ、優しい人ね大野木さんは。ちゃんと司書さんに許可はいただいたの？」

「うんや。でも、今のところ注意は受けてないから、見て見ぬフリしてくれてんのか、そもそも気付いてないのかもね」

軽く、肩を竦める。うん、やっぱりこんなもんだ。

出家さんはこのチラシを渡すとき、こう言った。マロンは家族の一員なんです——って。その一員が今、行方不明になっている。当の出家さんは必死だ。連絡先に何の躊躇いもなく自分のケータイ番号とメアド晒しちゃうくらい必死だ。イタ電やイタメがくるぞ。いや、この場合は単に出家さんの注意力の問題なのかもしれないけどさ。

で、その「必死」の四日後の結果がこれだ。当の本人にとってはどんなに大変な問題でも、所詮はこんなもんなんだ。例えばそれが、家族の一員がいなくなっただってという事態でも——。

家族の、一員？ ああ、そういうことか。

くしゃくしゃ頭を掻いた。正直自分でもわかってなかったのよね。チラシを受け取った理由。司書に叱られる可能性だって、まあそれなりにはあったのに貼っちゃった理由。家族の一員を失って必死になっている出家さんの姿に、私は自分を重ねていたんだ。

つくしを失って、どうしていいのかわからなくて、迷走していたあの頃の私を。

「ねえ蘇子」

「どうかした？」

「うん、何でもない。ただ、早く見付かればいいなって。そう思っただけ」

うつわバ。何か目頭熱くなってきた。ココとの一件以来何か涙腺緩みきってる。

思わず上を向いてしまう。って対処法ベタ過ぎだろ。坂本九か私は。

「悪いなんか変なとこ見せて。えっと、帰ろっか」

背を向ける。あー言った傍から鼻吸っちゃったけど、もうどうでもいいわ。

そうね、と背後で蘇子が言う。

「私も——そう思うわ」

反射的に動いた。肩越しに振り返って、蘇子の顔を見た。

そこには、目を丸くした蘇子の顔。紛れもない、いつも通りの藤枝蘇子。

「ごめん、なんでもないわ」

鼻を擦りながら笑って、すぐに向き直る。……うん、きっと気のせいだろう。

私もそう思う——その一言が、本当にこの娘の声なのって疑うくらい虚ろに聞こえたのは。

差していた日傘をくるくると回した。もちろん、意味なんてなかった。

枝葉越しの夕日が、足許にオレンジの水玉を作っている。赤い苔のない石段を踏む感触が、返って新鮮だった。

稲荷神社に行く、と決めるのにそう時間はかからなかった。鏡花さんたちにああ言ってしまった以上、家に帰るわけにはいかない。先に帰ってたからって何か言われるだなんて思わないけど、やつぱりダメ。そのあたりは向こうが良くても私が気になってしまう。

途中、パン屋さんに寄ってクリームパン二つとメロンパンを一つ買った。手ぶらで行ったら寂しかったから来たなんて言ってるようなものだから。

——面倒臭い性格。

鳥居をくぐって、臉に触れた。 視界 を切り換えようとして、

「え」

いつもの場所——ケヤキの下に、男の子が座っていた。

年は私と同じかやや上くらい。学ランはウチの中学のものだけど、知らない人だ。柳茶色の髪は女の子みたいに細くて、中性的な顔立ちをしている。胡坐をかいた膝の上に、黒白の縞模様をした猫が丸くなっていた。

どうしよう。気付かれないうちに帰ろうとしたところで、

「にゃあ」

……猫に気付かれた。

男の子が、顔を上げる。改めてみると、本当に色白だなんて思うでも、この人のは私みたく漂白されたような、濁りのある不自然な白さじゃない。心から綺麗だな、と思わせる純粋な白さだ。

男の子は小さく目を見張って、けどすぐに微笑んだ。

「こんにちは」

少し戸惑った。挨拶のときに使う笑顔は、もっと愛想のないものだと思っていたから。

「こ、こんにちは……」

挨拶と会釈のタイミングが重なり地面に落ちた。

僅かに視線だけ上げると、欠伸をしている猫が見えた。首輪は付けてなかった。

「飼い猫ですか？」

「いいや、野良猫だよ。神社の前をうろろしているのを偶然見付けたんだ」

男の子が、猫の頭に手を乗せる。猫は、その手に額をこすり付けて甘えてる。

「ただ、ヤケに人懐っこい奴だから迷い猫なのかも。それとも、この種類は皆こんな感じなのかな」

知ってる、と男の子が訊いてくる。

アメリカンショートヘアっていう名前なら知ってます、と言いかけてすんでのところで呑み込む。それじゃあ結局、質問の答えにはなっていないのに。

素直にかぶりを振った。

そっか残念だ、と男の子が大して残念ではなさそうに笑った。始めから期待なんてされていなかったんだろう――それがわかっていても別に嫌な気分はしなかった。

女の子みたいに細い手が、猫の喉を撫でる。ごろごろと猫の喉が鳴る。気持ちいいのかな。あつ、よく見るとお腹の模様って渦巻きなんだ、なんて見入っていると、不意にその手が止まった。

「触ってみる？」

男の子が、小首を傾げ微笑んだ。

「いいんですか？」

「いいんじゃない。まあ僕は飼い主じゃないし、それに、このままじゃ会話が続きそうになくて」

苦笑交じりのあまりに素直な言葉にびっくりする。

それが顔に出ていたのか、男の子はちよつと慌てた。

「あつ、違う違う。人と話すのは好きな方だし、人の話を聞くのも好きなんだ。でも――」

「得意じゃ……ない？」

「ああそう。得意じゃない。その言い方がいいね。苦手っていうより何だか救いがありそうに聞こえる」

小さく両手を挙げる男の子。どうぞ猫に触って下さいというジェスチャーらしい。

近付いて、スカートを整えながらしゃがみ込む。動物は好きだし可愛いと思うけど、本物に触ることってあんまりない。恐る恐る手を伸ばすと――シャーと鳴かれた。耳は反り、ヒゲはピンッと張っている。どう見ても威嚇されていた。

「嫌われてるみたいですね……」

「まさか。今日会ったばかりで好きも嫌いもないよ。きつと怖がられてるんだ」

今度は男の子の手が伸びる。けれど、それはするりと躲かわされて。

膝の上から飛び降りた猫は、あつこらつという男の子の声も聞かず、軽やかに賽銭箱の上へ跳び乗ると、さつきと同じように丸くなってしまった。

しばし、沈黙が降りた。

「ご、ごめんなさい」

言葉が口を突いて出た。男の子が小さくかぶりを振る。

「謝るようなことじゃないよ。その、ある意味貴重な瞬間というか、獲物を獲る以外であんなに素早く動くところ、初めて見た」

「励まそうとしてくれます？」

「口下手なりに。でも、困ったな。話のネタがなくなった」

冗談混じりにしては、飾り気がなさ過ぎて。つい笑ってしまった。男の子もつられたように笑う。笑い声が、木々のざわめきと溶け合って消えた。それくらい、ささやかなものだった。

さてと、と言って、鞆を持った男の子が立ち上がる。控え目にお

尻をはたいた。

「話のネタも去ってしまったし、僕はそろそろ帰ろうかな」

「えっ、帰るんですか」

「うん。だって君は元々僕が神社にいないと思ってここに来たんだろ？ だったらあんまり長居するのも悪いと思って。あつ、別に気は遣わないでくれよ。実際これから用事があるんだ」

それじゃあ、と右手を挙げて男の子はその場を立ち去ろうとする。その背中に会釈しようとして、でもそれだと男の子には見えないことに気付いて、どう声をかけようか迷っているうちに、

「あのっ、ま、待って下さい！」

呼び止めてしまった。

男の子が、不意をつかれたような表情で振り返った。どうしよう。もしかしたら本当に「用事」があつたかもしれないのに。

考えのまとまらないまま、とりあえず畳んだ日傘を腕に引つ掛け、紙袋に手を突っ込む。出てきたのは——ビニール袋に入ったクリームパン二個。それを背中に隠すように持って、メロンパンが入った紙袋を突き出す。

「こ、これ。よかつたら、どうぞ……」

な、何やってるの？ 私。

恥ずかしくて、男の子の顔が見れない。くすり、と笑ったような気配。

「ありがとう。大野木ココさん」

紙袋が手から離れる。

……あれ？ 驚いて顔を上げる。

「名前、知ってたんですか？」

「うん。有名じゃない。大野木さん」

有名、という言葉に首を傾げる。傾げてみて——すぐにうちの家族構成や自分の容姿を思い出して、納得がいった。そっか、今更だけどやっぱりうちって有名なんだ。

「気に障った？」

「えっ」

「いや、別に何でも。僕は三年の氷垣蓮太郎。ひがきれんたろう学校で会うようなことがあれば仲良く——と無理強いするのは悪いし、挨拶くらいしてくれれば嬉しいかな」

それじゃあ、と男の子——氷垣先輩が踵を返す。

その背中を、結局黙ったまま会釈で見送った。

やや汗ばんだ手の平を、じっと見詰める。

氷垣先輩に紙袋を手渡すとき、ほんの少しだけ手と手が触れ合った。男友達の一人もない私にとって玲一兄さん以外で初めて触る異性の手。なのに、それを嫌だとは思わなかったし、けど、少女マンガのヒロインみたくときめいたりもしなかった。

それが、不思議と言えば不思議だった。

放り上げた缶珈琲を片手でキャッチした。何てことない、ちよつとした手遊びだ。

校門で蘇子と別れたあと、私は独り杉林を歩いていった。人氣がない分、鳥のさえずりと私の足音が、余計デカく聞こえる。まだ踏み込むのに抵抗あると思ってたけど、割とイケるもんね。

ココはこの杉林でつくしの靴を探してくれた。ココに出来て私に出来ないワケが——なんてそんなことを言いたいわけじゃない。ただ、義妹に出来たことが出来ないっていうのが、少し悔しいだけ。

——つわっ、典型的な晶症候群だわコレ。

しばらくして「猛獣注意」の看板が杉に括られてるのを見付ける。段ボールにそう書いた紙を貼っただけで、プリントされているシルエットはどう見ても熊だった。まあ 狸 よりは説得力あるわよね。そう。あの日つくしを襲った猛獣の正体は、私しか知らない。

——私しか。

「マジで危機感あるならもうちょい入口近くに貼れっの」
その木に蹴りを入れようとして、でもモノに当たるのは子どもっぽ過ぎると考えて、結局舌打ちでシメる。

やがて、開けた場所に出た。ついこの前まで小学生たちの 秘密基地 だった分校跡地。

塗装がはげたブランコに、背を預ける。あの一件以来、ここで遊ぶ子たちを見かけることもなくなった。気のせいかな、ボロっつい遊具は前より色褪せて見える。まあ、これだって元々撤去される予定だったんだし、壊れた遊具使って子どもが怪我するよりは、今の方がずっとマシ。

けど——それはわかってても、この小さな無人の 秘密基地 は、射し込む夕日も手伝って、より一層センチメンタルに映った。

……感傷に浸るのはこの辺にしよう。私から頼んだ手前 あいつ

を待たせるのも悪い。

人差し指と中指で 視界 を切り換える。直後、髪をなびかせる微風が、葉の擦れあう音が、鳥のさえずりが、消えた。そつと眼を開ける。生気を失ったように見えた 秘密基地 が、「生命」のシンボルカラーに吞まれていた。

「中々に皮肉な光景ね」

なんて気取った台詞を誰に言うともなく呟く。いや、誰に言うともなくってというのは嘘だけどさ。

隣を見ると案の定、クロはそこにいた。影を地面に落とすことなく、スレスレで宙に浮いていた。赤いリボンを結んだシルクハット。すらりとした長身を包むのは、シャーロック・ホームズを思わせる黒いインバネスコート。ただ、波打つ裾はボロボロだから、探偵と言うよりむしろ砂漠の放浪者っぽい。白手袋を付けた手には、何とも風格漂うステッキがあつて、握り手にはパイプを仕込んでいる。

と、ここまで説明するとさて中身はどんな英国紳士か——となるところだろうけど、あいにくとクロにはその 中身 がない。シルクハットの中にも、コートの中にも、白手袋の中にも、黒煙が立ち込め渦を巻いているだけ。でも、ホントのところはこの服だって、黒煙で出来ているのかも。眼を凝らすと、向こうの景色がちよつと透けてるし。

お疲れさん、と缶珈琲をパス。

クロはそれを受け取ると、ありもしない首を傾げて見せた。

「何よ？ エメラルドマウンテンのブラックであつてでしょ」

『思うにささめ君はマゾヒストなのかね？』

開口一番とんでもないこと言いやがった。

「どういう意味？」

『いやなに。過去の傷口を眼に焼き付け決して忘れぬことこそ 克服 なり——それがささめ君の信条だと言うなら嘴くちばしを入れるは無粋というもの』

とはいえ、とクロはシルクハットのツバをちよいと下げる。

『何もその傷口を凝視し続けることはあるまいに』

過去の傷口——何のことを指してるのかくらい、すぐにわかった。「勘繰るのはやめて。別に他意はないわよ。ただこの村で今一番人目に付かない場所っていつたらここだって思っただけ」

『そうかい。ならいいんだがね』

缶珈琲を開けて、一息に呷るクロ。エセ英国紳士みたいなナリにくせに、飲み方はやたら男らしい。まあ、襟首の中に珈琲を注いだようにしか見えないんだけど。

「それにね、この場所だけどさ、つくしと一緒によく遊んだの」

ここに眠ってるのは、悪い思い出ばかりじゃない。

「だから 傷口 なんて、そんな風には言わないで」

クロは、襟首の中に空き缶を捨てた。バリバリムシャムシャなんて音は聞こえやしない。

『すまないささめ君。浅慮な発言だった』

「いいわよ別に。気にしないで。それよりささと本題に入りましょう。どう、何か収穫あった？」

頭に積もる苔を鬱陶しく思いながら、尋ねる。

そう。私はクロから 成果 を訊くためにここに来たんだ。

連続動物盗難事件に関する調査の成果を。

連続動物盗難事件の目撃者を捜してほしい——私がそうクロに頼んだのは四日前。きっかけは、出家さんのあの一言。もっとも、出家さんの件と事件に関わりがあるとは、正直思っていないんだけど。目撃者捜しとは言っても、地取り捜査ならとくに警察がやってる。そこで普通の女子中学生が首突っ込んだとこで、事態が好転するとは思えない。

でも、幸か不幸か——こっちは普通の女子中学生じゃない。

私たちの世界に目撃者がいないなら、 あいつら の世界から捜

せばいい。朝昼夜が存在しない世界で四六時中ワイワイやってる
あいつら なら、一匹くらい現場を見てたヤツがいたっておかし
くはない。

『収穫？ ああ、そういえば目撃者を捜して欲しいだのそんな頼み
ことがあったような気がするね』

顎に手を添えて頷くクロ。さも今思い出したって口ぶりだけど、
よくあるフリだから気にしない。

「そつ、それで、見つかった？」

『ああ見付けたとも。しかしだねささめ君。彼らから訊き出した証
言を信じるのであれば今回の事件、連続動物盗難事件ではなく正し
くは連続動物殺傷事件になるのだが、支障はないのかね？』

連続動物「盗難」事件が正確に言つと連続動物「殺傷」事件にな
る……？

ああ、一瞬意味がわからなかったけどそういうこと。要はその目
撃者は遭遇してしまつたんだ。動物が盗み出された先で殺害される
現場に。いや、一応補足しとくと四件目以外で動物が殺されたって
いうのは、私と世間の勝手な憶測に過ぎない。でも、間違つてはい
ないと思う。連れ出された動物は新たな飼主の許で幸せな日々を――
なんて誰が想像するかつての。

「ええ、多分ね。ちなみに殺害現場を見たつていうのは――」

『文字通りの意味だね。凶刃にかかつている最中を見たそうだし』

――最中？

「ウソ、いきなり決定打じゃない」

『嘘なものか。これは実しやかな世界ではなく現実の出来事だから
ね。解決まで順序良く運ぶこともあれば、そうならないことだって
ある』

至つて冷静なクロの言い分はごもつとも。これがもしミステリ小
説やドラマなら、現場から立ち去る怪しい人影程度の情報が出ると
こだ。

『一件目の目撃者である河童の河吉君かわきちの証言に寄ると、犯人は単独

で身長は約一七〇センチメートル、服装は黒のパーカーに黒のスラックス、体臭は十代と思しき男のものだったらしい」

か、河童の河吉？ 何そのたった今考えましたよ的なネーミングセンス。いやそれ以前に――

『ささめ君？ 具合でも優れないのかね』

「ああゴメン。平気だから続けて」

この村、河童いたのね。……うつわどうしよう。柄にもなくちよつとワクワクしてきたかも。とりあえず河童については一端保留。

あー謹聴^{きんてい}謹聴。

『この男と酷似した特徴を持つ人物が、二件目三件目いずれの現場でも目撃されている。それも犯行に興じている最中をね。河吉君を始め目撃者全員が七宝行者の幻術にでもかかっている限り、この男が犯人とみて間違いないだろう』

過疎ってるこの村で十代ねえ。もちろん他所者って線もありうるけど。

ん？ 二件目三件目？

「じゃあ、四件目はそいつ見なかったの？」

『ああそうだね。四件目では――見なかった。というより四件目自体の目撃者が見付からなかった』

……何よ。「四件目では」と「見なかった」の間にあった妙な間
は。

『誠に残念だがね。引き続き調査は行う予定だ。引き続きね』

間違いない。絶対何か隠してる。ただ困ったことに、コイツ嘘を吐くのは下手だけど口が固い。仕方ないから、骨の折れそうなことは後回しにする。

「そういえば、動物が運び出される現場に立ち会ったって奴はいなかった？」

『運び出される現場？』

「そ、殺してたのはそいつ独りでいいとして、他所に連れていくまで間、他に仲間はいなかったの？」

付き合いが長くなると、煙が立ち込めてるだけのスペースに、あ
るはずのない表情が見えてくる。多分こいつは今眉間に皺を寄せて
いる。

「何よクロ。私何か変なこと言った？」

『ふむ。どうやらささめ君と私の間には情報の齟齬があるようだね』
「齟齬？」

『ああ。今までの発言から察するに、ささめ君は一連の事件の動物
が皆いずこかに運び出されてから殺されているとそう推理している
のだろう？』

——推理？

「ちよつと待った。……あのねクロ。動物たちが飼われていた場所
とは別の場所で殺されたっていうのは私個人の推理じゃない。警察
や専門家が調べて出した事実なの。動物たちが飼われていた場所で
殺しは行われてない。それは三件とも一緒なのよ」

『ふむ、それでは河吉君を始め私が証言を聞いた目撃者は全員嘘を
吐いていることになるね。彼らは皆口を揃えてこう言ったよ。動物
たちは小屋あるいは檻から引きずり出された拳句その場で殺された
とね。ところでささめ君。君は何故三件の殺傷事件が小屋あるいは
檻から離れた別の場所で行われたと主張しているのかね。こうして
依頼するくらいなのだから当然君はその目でそれら一部始終を目撃
したわけではないのだろう』

仮にしていたところでささめ君に夜目は効かないだろうが、とク
ロは付け足した。

この手の発言に悪意はない。うん、コイツにはよくあることよ。
「そりゃあ証拠がなかったからね。警察が調べ回って、その結果そ
こで事件があったっていう痕跡が見付からなかった。それでその河
吉くんたちが殺されるところを見ましたっていうんなら、別の場所
でっていうのが普通でしょ？」

『証拠？ そのようなものいくらでも捏造できるだろうに』

「日本の警察は優秀よ？」

『それでも容易いことさ』

ほつそりとした指先が、ブランコに付いた苔をそつと摘まみ取る。

『これを使えばいい』

「いや、これってアンタ……」

『見ての通りささめ君もお世話になっっている赤い苔だね。通称ヒヒイロゴケ。ここでき繁殖することのない魔法の金属。天津教創始者である竹内巨磨たけうちきよまるが公開したという「竹内文書」。それに記されていたとされる幻の金属「ヒヒイロカネ」がその名の由来だ』

摘まんでいた苔を手の平に乗せ、凝視する。と、消しゴム大のそれが音もなくばらけた。破片から粒子へ。手の平サイズの竜巻になる。徐々に拳大の赤い何かへ。回転が止んだ。舞っていた苔が、ぎゅつと集まった。そこには——真つ赤な林檎が一つ。苔から生み出されたなんて嘘みたいな、フツ—の林檎。

『おひとついかがかね』

「要らないわ」

即答。あの過程を目の当たりにして、じゃあお言葉に甘えてとかいう奴がいたら見てみたい。

『それは残念』

空き缶同様、林檎はさつさと襟首の中へ。

『とまあこのようにヒヒイロゴケは我々の思念波動に反応することでその形状・性質を変える。有機物にも無機物にもね。これさえあれば物的証拠を排除しそこで起こった事実をなかったことにすることなど造作もない』

うん、クロの言う通り。そりゃこれさえあれば証拠の捏造なんて朝飯前だろう。でも——

「何言ってるのよ。苔をこんな風に操れるのは私やクロたちだけでしょ。それに、苔は向こうの世界へ持ち帰りできないじゃない。証拠の捏造がこれさえあればってのは確かだけど、まずこれを向こうへ持ち帰ることができなくちゃ——」

証拠の捏造なんて夢のまた夢——そう続けようとして、止めた。

おかしい。違和感がある。自分の言っていることの辻褄が合っていないような気がする。

苔は、向こうの世界へ、持ち帰られない……。

つくしはあっちの世界にいながら、こっちの世界にいる 狸 に殺された。

ヒヒイロゴケによって肉体を構成された 狸 に殺された。

じゃあ、それならまさか――

「妖怪なら――ヒヒイロゴケでも狭間を越えられる……？」

『その表現では語弊があるね。正しくは一定の条件下で越えることがあり得る』

「でも犯人は人間なんですよ？ 人間が動物を殺して現場の後片付けを妖怪がしてるっていうの？」

『おお流石はささめ君。聡明だね。ああそれと言い忘れていたんだが、河吉君らの証言に寄ると犯人は動物を殺したあとそのまま逃亡したらしい。屍体を現場から持ち去ることなくそのままね。そのあと屍体がどうなったのか、それは誰ひとり否誰一匹目撃していないというからそれはそれで可笑しな話だが、実際問題屍体は翌日跡形もなく消えているわけで。となると妖怪、か。まあその呼び名でも構わないだろう。あいつらが勝手に付けたあのカタカナ名前より余程愛着もある。話を戻そう。妖怪が現場に訪れたのは物的証拠を消し去るためというよりは屍体を攫いに来たのではないか――などと私は踏んでいる。事実そのような趣味趣向の妖怪が存在すると耳に挟んだことがあるのだよ』

死体を、攫う……？ いや、今更 あいつらの妙な趣味趣向なんかでは驚かない。

今、私がこいつに言いたいのは、訊きたいのは……っ！

「……ねえクロ」

『何かねささめ君』

「本当に、これは偶然なの？」

声が震える。人が動物を殺して、その死体を妖怪が攫う。まるで人と妖怪が協力関係にあるかのような構図。これじゃあ、これじゃあまるで――。

『それはこの人と妖怪の協力関係が意図的に作られたか否かを問うているのだね？ ふむ、言うまでもなくこれは憶測だが、多分彼。そう犯人君』

クロが、持っていたステッキからグリップを取り外した。パイプへと様変わりしたそれを咥える。火皿に煙草の葉っぱはつまっていない。それなのに、魔女の大窯から出てくるような緑色の煙が、ゆらゆらと細く立ち昇り始める。煙草みたいに鼻につく臭いはしない。

『ささめ君と同じで、視えているのではないかな』

こともなげにそう言って、煙を吐いた。

黒と緑が混ざり合った深い深い海の色だった。

この日記帳には、その日記こつた いいこと　しか書かない。
そんな自分ルールを作ってしまったことを、今すぐ後悔している。

どうしよう……。今日氷垣先輩と会ったことは　いいこと　の内に入るんだろうか。

結局、氷垣先輩が行ってしまったあと、私は　彼ら　とは会わなかった。会っておいた方が良かったとは思う。そうすれば、家の前で鏡花さんとはったり会って慌てることもなかったし、晩御飯の前にクリームパンを二つ、お腹に押し込む必要もなかっただろうからでも、止めておいた。無理だった。だって、きつとボスたちはあれを見ている。私と氷垣先輩のあのやり取りを。

『いやあーっ！　ちよつと見ました見ましたあ、そこ往く家政婦さん？　ウチのお嬢にっ。あの可愛かったオボコなお嬢にっ。男が出来ちゃいましたよオ・ト・コが！　しかもセンパイだってよセ・ン・パ・イ！　「千」に「パイ」とかまあナニそのイヤらしい響き！？　千回パイパイされちゃうってこと？　サウザンドパイパイ！？　まあいかがわしい！　イツソウハレンチ学園！　えーんえーんお嬢が穢されたよ。キズモノにされちゃったよ』

な、何今のヤケに本物に忠実な幻聴は……。ほてる頬を、両手で押さえる。何で私、あんなことしちゃったんだろう。

シャーペンでこつこつと机を叩きながら溜息を吐く。ああ、目がしばしばしてきた。振り返ると、私のベッドで寝ている晶が見えた。枕元のスタンドライトが、にやけた寝顔を照らしている。ライトが点けっぱなしなのは、ユキンコが寝るまで起きてるぞと豪語していたからで——結果はまあご覧の通り。鏡花さんに、今日は夜更かしするから他の部屋に行けと追い出されたい。……。うん、私とヒナちゃんに選択肢はないんだね。

座ったままうーんと伸びをする。やっぱり今日のことを書くのは止めた。彼らと会ったとき、今日のことを説明する苦勞を考えれば、あれが いいこと だったとは思えない。

日記帳を閉じて、灯りを消す。そつとヒナちゃんの隣に潜り込む。寝返りを打ち、身を寄せてきた。柑橘系のほかに甘酸っぱい匂い。同じシャンプーを使ってるはずなのに、どうして他の娘だとこんなにいい匂いがするんだろう。

ふと目覚まし時計を見ると、日がもうすぐ変わろうとしていた。こんなことでこんな時間まで悩んでいるなんて、近いうち鬱病にでもなりそう。苦笑しながら、スタンドライトを消した。

——左脚が熱く、重い。

膝の皿に浮き出た隻眼の猪がいなか嘶く。

昼休み。

笹ヶ瀬さんと二人で話し合った結果、お昼は晶たちと食べる事になった。決まってすぐツータールを解き手櫛で梳かし出す笹ヶ瀬さん。そのとき、へっこれでもうしずかちゃんへアーなんて呼ばせませんぜ晶先輩、とニヤニヤしていたところから思うに……結構根に持つタイプらしい。

笹ヶ瀬さんと二人、おしゃべりしながら廊下を歩く。窓から見える空は鮮やかな水色で、陽の光はぽかぽかと暖かい。身体を動かすのがあんまり好きじゃない私でも、ジョギングくらいならしてもいいかなあ——なんて思えるような天気。

両手には、まこ姉さん手製のお弁当がある。白地に青い六花模様のお弁当包みが私ので、黒地に金魚柄のが鏡花さんの分。ちなみに、このお弁当包みは私のセンスで選んだものじゃない。まこ姉さんがそれはもう屈託のない笑みで、これが似合うんじゃないかしらと選んでくれたものだ。……自分で言うのも難だけど、私は結構いい娘に育っていると思う。

「でもさー。失礼な話かもだけどちょっとビツクリだよ」

「何の話？」

「キョーちゃんのこと。寝不足で体調崩した〜ってお話」

なんか意外だよねと同意を求めてくる笹ヶ瀬さん。

——鏡花さんってそんなに早寝してるように見えるかな？

昼休みに入ってすぐのこと。鏡花さんは私と笹ヶ瀬さんに、今から保健室に行くとのこと、そしてお昼は要らないからお弁当は二人で食べるなりなんなり好きにして頂戴、ということを告げると、さつさと教室を出て行ってしまった。何でもここ最近の寝不足が祟ったせいか、体調が優れないらしい。

「そうかな？ 鏡花さんって家じゃ結構夜更かししてるほうだけど」
「あーいやそういうことじゃなくてさ。キョーちゃんってやること成すことイチル？ イッペン？ 一縷かなあうんや一片だ。ええつと一片の隙もない鉄の女つつーか、例えば夜更かしはしてても自己管理は徹底してそーじゃん？ だから意外だなーって」

鏡花さんが一片の隙もない鉄の女……。玲一兄さんの京都土産——赤い水引を花の形に結んだ可愛い指輪。それを貰い、瞬間湯沸かし器のように顔を真っ赤にした拳句、頭を抱えたままソファでごろごろ悶えまくっていたあの鏡花さんが鉄の女……。

思い出しているうち——笑みがこぼれた。

「……どったのユツキー？」

「うっんごめん。何でもない。ただそっか。鏡花さんが鉄の女かなにさーとわき腹を肘で小突いてくる笹ヶ瀬さん。やめてよもう、くすぐりたい。うん、この楽しみを笹ヶ瀬さんと共有したいって思いついもあるけど、やっぱり教えるのは止そう。そこは鏡花さんの女の子の部分。だし、私しか知らない楽しみっていうのも、あった方がいいと思う。」

——これくらいの優越感なら、きっとバチは当たらないだろう。

行く手に、一人の男子を見つける。つい歩みを止めてしまった。

氷垣蓮太郎先輩。

クラスメイトの名前すらままならない私が、三日前に一度聞いただけの名前を、しかもフルネームで憶えていることに内心驚く。

氷垣先輩は目が合うと、心持丸まって見えた背筋を伸ばしてから、軽く右手を挙げた。私の隣に笹ヶ瀬さんがいるせいか、どこかぎこちない、照れくさそうな笑顔だった。

「こんにちは」

「あつ、はい。こんにちは」

お互い足を止めたわりに、余所余所しい挨拶。

「およつ？ なになにユツキーの友だち？」

眼を爛々と輝かせながら、笹ヶ瀬さんが間に割り込んできた。

「あつ、あたしユツキーの友だちで笹ヶ瀬衛つて言います」

どーぞよろしくと朗らかに言つて、ぺこりと頭を下げる笹ヶ瀬さん。

「ああ、僕は三年の氷垣蓮太郎。大野木さんとは——まあ友だちといえは友だちかな」

氷垣先輩が曖昧に笑う。しばしアイコンタクト。似たような笑みで私も頷いた。

「あははそうなんですかー」

棒読みの笹ヶ瀬さん。と、二の腕を引っぱられ耳打ちされる。

「学ランの似合わない先輩さんだねユツキー」

「……それ、今ここでする話？」

確かにブレザーの方がしっくりくるなあとは思っけど。

「あー違う違う今のはミスだよミステイク。ほらあたしって思ったことすぐ口に出ちゃうタイプだからさ。で、どうすんのユツキー？」

「え、何の話？」

「何の話って晶先輩だよ。このこと黙ってた方がいーよね？」

……ごめん。本気で意味がわからない。

「あのお。どうしてこの流れで晶が出てきたの、かな？」

「えーっ！ だってさー！」

唐突にポリウムを増す笹ヶ瀬さんボイス。咄嗟に顔を離す。

「あつと、ごめんごめん」

再び耳許に顔を寄せてくる。も、もう少しそこらへん気を遣って

「だってユツキーと氷垣先輩って付き合ってるんでしょ？」

不思議と、顔は熱くならなかった。

付き合ってる——その言葉が、名前すら知らない外国の言葉のよ
うに聞こえた。

この感じには憶えがある。これは、稲荷神社で偶然氷垣先輩の手
に触れてしまったときの、あの感じ。

「ところで氷垣先輩。あの猫元気にしてますか？」

やんわりと笹ヶ瀬さんを押して、尋ねる。自分でも信じられ
ないくらい冷静な対応。……うん、笹ヶ瀬さんが何やら不服そうだ
けど気にしない。

「ああ、あの猫のことだね。残念だけどあれから神社には行ってな
いから、よくわからないんだ」

そうですかと私は返す。本当に気になって訊いたわけではないか
ら、それ以上の感想はない。

「ただ、ちよつと心配かな」

「心配？」

「うん。ほら最近この辺りでちよつとした騒ぎになってるだろう？」

——この辺りで、騒ぎ？

「それって——」

「それってもしかして悠朝村連続動物盗難事件のことじゃないです
か！？」

笹ヶ瀬さんが、間に身を乗り出して来た。少し身を引く氷垣先輩。

「ああそうだね。確かそんな感じの、大仰な名前が付いていた」

「名前だけじゃなくて実際オオギョウですよ！ 何せただの盗難じ

やないんです。足跡も指紋も凶器も血痕も、まあ檻だか柵だかが壊されてるのと四件目のウサギは別にして、ありとあらゆる物的証拠を現場に残すことなく動物を攫って行くまさに現代の怪盗が今この村に潜伏してるかもなんですよ！ 充分才オギョウじゃないですか！」

あはははそうかもね、と話を聞いていてもいなくてもできるような返事。

「大野木さんはどう？ 事件のこと知ってた？」

「いえ、私はその、名前くらいしか。……新聞やテレビってあんまり観なくて」

氷垣先輩がそっか知らなかったのか、と落とすように笑った。

——その笑顔が、何故だか一瞬、少し寂しそうに見えたのは私の気のせいだろうか。

別に誰が頼んだわけでもないのに、笹ヶ瀬さんは事件について説明してくれた。

これまでになくなった動物はペットの犬二匹と家畜の鶏十羽。そして小学校で飼っていたウサギ八匹。ただしウサギが被害にあった四件目は、笹ヶ瀬さん曰く模倣犯の仕業なのでノーカンらしい。

そんな物騒なことをやった人が今もこの村のどこかにいるかも——なんて考えると怖いと思う。でも、大げさな事件名から身構えていた分、いざ内容を聞かされるとちよつと拍子抜けだった。

ふと氷垣先輩の方を見ると、目が合った。

「中々面白い娘だね」

耳打ちされた。同じ年くらいの異性に自然とこういう真似ができるのだから、この人は大人しそうに見えて案外遊んでいる人なのかもしれない。

「ある意味で、ですか？」

「まさか。そのままの意味だよ」

肩をすくめて笑う。確かにその通りだと思ったのでつられて笑っ

た。

「——と、まあ以上が悠朝村連続動物盗難事件の一般的なケンカイツてやつです」

そうこうしている内に笹ヶ瀬さんの話は終わってしまったらしい。

「おー鮮やか鮮やか」

氷垣先輩がよくわからない褒め言葉と一緒に拍手を送った。

「あははおだてるときは気を付けて下さいよ」先輩。あたし褒められると伸びる娘ですけど、度が過ぎるとそのままブレーキ効かなくなるタイプなんで。それに本番はまだこれからですよ？」

ああ、その辺の自己分析はちゃんと——えっ、本番？

「本番が、あるの？」

「モッチーのロンだよツッキー。さっきまでの言わばお膳立て。私の推理ショーにのめり込んでもらうための布石だよ」

……のめり込まなくちゃ駄目なんだ。

「さあて、ぶつちやけこの怪事件の犯人——何だと思う？」

「『何』って——『誰』、じゃなくって？」

「おっさすがはユツキー。良いトコに目え付けたね。うん、ユツキーの言うとおり、注目するのはそこなんだよ」

「えっと、それってつまり——」

「犯人は人間じゃないってことだね」

現実離れし過ぎて躊躇われたそれを、氷垣先輩はあっさり口にした。

「そゆことです。動物を誘拐する際殺してから攫ったんだって考え方が、そもそもマズインですよ。犬二匹に鶏十羽を傷付けることなく生かしたまま、しかも現場にほとんど証拠を残さず攫う手段が犯人にはあった。まずはそこから考えなくっちゃ」

動物を生かしたまま持ち出す……。睡眠薬入りのエサとか？ あつ、でもどのみち敷地内には入らないとあげられないか。うーん、何だかんだで真面目に考えちゃってるし。

「ねえ、笹ヶ瀬さん」

「うん？ なあにユツキー」

「推理シヨ―ってことはさ、その、笹ヶ瀬さんは事件の犯人に心当たりがあるってことだよな？」

「うん！」

あ、あるんだ……。

でも、人間以外の『何か』っていったら。

「いいーい？ 悠朝村連続動物盗難事件の犯人。それはズバリ――」
もしかして、つくしちゃんのと看みたいに、また――。

「宇宙人ですよ！」

そっか。宇宙人が……って、えっ？

そう高らかに宣言した笹ヶ瀬さんの後ろを、一人の女子生徒が通って行った。同じクラスで、名前はたしか松本さん。親しみやすい性格で、学校では偶におしゃべりをしている。

目が合った。何とも言えない目でこっちを見ていた。いたたまれない気持ちになって、目を逸らした。

隣の氷垣先輩はというと、

「中々面白い娘だね」

どこか固い微笑みを浮かべたまま、聞き覚えのある台詞を言った。
「ちょ、ちょっとなにその二人揃って鳩が豆鉄砲食らった現場にリアルで居合わせてしまったようなりアクションは！ ビックリするならさあ、もっとこう純粹にビックリしようよ！」

「ええっと、まずはどこから宇宙人が出てきたのか訊いても？」

「いいですよ。っとその前に氷垣先輩。えっと、今日会ったばかりの人にいきなりでキョーシユクですけど、グロイのって平気だったりします？」

「B級のスプラッタホラーなら偶に観るけど」

「おお！ じゃあダイジヨブですね」

笹ヶ瀬さんがポケットから携帯を取り出す。もしかして――

「…… のっぺらぼう？」

「うん、この前キョーちゃんと図書室行ったときにね、こっちに画像送つといたの」

「 のっぺらぼう って？」

「ああ、氷垣先輩は知らなかったんですね。まあ説明は観てもらってからってことで。で、どうする？ ユツキーも観ちゃう？」

「なんとなく身を固くしてしまう。ここで振ってくるなんて。迷った挙句、私は――」

「ごめん止めとく。私そういう耐性って、あんまりないから」

控え目に微笑んで、断った。グロテスクなものに対する耐性が低いっていうのは、一応本当。でも、本音を言っと のっぺらぼうに対しては無関心でいようと意地になっているのかもしれない。

謝ることないよと、笹ヶ瀬さんが笑って、氷垣先輩の隣に立った。二人で身を寄せ合うようにして、一つの携帯を覗き込む。

「これが言ってた のっぺらぼう ですよ！氷垣先輩」

のっぺらぼう を目にした途端、氷垣先輩の表情が幽かに陰しくなったように見えた。

「これは…… 何処で？」

「どこでって…… @ちゃんのオカ板をテキストに観て回ってたら偶然――」

「いや、そうじゃなくてさ。……これは、何処で撮影されたモノなのかな？」

さっきよりも「何処で」の部分を強調して、氷垣先輩が訊き直した。

「ふふふつ、よくぞ訊いてくれました氷垣先輩。……実はコレ、何を隠そうあの珠置山で撮られたものなんです」

「珠置山って…… 学校の裏の？」

「ええモチですとも。ところで氷垣先輩、この のっぺらぼう を観て何かこう脳ミソにアハツと来ませんでしたか？」

アハツと？ 聞き慣れない擬音に、私と氷垣先輩が首を傾げたの

はほぼ同時だった。

「アハ体験って言うじゃん。何かひらめいたりするとき」

「いや、言うけど……」

「ええっと、要はこれを観て何かしら思い当たるものがないかってことかな？」

「まっ、そゆことです。で、どーですコレ。なんか皆がよく知るアレにすっごい似てると思いませんか？」

皆がよく知るアレ……？

「もしかして、これが宇宙人だって言いたいのかい？」

携帯の画面を指差す氷垣先輩。いや、いくら笹ヶ瀬さんでも……。ですよねですよね！？ どう見たってこれグレイタイプの宇宙人ですよ！ 肌の色とかマンマじゃないですか！」

ああ……やっぱりそうくるんだ。

「グレイタイプって言うと——」

「そうそう！ こーんなツリ目のヤツね」

わざわざ自分の顔を使って実演。氷垣先輩が、口許を隠しつつ小さく吹き出す。

「もーっ先輩笑い事じゃないですよ！ 真剣な話をしてるんですから！」

……真剣な話だったんだ。

まあそれはともかく、笹ヶ瀬さんの話に寄ればグレイタイプとは私たちが「宇宙人」と聞いたとき多分最もイメージしやすいあの姿を指すのだろう。銀色の肌、洋ナシみたいな形の頭、黒くて大きなツリ目、小さい鼻と口、細い手足。

「うん。どう見たって宇宙人かとはともかく少なくとも地球人には見えないね」

「でしょ？ で、それでこの宇宙人が今珠置山にいるわけですよ」

「うん。それはさっき聞いたよ」

「……えーと、氷垣先輩。珠置山ってどこにありましたっけ？」

「どこって悠朝^{ウチ}中の裏手だけ。……それがどうかした？」

笹ヶ瀬さんが大げさに肩を落とした。それから咳払い一つ、声を高くした。

「ですから、この のっぺらぼう こと宇宙人が悠朝村連続動物盗難事件の犯人なんですってば！」

……うわあ。

苦笑しつつ、氷垣先輩を見た。それで——ちよつとだけ驚いた。氷垣先輩の顔には、やせがまんしているときの笑みが浮かんでいた。

何でそんなことがわかるのって言ったら、私はこれをよく知っているから。

これは——他でもない私が、よく使^かう表情だから。

「周囲に血痕の跡がなく、現場へ向かう足跡や去っていく足跡も見付からない。とどのつまりこれはヒトによる動物盗難事件じゃなくて、宇宙人による生体実験——^{キヤトルミューテイレーション}新^{キヤトルミューテイレーション}手の動物虐殺なんですよ」

……そもそもどうしてこんな話題になったんだろっ。

氷垣先輩に猫の話を使ったから？ そう、それがきっかけだったはず。

「キヤトルミューテイレーション……？」

「はい。キヤトルミューテイレーションっていうのは、アメリカで報告されてる家畜が変な方法で殺される事件の総称で——」

家畜が、動物が、変な方法を使って殺される……。

ああ、ようやく気付けた。氷垣先輩が、どうしてこんな顔をしなければいけないのか。

「心配——してたんだ」

私のか弱い声はその割によく通って、笹ヶ瀬さんの言葉を遮った。二人の視線が注がれる。目を伏せた。でも、自分が言わなくちゃ

と思った。今から自分が伝えようとしていることは、大切なことなんだと思えた。だから――続けた。

「あのね、笹ヶ瀬さん」

「う、うん」

「この話、もう止めにしない……？」

笹ヶ瀬さんが、息を呑む感じがした。

「そ、そうだねっ。あんまり長引いちやうと先輩にも迷惑――」

「違うよ。そうじゃない。心配してたんだよ。氷垣先輩は」

「……心配？」

「猫のこと、心配してたんだよ」

ようやく視線を上げた。笹ヶ瀬さんの気不味そうな顔が見えた。

「それなのに、そんな不安を煽るような話、することないと思う」

笹ヶ瀬さんが、力無く頷いた。本当は俯いたのかもしれない。その反応に、自分が何だか悪いことをしているような気分になつてくる。

「あのね、笹ヶ瀬さん。もし私が大切な人を傷付けられたりして、それを のっぺらぼう がやった、宇宙人の仕業なんだって、本気でも冗談でも言われたら、私はすっごく傷付くと思う。だって のっぺらぼう も宇宙人も、ホントにいるかどうかわからないんだもの。笹ヶ瀬さんはいるんだって信じてるんだろっし、私も地球人がいるくらいなんだからいたっていいんじゃないかなって思う。でも、それは可能性のお話でホントのことじゃない。そういう趣味は好きないよって言いたいわけじゃないの。ただ、大切な誰かがいなくなつてゐることは現実だから。それを、いるかいなくてもわからないモノのせいにしてほしくない――そう思ったんだ」

言い終えて思い出すのは、もうこの世にいないつくしちゃんのこと。

つくしちゃんは 狸 に殺された。

私ひとりの幻覚に過ぎないと思っていた不確かな存在に命を奪われた。

もしあれが人の犯行だったら？ 本当に動物がやったのなら？

——私は、こんなにも必死になっていたのかな。

「ごめん」

「謝ること、ないじゃん」

後ろで手を組んだ笹ヶ瀬さんが——笑う。思わず目を見張った。

だって、それはついさっきまで氷垣先輩が浮かべていたものと、酷く似ていたから。私がよく使うそれと、痛いくらいおんなじだったから——

「で、でも……っ」

「きつとユツキーが、ユツキーの言ってることが正しいんだから」

笹ヶ瀬さんの言葉は、まるで自分自身に言い聞かせているかのよう。
うで。

またやつちやったな、という呟きが、やけに耳に残った。

ぼーっとしたまま午後の授業を過ごして放課後。

オレンジ色に満ちた廊下を歩く。教室に他の生徒の姿はない。

晶からは一緒に帰るか、なんて誘われたけれど、なんとなく断ってしまった。

本好きでもないのに、よくもあれだけ図書室で時間を潰せたものだと思う。どうせなら、明日の国語の宿題でもやってた方がよかったかも。

それで、どうしてそんな時間の過ごし方をしていたのかというと、それは多分認めたくなかったから。

笹ヶ瀬さんが、友だちが一人いないだけで学校に居場所がなくなってしまう——そんな現実を。

氷垣先輩と別れたあと、私と笹ヶ瀬さんは晶とお昼を食べた。ささめ姉さんと藤枝先輩はいなかった。何でも昼休みに入ってすぐ藤枝先輩が気分が悪いと言って、ささめ姉さんと一緒に保健室へ行ってしまったらしい。藤枝はともかくささめんは帰ってくるだろ、と晶は言っていたけど、結局二人とも戻ってこなかった。

そういえば、鏡花さんも保健室にいたんだっけ。知り合いが二人同じタイミングでなんて、珍しいこともあるものだと思う。

笹ヶ瀬さんはいつも通りに見えた。お昼を食べていたときも、休み時間に声をかけてくれたときも。まるで、昼休みに私が言ったことなんて全て忘れてしまったみたいに。

もっと怒られると思った。もっと反論されと思った。笹ヶ瀬さんが「ある」と信じて止まないものを、不確かなものだと言って切り捨ててしまったのだから。なのに、それがなかった分余計に——真剣に悩んでいる自分がバカみたいに思えた。

昼休みが終わり教室を出ようとして、晶に呼び止められた。振り返ろうとして、耳打ちされた。

——悩んでることあんなら、言ってもいいからな。今ならほつぺにチュー一回で助けてやつから。

……あの一言さえなければ、割と本気で尊敬できる義姉なのに。そこが晶らしいといえれば晶らしいんだけど。でも、あのタイミングで言っただけ……。

「やっぱり、気付いてたんだろ……」

私と笹ヶ瀬さんの間に何かがあったことに。

——何か？

ただでさえ他人より遅い歩調が緩む。何かって何だろう……。口ゲンカと呼ぶのは、どうも違う気がする。でも、結果として私は笹ヶ瀬さんを傷付けてしまった。

「じゃあ……、やっぱり口ゲンカだったのかな」

昇降口に辿り着いた。そこから覗く茜色の空を、何気なく見詰める。たなびく雲は赤とも橙色とも紫ともつかない曖昧な色。ふと、

下駄箱に笹ヶ瀬さんの靴があるのが眼に止まった。

「笹ヶ瀬さん、まだ帰ってなかったんだ……」

どこかの教室でおしゃべりでもしてるのかな……。

そう思っ、下駄箱の運動靴に指をかけたところで、手を止めた。俯き気味のまま、瞬き一つできず、静かに息を呑む。

すぐ傍に——いる。

『……クナ』

不意に、男性とも女性とも付かない声が、頭の中に響いた。

視線をゆつくりと 彼へ移した。空間が陽炎のように揺らめいている——ような気がする。

「大丈夫……、攻撃したりしないから」

そりそりと視界を切り替える。

眼に滲むくらい強烈な赤い世界に——真つ白な膚の 豚 ^{はだ} がいた。実際には、豚とは程遠い生き物。ただ、太った胴体に短い四肢の

付いた姿が、豚を連想させた。顔には目も鼻も口も耳も見当たらない。まるで、あえて細部だけは作らなかった、というより作ってから削ぎ落としたかのような粘土細工。

「あ、あの……」

『近付クナ』

「えっ」

『教室二、近付クナ』

教室？ それってどこの？ そう訊こうとして、ぞっと背筋が震えた。弾かれたように天井を見上げた。幻視する。天井を越えたその先、二階にある私の、二年生の教室。そこにいるかもしれない、たった一人の 友だち の姿。

「……笹ヶ瀬さん？」

頭の中を駆け廻る、笹ヶ瀬さんと出会ってから今日までの日々。

——えっ、ココ……ちゃん？ うっそお！ ゆきって名前だからユキンコじゃなかったの？

……まさか。

——だーかーらー、三人で のっぺらぼう を見に行こうって言ったの。

教室ってというのは。

——きつとユッキーが、ユッキーの言ってることが正しいんだから。

それは、どこか大人びて見えた笑顔を最後に、ぐにやりと歪んで消えてしまった。

『大野木ココハ近付クナ』

豚 の顔下半分に刻まれる漢数字の「一」。続いて、ぶちぶちぶち……とゴムが千切れるような音。「一」が広がるにつれ、上顎と下顎を繋ぐ膚と繊維みたいなものが裂けていく。千切れた繊維が、ぴしやりと 豚 の顔を叩いて、「一」は——口になった。

『笹ヶ瀬衛二——近付クナ』

「笹ヶ瀬さんを……どうする気……？」

豚 は応えない。しゅーしゅーという呼吸音だけが聞こえる。そこで、はつとした。

変だ……。呼吸の聞こえる方向が明らかに多い。辺りを見回して、
「え——」

目を、疑った。

苔に覆われていた地面から、次々と 豚 が這い出して来ていた。あっちからも、こっちからも、そっちからも。元からそこに潜んでいたのではなく、今まさにそこから誕生したという感じ。のろのろとどこか安定しない動きには、「生まれたて」という言葉がしつくりくる。

『武器ヲ捨テロ』

武器……？ 視線を日傘へ落とす。これが武器になるって知ってるの？

『武器ヲ捨テテ此処カラ去レ』

豚 たちが近付いてくる。チリチリと灼^やかれるような圧迫感。

「わかった……」

日傘の石突^{てっぺん}を、大袈裟な動きで地面に刺した。豚 たちの注意が、一斉に日傘へと注がれる。思った通り。この 豚 たち、私にはこれしかないと思ってる。つまり あれ は知らないんだ。

下駄箱に付いた苔を^{むし}り取って、二つに分ける。

一つは家の鍵が入っているスカートのポケットへ。

そしてもう一つは——耳の中へ。脳の奥深くへ。

日傘を手離す。それが徐々に傾いていくのを眺めながら、耳の中を蜘蛛が這い進む感覚に、ああそろそろかな、と思っていると——来た。地面が割れた。呑み込まれる。ただの浮遊感。現実じゃない。なのに、心臓がきゅうと絞り上げられる。踏み締めている感覚が戻った。わずか一、二秒のダイブを終え、すぐさま駆けつけた。

イメージするのは—— 狼 。静寂に満ちた白樺林を駆け抜ける一陣の疾風^{はやて}。仲間がいなくても決して挫けぬ心を持った孤高の獣。

ダッシュの勢いはそのままに、後ろ廻し蹴りを叩き込む。粘土の塊を蹴ったような感触があつて、ふっ飛んだ豚が二転三転する。と、背後から圧迫感。振り向き様、拳に掌を添えて肘打ち、飛び掛かつて来た豚を地に墮とす。転がつてびくびくしているその向こうに日傘が見えるけど、拾いに行つて暇はない。もう、行くしかないんだ。

走り出すと、目の前の苔から豚が飛び出した。その背中を、前廻り受身の要領で転がつて、やり過ぎす。階段には、数匹の豚がすでに固まっている。

ポケットからそれを掴んで抜いた。それは、一振りのナイフ――豚たちが日傘に集中していたあるとき、家の鍵を素体にして作つておいた私の武器。どんな速さの一閃でも空気を抉つて食らうという属性だけは、何とか付加できた。

それならもういい。充分だ。充分過ぎるくらい――デタラメだ。体当たりするような気持ちで、真っ直ぐ突き出す。切っ先が一体の豚に触れた。刺すまでもなく、そこからざあっと赤が広がつて、弾けた。傍にいた豚たちも、次から次へと破裂していく。どうしてそうなるのかはわからない。でも、どうだっていいと思う。だって、そういうものなんだから。そういう風に出て来るんだから。頭から苔を被りながら、ナイフをくるりと逆手持ちにする。振り返るまでもない。後ろから来た、さっきやり過ぎしたヤツを、殴りつけるように突き刺した。爆発。その勢いに後押しされながら、私は階段を一段飛ばしで駆け上がった。

違和感に気付いたのは、二階廊下で豚二匹を仕留めたあと。「どうして――」

誰も追つて来ないの？
ズキリ、と頭が痛んだ。酸が脳みそを溶かしているかのような不快感。寄りかかった壁に爪を立てる。

武器の精製に、疑似憑依。どっちもボスたちの助けがあつて、よ

うやく形になるもののな。

壁に手を付いて歩く。教室に着いたけど、苔が窓に張り付いているから、中は見えない。心持強めに戸を引いた。溝に溜まっていた苔が、じゃりじゃり音を立てた。

そこに、笹ヶ瀬さんはいた。

机と椅子が全て壁際に追い遣られた教室の真ん中、宝物みたいに横たわっていた。

近付いて、ぺたんと座り込んだ。顔を覗き込むと、うつすら苔が付いている。そういえば寝顔見るのって初めてかも。あつ、でも居眠りしてるときのなら見たことあったつけ。場違いな思い出し笑いをする。

視線を胸許に下ろした。小さく上下していた。

「よかった……」

笹ヶ瀬さんが、私の友だちがまだ生きている。私は守ることができたんだ……。

「本当に……よかった」

抱き起そうと手を伸ばして、すぐさま引っ込める。無闇に動かしたりするのはきつと良くない。いくら怪我をしているように見えな

いからって――

「――」

ちょっと待つて。笹ヶ瀬さんは一体いつからここにいたの？ 私が図書室でのんびり過ごしている間もずっとこのままだったの？

じとりとした嫌な汗が浮かぶ。

ああ、そうか……。普通そうだ。笹ヶ瀬さんを傷付けたいだけなら、普通あそこで声をかけたりはしない。ましてや教室に近寄るなどなんて、そんな場所まですぐわかるようなこと言ったりしない。追ってこない。豚の群れ、傷一つない笹ヶ瀬さん、頼れる仲間はずいぶん傍にいないで、唯一の武器はナイフのみ。

どう考えたって、これは――。

不意に、右側から吹き付ける風、ひゅんつと空を切る音。

一瞬だった。派手に机の倒れる音がして、気がつけば床に転がっていた。

右の脇腹が熱い。でも、起き上がれないほどじゃない。狼の効果で、痛覚がマヒしてるんだ。ナイフを握っていることを確認し、顔を上げて――言葉を、失くした。

真っ白な膚をしたニンゲンがいた。

顔に目と鼻はなく、付いているのはあの「口」だけ。毛のない身体に、服を纏まとってははいない。身長は多分一七〇と少し。軽く猫背だから、低めに見えるのかもしれない。

会ったのはこれが初めて。でも、私は彼を知っている。だって聞かされたばかりだから。彼に纏まとわる話を。他でもないこの娘、笹ヶ瀬さんの口から。

「のっぺら……ぼっ……」

彼――のっぺらぼっが両膝を曲げた。両腕を大きく後ろへ反らし、深く腰を落とす。ぎちぎちと白い筋肉が引き絞られ、軋こむ気配。

直後、消えた。

「えっ」

と、頭上から迫る圧迫感。まずいと思い、力一杯真横に跳ぶ。肩から壁にぶつかった。突然過ぎて力加減ができなかったせいだ。のっぺらぼっが、ついさっきまで私のいた所にしゃがんでいた。土埃のように宙を舞う苔。眼が合った。向こうにそれはついていないのだけれど、そう言ってもいいと思う。のっぺらぼっの両脚が、いきなり伸びた。床を蹴ったんだとわかったときにはもう、目の前に白い貌。退こうとする私の足を刈るように、下段蹴りがくる。ジャンプし、躲せたと思ったところで、ひゅんっという音。そのとき頭を抱えるようにガードしたのは、ほぼ反射だった。

びしゃりと。鞭を打ったような音。衝撃に、左腕が有り得ないくらいしなる。蹴られたんだ。黒板に叩きつけられ床へ。背中にはらばら降りかかっているのは、黒板から剥がれた苔だろうか。

左腕を見ると、

「ひっ」

骨が外に飛び出していた。込み上げてきたものを顔に力を入れて耐える。それを飲み込んで、飲み切って、咳き込んだ。喉がひり付く。狼の効果でほぼ無痛なのが、返って怖い。

起き上がり、ヤケ気味に一閃、空気の刃を放つ。のつぺらぼうが空手の上段受けみたいな動きで腕を振るった。何故か、廊下側の窓ガラスが甲高い音を立てて割れた。もしかして、今ので軌道を？

「嘘……」

笹ヶ瀬さんを見る。独りで逃げるわけにはいかない。一体どうすれば――

と、のつぺらぼうの身体がぐらついた。頭を抱えると、いきなり蹲うずくまってしまった。

『……イ。……五月蠅ウルサイ』

「えっ？」

『五月蠅インダ。凄ク』

「うるさいって――」

何が？

のつぺらぼうは苦しみながらも、流れるように言葉を連ねていく。

『躰ノ中デ魂ガ騒グンダ。暴レ回ルンダ。ダカラ五月蠅インダ。トテモトテモ五月蠅インダ』

わからない。

『太陽ノ象徴ノ鳴キ声ガ、死ノ夜ノ中デ魂ヲ導ク者ノ吠エ声ガ、羽ガ邪魔デ尻尾ガ鬱陶シクテ、溶ケテ混ザッテ一緒ニナロウト囁クンダ』

わからない。わからない。何のことを言ってるのかちつともわからない。

『ソナ風ニ嘯ウツイテ俺ノ居場所ヲ奪ウンダ。合ワセテ十二ノ魂ガ俺ヲ奈落ニ追イ遣ッテ居ナカタコトニスルンダ。深い深い闇ノ底デ

俺ノ名前ヲ奪ウツモリナンド。ソウハサセナイ。サセルモノカ。コノ駄ヲアケワタスモノカ』

でも、とてつもなく――

『消エテ仕舞エ。コノ夜ノ世界ゴト』

嫌な予感が、する……っ！

駆け出した。とにかく先手を打たないと。のっぺらぼうが立ち上がる。ふらつきながら、それでも脚を後ろへ引き、前蹴りを放つ。私は跳び上がった。頭が天井に触れるくらい高いジャンプ。落ちながらのっぺらぼうの顔に膝を押し込み、そのまま押し掛かるようにして、馬乗りになる。

――勝てる！

両手でナイフを振り上げる。そして、とどめを刺そうとした矢先――見た。

のっぺらぼうの顔の真ん中に「穴」が開いているのを。

いや、「穴」なんかじゃない。これは「口」だ。さっきまで欠けた月の形をしていたそれが、丸くなっただけだ。それこそ満月のように。視線が吸い寄せられる。歯も舌も付いていない。果てしなく続いている。まるで、井戸を覗き込んでいるみたい――

のっぺらぼうが、啼いた。

頭の中から響いてくるものではなくて、確かに鼓膜を震わせるリアルな音。

耳を塞いだ。男性とも女性とも子どもともお年寄りとも付かないとにかくこの世のものとは思えない絶叫が、テレビの砂嵐と混じって聞こえるような気持の悪さ。きつく瞑った目に涙が滲んだ。

ややあつて――啼き声が止んで。

「どうして――」

教室にいた。「いつもの教室」だった。彼ら もいない。赤い苔もない。人間の、私たちの世界。日常の一部。妙に暗いのは、窓の外側に苔が張り付いているせい。教室は私たちの世界、しかし外は 彼ら の世界。

「これじゃあ、まるで……」

私たちと 彼ら の世界。その境界線上にいるかのような――。がつんと後頭部に一撃。額から脳みそが飛び出るかと思った。前のめりになったところで、頭を掴まれる。ナイフを使おうとして、気付いた。持っているのは、ただの家の鍵だった。

ああ、そつか。そりゃそうだよな。苔がないんじゃ当たり前だ。人間の世界じゃ私なんて、普通の女子中学生だ。要領悪くて、口下手で、いつも義姉や義妹たちの後ろにこそこそ身を隠している――独りじゃ何にも出来ない、ただの小娘だ。

「ごめんね」

私、誰に謝ってるんだろ。

横へ放り投げられた。壁に背中からぶつかった。

霞んだ視界の中、白い何かが血溜まりに転がっていた。

千切れた左腕だった。肉までボロボロで腐ったバナナみたいだった。

私、死んじゃうんだ。笹ヶ瀬さんを守れずに。

――きっとユッキーが、ユッキーの言っていることが正しいんだから。

どうして、ここで浮かぶかな。

良くないと思う。これだとまるで、笹ヶ瀬さんのせいで死んじゃうみたいだ。

死ぬのは私の責任。私の力が及ばなかっただけ。自業自得だと、そう教わったはずなのに。

「……巧く、いかないね」

だから、現実には怖い。痛いのは怖い。

あなたの決意なんてそんなものだったんだよって、あざ笑われているように。

目を閉じた。瞼が重くて仕方がなかった。どこからか足音が聞こえる。

——名前を、呼ばれたような気がした。

ばさり、と乾いた音を立てて、鞆が落ちた。

少年の眼前に、落ちているのは一本の日傘。この日傘の持ち主を自分は知っている。

くるりと身体ごと振り返った。そうしたところで彼女の――年生の教室の様子が窺えるわけではない。いや、そもそも彼女はそこにいるのだろうか。仮にいたとして無事でいてくれるのだろうか。

不吉な妄想をかぶりを振って追い払う。振り返り、もう一度日傘を見た。

彼女の顔を思い出した。小柄で、儂げで、伏し目がちで、しかし笑うと可愛い女の子だった。名もない小さな白い花が咲くプロセスを、一瞬で見ているかのような気持ちにさせる笑顔。斜陽の下、黄金色に輝く髪が印象的だった。

大野木ココ。それが彼女の名前。

――何故か、泣きたい気持ちになった。

走り出した。来た道を戻りだした。行って、自分に何ができるのかはよくわからなかった。多分何もできないだろうとは思った。けれど、このまま見て見ぬ振りをして、帰宅して、何事もなかったかのように日常を送ることだけは、できそうになかった。

そうだ、わかっていたはずだ。今やこの学校がああ魔女の体内に等しいことを。ここで起こった全ての事柄は、あの魔女の監視下にあることを。魔女は聞いていたのだ。自分たちが、自分と大野木ココ、そして笹々瀬衛が昼休みにしていたあの会話を。だから消そうとしているのだ。彼女たちを。珠置山という名の砦に近付き、真実を暴く恐れのある不穏分子を。

階段を上り切ったところで、足を止めた。クラスは三つ。手前から順番に。そう思い、再び走り出そうとして見付ける。一番奥の教室、廊下でキラキラ輝く何か。目を凝らす。夕陽を反射して煌めく

ガラスの破片だった。

唇が戦慄^{わなな}いた。蘇える不吉な妄想。はたして無事な姿で、自分の知っている大野木ココのままで。

駆け出した。叫びたかった。もう叫んでいたような気もした。教室の扉は開いていた。跳び込むように中に入って、横たわる人が視界に映って、

「大野木さん！」

大声で彼女の名前を呼んだ。返事はなかった。

それは、ココではなく衛。教室の真ん中で眠るように横たわっている。外傷らしい外傷は見当たらない。肩の力が抜けた。ならココは？ 何気なく左に視線を移して、そして見付けた。

血だまりに沈むようにして、ココが倒れていた。左腕の肘から先がなかった。少し離れたところに腕らしき肉塊が転がっていた。肉がぐちゃぐちゃに裂け原形を留めていなかった。ただ、表情だけは天使のように安らかで――。

ココに背を向ける。俯いて、吐いた。吐瀉物^{としゃぶつ}が床に散らばり、上靴にも数滴跳ねた。吐き気を我慢しようという気は起きなかった。他にやることがなかった。どうでもいい。汚れた口許に苦い苦い笑みが浮かんだ。そのときだった。

しゅー、しゅー。しゅー、しゅー。

凍り付く。そして、気付いた。

自分は暴力の嵐が過ぎ去った現場にいるのではない。ココをこんな惨たらしい姿にした暴力の嵐は、まだここにいる。ここはまだ、嵐の渦中だったのだ。

幽かに聞こえる呼吸音から、位置を探る。来ている。間違いない。近付いてきている。目的はココ？ それはそうだろう。あの視えない怪物には自分を攻撃することはできない。なぜならあいつは忠実な魔女の下僕だから。

そう、あいつには、自分を攻撃することはできない。

自身の閃きに息を呑む。もしかしたら、これは過信かもしれない。

でも——と強く拳を握る。他にココを救い出す道はない。心を、奮い立たせた。

「待て！」

少年は両腕を広げ、不可視の怪物の前に立った。

来ている。来ている。気配が、あの呼吸音が近付いてきている。

細く長い息が鼻先にかかったような気がした。ぶわっと汗が一気に噴き出した。逃げ出したい。ここから一刻も早く、脇目も振らず逃げ出したい。

しかしそれ以上に、失いたくなかった。ついこの前名前を知った程度の仲であるこの少女を。知人と友人を足して二で割ったようなこの存在を。なぜなら、自分にとってこの少女は、大野木ココは……。

きつ、と正面を見据えた。視えないはずの怪物の姿を確かに捉えた。距離は、もう目と鼻の先。

「お前はあの娘の下僕だろう。だったら、僕を攻撃することはできないはずだ……」

そうだよな？ そうだよな？ 胸中で、何度も自分に尋ねる。

怪物は反応を示さない。だが、少なくとも問答無用ではないようだ と判断し、続ける。

「あの娘に伝えてくれ。大野木さんに、大野木ココさんに手を出すことは僕が許さない。勿論その笹ヶ瀬さんにもだ。もし、二人に今後手を出すようなことがあれば——」

一度、言葉を切った。

「僕は、皆の前で、僕の罪を暴く」

それは怪物の主が、あの魔女が——最も避けたい事態のはず。

対し、やはり怪物は反応を示さない。万事休すかと少年が眼を閉じかけるや、

「あっ」

息がかかる程の距離にいたはずの気配が、かき消えた。

立ち尽くす少年と、二人の少女を教室に残して、暴力の嵐は過ぎ去ったのだ。

よろめいて、尻もちをついた。びちゃりという音に驚いて、小さく腰を上げる。尻に触った掌を見ると、案の定血が張り付いていたが、すぐにどうでもよくなった。血溜りの上に座り、両手を着く。顔を上げ、さっきまで確かに怪物がいた空間を見た。

「よかった……」

薄く笑みが浮かぶ。そこで、はたと気付いた。そう、あの怪物が去ったところで、ココが命の危機に晒されている現状は今も変わっていないのだ。

「大野木さん！」

振り向いたところで、額に硬質な何かを押し当てられた。反射的に動きが止まった。

「携帯……？」

見たままの感想が口を突く。それは、紛れもなくただの携帯電話。ミストブルーの折りたたみ式でストラップは付いていない。それが、開かれた状態でさも拳銃の如く額につきつけられている。

客観的には間の抜けた光景。しかし、少年は察していた。今向けられているこれが、真正正銘の武器であること。そして、その持ち主であるこの少女が、今自分の生殺与奪を握っていること。

大野木ささめ。あの大野木六人義姉妹の長女であり、ココの義姉であり、自分のクラスメイト。

「アンタ、もしかして視えてないの？」

怒りと焦り、そして疑念に掠れた声。少年はやや戸惑ってから、その意味するところがなんとなくわかって、ああ、と頷いた。

ささめが眼を剥いた。何故か隣を睨むように一瞥、苛立たしげに舌打ちした。

「とりあえずそこどけっ。邪魔だから」

「邪魔って——」

言われて、ココの様子を再確認する。応急処置でもしようというのだろうか、と思っていた矢先、ぐいと押し退けられた。少年とココの間にささめが割って入る。

「アンタ、氷垣よね」

「えっ」

「話は、アンタの知ってることは全部、ココの怪我を治してから聞かせてもらうわ」

いいわね、というささめの言葉と射抜くような眼差しは、選択肢を与えてはくれない。

少年——氷垣蓮太郎は息を呑んだ。そして、首を——縦に振った。

膝の上に乗せたココの頭をそつと撫でる。さっきまで血を吸って真つ赤だった髪は、窓から差し込む夕日を浴びて金色に染まっていた。つくしが、これを「パツキン」と呼んでいた気持がわかったような気がした。

血で黒ずんだ制服も元通り。千切れた左腕も何とか繋がった。

安らかな、眠っているような表情のココがいる。私のすぐ手の届くところで、息をしている。

「人の苦勞も知らないでさ……」

ココの頭の重み、脚の痺れまでひっくりくるめて、この娘が「いる」ってことが、とっても幸せなことに思えた。

ふと顔を上げると、机に腰掛けている氷垣と眼が合った。何とも言えない気まずそうな顔で、眼を逸らされた。別に睨んだつもりはないんだけどねと思いつつ、笹ヶ瀬を見る。

笹ヶ瀬は、学ランを敷布団代わりにして、すぴーすぴーと緊張感のない寝息を立てていた。学ランは言うまでもなく氷垣のもの。：言つとくけど私がそうしろって脅したんじゃないくて、氷垣が進んでやったのよ？

ふと、笹ヶ瀬が寝返りを打った。口の中でもごもご呟いてる。寝言か？　じつと見てると、半開きになった口から涎が一筋垂れた。

……無意識でも空気読めないのかコイツは。まあ、おかげで少し気分が楽になったけどな。

「悪かったわね」

「えっ」

「さっきのこと。私、アンタを撃とうとしたわ」

言葉にして、少し戸惑う。撃とうとした？ 生きてる人間に、アレを撃ち込もうとした？ くしゃりと、握り締めた髪の毛から音が鳴る。本気——だった？

「撃とうって——アレはそういうモノだったのかい？」

「まあ、似たようなもんね」

出るのは銃弾とは似て非なるモノなんだけど、と心の中で補足。形ならフレシエツト弾ってのに似てるかな。

「そうか——いや、別に気にすることはないよ。僕にはアレが携帯にしか見えてなかったし、それに、悪かったと謝りたいのは僕の方だ」

「え？ でも」

ココを あいつら から助けくれたんでしょと言おうとして、呑み込む。

そうだ。コイツをイイ奴だと決めるのはまだ早い。例え あいつらが視えてなくても、こいつは あいつらの存在を知っている。何かしら関わりを持つてることに変わりはない。

「確かに僕は大野木さんを庇ったよ。でもあれは違う。僕はあの怪物に殺されることがないってわかっていたんだ。だからあんなことができた。もしそうじゃなかったら、多分僕は大野木さんを庇ったりはしなかった——と思う」

殺されることがないって——わかってた？

「それに、大野木さんと笹ヶ瀬さんが襲われるきっかけを作ったのだって、僕なんだ。僕が大野木さんに知って欲しいあまり、あんなことを口走らなければ、今回みたいなことは起きなかったのに——」

氷垣がココと笹ヶ瀬が襲われるきっかけを作った？ それは自分

がココに余計なことを喋ったせい？

「ちつ、ちよつと待ってよ！ アンタ本当に視えてないのよね？」

視えてるか、視えてないか——それが、私なりの関係者か部外者かの判断基準なのに、そうだったのに、何で視えてないコイツが、ここまで大きく事件に関わってくるワケ？

「ああ。でも、最近はどこらへんにどの程度の大きさのモノが『いる』のかってことくらいなら、なんとなく察しが付くようになってきたんだ。そういえば、君はどうやって僕の視えてる視えていないを判断したんだい？」

いきなりの質問に面食らう。内容が内容だけに答え辛いんだけど、まあいいわ。

「ケータイよケータイ」

「携帯？」

「そつ。アンタ言つてたでしょ第一声で。これを見て、『ケータイ』ってね」

氷垣が、少し遅れて頷いた。

「アンタが視えてる人間なら、あそこでこれがケータイに視えてるのはおかしいのよ」

「あそこって——今は、どうなんだい？」

「今はもうフツのケータイ。元に戻したから」

へえ、と感心したような氷垣。一応納得したって解釈でいいのよね？

「じゃあ、まず一つめの質問。アンタはどうして あいつら——視えない怪物を知ってるの？」

一問目とするにふさわしいようで、回りくどいと自分でも思う。何ビビってんだ私は。本当に訊きたい、核心をついた質問があるってわかってるだろうに。

「教えてもらったからさ」

「教えてもらった？」

予想外の答え。誰からよ、と問うより先に、

「ねえ、大野木さん。いや、大野木ささめさん」

ちよつと新鮮だった。氷垣とは同じクラスだったけど、フルネーム呼びは初めてだったから。

「ささめ」

「えっ？」

「ささめって呼び捨てか、抵抗あるならささめさんで。大野木さんだとココと被ってややこしいし、かといってココを下の名前で呼ばれんのは何か癪。……で、何？ 今質問してるのはこっちなんだけど」

私の口調がとがって聞こえたのか、氷垣が少し困った顔をした。

言つとくけど、別にイライラしてるわけじゃない。私はこれで素ありのままよ。

「ああ。ささめさんはさっき僕に言ったね。僕に知ってることを全て話せと」

「まあ、言つたわね」

「じゃあ、全てを話すよ。——後悔はしないね」

何？ この確認を取るためだけに、さっきの話を中断したの？

それだけイヤな話なの？

——誰にとつて？

ココのお陰で忘れられていた全身を覆う粘っこい空気が、じわじわ戻って来ている気がする。

「そうか」

私の無言を肯定と見なしたらしい。氷垣は、机に腰掛けると脚の間で手を組んだ。まっすぐ私へ視線を向ける。ココに向けていた優しい眼とは、程遠かった。

「僕は視えない怪物の存在を彼女に教えてもらっただけだ」
彼女？

「藤枝蘇子さんだよ」

がつんと、頭の芯を殴られた。そんな感じがして、つい頭を押さえた。

ふじえだ……もそこ……？

「ささめさんは、例の動物盗難——いや、殺傷事件を追ってるそうだね」

「どこで、そんなこと——」

わかってる。本当はわかってる。誰か氷垣にそれを教えたのかなんて、予測が付いてる。

「藤枝さんから聞いたんだ。正しくは聞かされた、注意されたというべきかな」

「注意？」

「ああ、大野木ささめさんが事件を嗅ぎ回っている。だから迂闊に動物は殺すな——とね」

くらくらする。こいつ、今何て？

「悠朝村連続動物盗難もとい殺傷事件。一件目から三件目の犯人は僕。そして四件目の犯人は——藤枝さんだ」

熱があるときみたいな頭で、思い出すのはクロの言葉。

——ああそうだね。そうだった。四件目では——見なかった。

クロのいるだろう空間を睨んだ。あの妙な間は——そういうこと？ アンタは全部知ってたの？ 蘇子のことを、知ってて私に隠してたの？

「ただ藤枝さん本人がやったわけじゃない。僕は自分の手で動物を殺したけれど、藤枝さんは違う。彼女はあの怪物に命令して殺させたんだ。ウサギ小屋のウサギをね」

「アンタと蘇子がグルでやったっていうの？」

疑問をようやく声にできた。氷垣はかぶりを振った。

「グルじゃないよ。結果として、そういう形になってる。実際僕は藤枝さんがあんなことをするのを望んでいない。でも、藤枝さんはあれが僕のためになると信じている。僕が殺した動物の死骸と現場の痕跡——それらを怪物の力を使って消すことが、僕を護ることに

なるんだと信じている。だからあの山を砦にしているんだ。僕の罪を誰にも暴かれぬよう、珠置山に閉じ込めているんだ」

砦？ 学校の裏山が、氷垣の罪を隠すために作られた砦？

氷垣は、ココと笹ヶ瀬を見ながら続ける。

「二人が襲われたのもきつとそのせいだ。いや、正確には、その、僕が事件の話を振ってしまったというのもあるんだけど、多分会話の中に出てきた のっぺらぼう と珠置山というワードが引つかかったんじゃないかと思う。それで二人が好奇心から山に近付くことを危惧した藤枝さんは――」

「待つてよ！」

思わず遮った。情けない泣きそうな声だった。

怪物操って動物を殺したり、その死体を隠して証拠隠滅したり、ココや笹ヶ瀬に手を出したり――。

「どうして、そこまでして」

蘇子は。

「好きだからだよ」

呟くような声。苦虫を噛み潰したような顔で、唇をほとんど動かすことなく。

えっ、と訊き返すより先に、それはもう一度繰り返された。さっきよりずっと辛く、苦しげな声で。

「そこまでしても構わない程に――藤枝蘇子は、氷垣蓮太郎のことが好きなんだよ」

学校休んだのって久しぶりだな。

横になつて、そよ風に揺れるカーテンを眺めながら、ぼんやりそんなことを思う。

あのあと、眼を覚ましたら保健室にいた。先生が言うにはささめ姉さんが私、氷垣先輩が笹ヶ瀬さんを背負つて、保健室まで運んで来てくれたらしい。ささめ姉さんには帰つてその日に言えたけど、氷垣先輩にも明日お礼を言わなくちゃ。でも、どうしてあそこにあるの二人が？

枕元の目覚ましを確認、すぐ枕に突つ伏す。いつもなら下校中か教室で笹ヶ瀬さんや鏡花さんとおしゃべりしている時間だった。

——そう、笹ヶ瀬衛さん。

本当は学校に行きたかった。笹ヶ瀬さんの無事をこの眼で見えてきたかった。昨日は結局二人とも親を呼ばれて、笹ヶ瀬さんは眠ったままお父さんに担がれて帰ってしまったから、話す暇もなかった。身体はどこも痛くなかったけど、まこ姉さんには今日一日家で安静にしているようにと言われた。こういうときのまこ姉さんには逆らうだけ無駄だし、実際すごく疲れてたから、素直に甘えることにした。

左腕を天井に向けて伸ばす。手首を回してみたり、グーパーを繰り返してみたり。うん、いつも通り、動いてる。確かに、千切れてしまったはずなのに。

と、ドアをノックする音がした。まこ姉さんかな？ いいよと返事をする、ひょっこり顔を覗かせたのは、

「や、やつほー」

笹ヶ瀬さんだった。どこか居心地の悪そうな笑みを浮かべている。「さ、笹ヶ瀬さん？」

起きて、掛け布団を胸まで引き上げた。パジャマ姿を見られるの

は恥ずかしかったから。

「ど、どうしたの？」

「今さ。入っても平気？」

うんっ、と無駄に力強く頷いてしまう。

「あはは。そいじゃあ、おジャマしますよっ」と

入って来た笹ヶ瀬さんはセーラー服姿だった。

「学校、行ってたんだ」

「うん。別にどっか怪我したとか、そういうのなかったし。ユツキ
ーは——ってどっか悪いから休んだんだよね」

ゴメンねと謝る笹ヶ瀬さんには、いつもの元気というか遠慮のなさがない。

「う、ううん。私も特別どこかが悪いとか、そういうのはないんだ
ただ、やっぱり学校で倒れちゃったってことに変わりはないから。」

今日はお休みしなさいって」

「イイお義母さんかあだねえ。優しいし美人だしウチのとはホント大違
い。あつ、そだそだ」

笹ヶ瀬さんが鞆からクリアファイルを出した。中から数枚プリン
トを抜いて、ひらひら振って見せる。

「これ、今日の分のプリント。机の上置いとくね」

それが机の上に置かれるのは、私がありがとうって言うより早か
った。

腕を組んだ笹ヶ瀬さんが、ふうむと唸る。

「キレーだよな」

「何が？」

「机の上」

「モノが少ないだけだよ」

「キレーはキレーじゃん。私の何かとはダンチだよ」

おどけたように笑って、ヒナちゃんのベッドに腰掛ける笹ヶ瀬さ
ん。鞆を床に置いて、うーんと伸びをした直後、まるで尻を針で
刺されたみたく腰を上げて、

「あつ、今すつごくナチュラルに座っちゃったんだけど大丈夫？」と、ベッドを指差し尋ねてくる。

私は、自分のベッドをぼふぼふと叩いた。

「そっちでも別にいいけど、こっちに座ってくれた方がお話はしやすいかな？」

「そっか」

笹ヶ瀬さんが、さつきよりそつと腰を下ろした。ぎしりとベッドが軋んだ。

そこで——ようやく自分で口にした「お話」という単語が引つかかる。そうだ。笹ヶ瀬さんは家に何をしに来たんだろう？ プリントだけなら、玄関でまこ姉さんに渡せば済むのに。

「ねえ、ユツキー」

ベッドに手を付いて、身を乗り出してくる笹ヶ瀬さん。

「何？」

「昨日の昼休みのこと、ゴメンね」

それは——あまりにも唐突で。

「何で——」

笹ヶ瀬さんが謝るの？

「何でって、そりゃああたしが悪いと思ったからだよ。ホントは氷垣先輩に最初に謝っとくべきなんだろうけど、ユツキーにもイヤな思いさせちゃったから」

だからゴメン、と笹ヶ瀬さんが頭を下げた。

「でも、イヤな思いをさせたって言うんなら私だって同じだよ？」

私、笹ヶ瀬さんが信じてるモノを、好きで好きで仕方がないモノを、あんな風に否定したんだもの」

だから、謝るのは私の方なんだ。批判されるべきは、責められるべきは、私の方なんだ。

笹ヶ瀬さんが、むつとしたように眉を顰めた。

「じゃあ、ユツキーはあのととき自分が言ったこと、間違いだと思ってるの？」

「そうじゃないよ。あのとき私が言ったこと、間違っていないってそう思ってるよ。思ってるけど——」

「けど？」

「例え正しくても、笹ヶ瀬さんに対する思いやりには欠けてた……と思う」

小動物のような眼が見開く。続いて呆れたような溜息。

何だか怖い反応に、目を伏せてしまう。

不意に、笹ヶ瀬さんの両手が伸びてきて——頬を抓られた。

「にゃ！ にゃにひゅん……」

「あのねえ、ユッキー」

笹ヶ瀬さんは、私の眼を真っ直ぐ見て続ける。

「ユッキーにとっちゃ、あたしはKYだし、のーたりんだし、頼りない娘かもしれない。っていうか実際そうだよ。色々足りてないから、単細胞で無神経だから、今回みたいに二人を傷付けた。でもね、全部言葉で言われなきゃわかんない程、あたしだっておバカじゃない」

——ああ、そうか。

「だから、ユッキーがあれを悪気があつて言ったんじゃないって、自分が正しいと思ったから、私や氷垣先輩への優しさからあれを言っただってことくらい、いちいち言われなくたってあたしちゃんとわかってる」

私、こんなにも悩んだり、考え込んだりしてる人間は、世界に私だけだと思ってたんだ。

「だから、ユッキーがあたしに謝ることなんてない」

こんなにも、近くにいたのに。傍にいたのに。

私は、なんてちっぽけな世界を生きていたのだろっ。

頬から離れた手が、プリーツスカートをぎゅっと握り締めた。

「何か——エラそうなこと言ったかも」

笹ヶ瀬さんが上目遣いにこつちを見てくる。
そんなことないと言って、かぶりを振った。

「笹ヶ瀬さん」

「まだ謝り足んない？」

違うよと返して、微笑む。頬にはまだ抓られていた熱が残ってる。

「ありがとう。笹ヶ瀬さん」

それは、心からのお礼だった。

「ねえ、笹ヶ瀬さん」

「うん？」

笹ヶ瀬さんの眼は、ぶらぶらと前後に揺れる自分の爪先を見ている。

「またやつちやたな——って何のこと？」

それは、昼休み笹ヶ瀬さんが残した自嘲めいた呟き。

不意に、部屋が暗くなった。窓から射し込んでいる陽が急に薄れてしまった。

笹ヶ瀬さんの脚が止まった。

「言わなきゃ……ダメ？」

返って来た固い声に、私は慌てて手を振った。

「うっ、うっ。そんなことない。ただ、その、さっきので笹ヶ瀬さんと前より距離が近付いたかなあって、そんな気がして、ちょっと調子に乗っちゃったっていうか——」

「ごめんなさいと言って、頭を下げる。困ったように笑う気配がした。

「あー……なんつーんだろーねー」

膝を抱え、天井を見詰めながら笹ヶ瀬さんは続けてくれる。

「二度目、なんだよね」

「二度目？」

「うん、二度目。あたしが自分の好きなコトのせいで友だちといやなムードになっちゃったこと。一回目は小学生のときだったんだ」

笹ヶ瀬さんは、そこから目を離そうとしない。

「笹ヶ瀬さんって、確か悠朝小の子じゃないよね」

「うん。あたしは奈々原ななはらの子だよ。そのまま向こうの中学上がっても良かったんだけど、知り合い多いしなーんか居辛くてね。親に駄々捏ねまくって、結局悠朝中こうち来ちゃった」

知り合いが多いと居辛くて？

「何か——あつたの？」

笹ヶ瀬さんが、脚を下ろした。ツィールの先をいじりながら静かに笑った。

「あたしね。小学生の頃、霊能少女だったんだよ」

霊能少女……？

私の驚いた顔が面白かったのか、笹ヶ瀬さんは笑ってかぶりを振った。

「あはは。ホントにそうだったわけじゃないじゃん。そういう設定があたしの中であっただけ。ホンモノの幽霊なんて、あたしにはちっとも視えてなかった。でも、髪の毛とか呪い人形みたく伸ばして、ぼそぼそ喋ったりとか手首に数珠巻いたりでそれっぽく飾ってさ、ウチの学校の屋上にはむかし飛び降り自殺した女の子のユーレイが出るの。だから近付いちゃダメよ、ヘタしたら取り憑かれて向こう側に連れてかれちゃうよ、とかそーゆー警告を友だち連中にしたりしてたわけ」

「——どうして、そんなこと」

「必要だったからだよ。あたしにはどうしても、ね。周りは皆あたしなんかよりすごいモノをいっぱい持ってた。キラキラ光るモノ、たくさんたくさん持ってた。だから、大して勉強も運動もできない、なーんの取り柄もないあたしはいつだっておいてけぼりだった。そんなあたしが皆の隣に並ぶためには、どうしても 特別 が必要だったの」

「それが——」

霊能少女を偽ってきた、偽らなければならなかった理由。

「最初のうちは結構ウケ良かったんだ。小学校高学年って学校の怪談とか都市伝説とか、そーゆー怖い流行る時期じゃん？ だからそれっぽい雰囲気出して、それっぽいこと言ってれば結構皆ちやほやしてくれたんだよね」

でも——と、声のトーンが落ちた。

「ある日、バレちゃったんだ。あたしが嘔吐きだつて。クラスの中で一人、不正は何であろうと許しません！ みたいなノリの委員長——じゃあなかったんだけど、委員長タイプの真面目っ娘がいてさ。その娘に面と向かって、皆の前で言われたんだよ。ウチの屋上で自殺した生徒なんていやしないって。だから幽霊なんて出るわけないって」

「それで、バレたから——いじめられた？」

笹ヶ瀬さんが、寂しそうに眼を細めた。

「だったら、まだ良かったのかもねえ。皆から無視シカトされるようになるのは——あたしじゃなくて、その真面目ちゃんのほう」

「え？」

「何でだと思っ？ ——空気読めてなかったからだってさ」

霊能少女を自称する笹ヶ瀬さんの正体を暴くこと。それが空気の読めない行いなんだとしたら——

「あ」

思わず声が出た。きゅつと唇を結んだ。

——最初から誰も、笹ヶ瀬さんのことを霊能少女だなんて信じてなかったんだ。

「結局のトコ、あたしは皆にとって遠くから眺めてる分には面白い電波ちゃんだったんだよ。他の皆とは違う 特別 なんかじゃなかった。今思えばその程度の、それはそれはちっちゃな出来ごとだった。」

たわけだから、あのまま奈々原に通つてても問題なかったような気がしますんだけどねー。今みたいにムダにはきはき喋ってたら、多分あたしがあの笹ヶ瀬衛だとは誰も気イ付かないんじゃないかなって、今でもそう思う」

「それは――」

「そういうもんだよユツキー。案外人つて人のこと見てないもんなんだよ」

沈黙が降りた。心地いい静けさではなかった。だから、耐えられなかった。

「ごめんなさい」

「どーして謝んの？」

「だって、したくなかったんでしょ？ さっきの話。それなのにわひゃー！？」

また、頬を抓られる。さっきより手加減がなかった。

「ひゃ、ひゃひゃぐわふえ！」

ぱっと手が離れる。頬を撫で擦る私を他所に、笹ヶ瀬さんはまた溜息を吐くと、

「いい、ユツキー」

私の鼻に、人差し指をちゃんと触れさせた。

「さっきも言ったよね。あたしは全部口で説明されないとわかんないほどおバカじゃないって。ユツキーはさっきの話、あたしが訊かれたら誰にでもカミングアウトすると思う？」

「そ、そりゃあ思わないけど――」

「でしょ！？ あたしはね、ユツキーだから喋ったの。ユツキーになら話してもいいってあたしが決めたから喋ったの。だから、ユツキーが謝ることなんて全然ない！」

わかった？ と念と一緒に鼻まで押してくる笹ヶ瀬さん。

頷くと、人差し指が離れた。笹ヶ瀬さんが、よしと胸を張った。

――私になら、喋ってもいい。

抓られたのとはまた別の熱が、頬にじわじわ広がってゆく。

「で、でも、ちょっとびつくりしちゃった」

「何の話？」

「笹ヶ瀬さんが幽霊のこと『趣味』だって言い切ってたところ。私
てつきり、その、言い方は悪いんだけど、笹ヶ瀬さんは幽霊とかU
MAとか、そういうのをキャラ作りのためだけに使ってると思って
――」

「ちよつ、ちよちよつ、ちよいタンマ！」

笹ヶ瀬さんが手をかざし、私の声を遮った。

「な、何かな？」

「何かな？　じゃないでしょユツキー！　えっ、いや、ホント、え
っ？　いつ、いつから気付いて――」

笹ヶ瀬さんが、口を覆った。その手がゆっくりと離れていく。頬
が赤く染まっている。

「もしかして、全部わかってて『あんなこと』に付き合ってくれて
たの？」

私も、鏡花さんも、知っていた。

そう――笹ヶ瀬さんは　ある意味　で心霊に取り憑かれていたの
だ。

「だって、中学に入って初めての友だちだもの」

一番異彩なオーラを放っていたから友だちになろう――そんなふ
うに声を掛けて来てくれた貴女と、本当に友だちになりたいと思
ったから。

「私ね、もし笹ヶ瀬さんが無理してるんだとしたら、言っておきた
いことがあったんだ。私も鏡花さんも、別に笹ヶ瀬さんが　特別
な娘じゃなかったって、友だち止めようなんて言ったりしないよって。
私たちが好きなのは、笹ヶ瀬さんなんだよって。でも、そういう趣
味はホントみたいだから、何だか安心しちゃった」

余計なお世話だったかもと頬を掻いていたら、抱き付かれた。え

っ、と思ったときにはもう天井が見えていた。笹ヶ瀬さんと私、お互いの頬が触れ合うくらい——近い。

「ごめんね。ごめんね」

「どうして謝るの？」

「迷惑、かけてるから」

「そんなこと、ないよ。迷惑なんかじゃない」

笹ヶ瀬さんがいる。友だちが腕の中にいる。そうだ。これまでとは、つくしちゃんのと看とは違ふ。あのときはもう全てが終わってしまっていた。今回は違ふ。守りたい命がここにある。これまでみたいに、終わってしまったところから始まるんじゃない。

眼を瞑った。抱き返す腕に、ぎゅうと想い^{ちから}を込めた。

薄暗い放課後の教室、どちらから約束したわけでもなく、私と蘇子は二人きりになった。蘇子が窓際の席で本を読む一方、私はその前の席に腰掛けて、窓から外を眺めている。

雨が降っていた。耳を澄ませばしとしと音が聞こえる。そんな、細い糸みたいな雨だった。

眼だけを動かし、蘇子を見やる。蘇子は文庫本に視線を落としたまま。だから、目は合わない。ほっとして、視線を窓へと戻す。くしゃり、と髪の毛を握り締めた。

何ほっとしてんのよ私は。この娘と目を——顔を合わせることがそんなに怖いのか。

雨は、気が滅入るような埃色^{ほいほ}。ホント——嫌な天気。

ふと、ページを捲る音が止んだ。次いで、机にそつと本が置かれる音。

「二人きりね」

蘇子の顔を見る。少しアンニュイな笑みがよく似合う。目線は本の背表紙に落ちてたから、やっぱり合わない。

「そうね」

「不用心じゃないかしら」

「えっ？」

「一昨日あんなことがあったのに」

と、あいつらの気配。視線を走らせる。切り換えなくたって、なんとなくわかった。床にも壁にも窓にも天井にも、そこら中に半分身を沈めた豚が、ぎゅうぎゅう犇^{ひし}めき合っている。今あつちに行ったら、真っ赤どころか真っ白な世界が拝めるんじゃないかって思うくらいに。

ゆっくりと蘇子を見た。その瞳に光を探って——唇を噛んだ。気配が、嘘みたいに消えた。

膝に置いた拳を握り締める。この状況を怖いと思う気持ちは当然ある。でも、それ以上に——この状況を作り出してんのがこの娘って事実が哀しかった。

「氷垣から聞いたわ。事件の四件目——やったのアンタなんだってね」

だからなんなのよ——と独り苛立つ。違うでしょ？ ホントに訊きたいのはそれじゃないでしょ？

「どうして蘇子が——」

「必要だったのよ」

——必要？

「兎はね、その繁殖力から『更新され続ける生命の象徴』とされているの。だから、どうしても呪物となる兎の死体が必要だったのよ。珠置山の結界を盤石なものにするために。氷垣君の罪を他の誰にも露見させないために」

「氷垣の——ため」

「そうよ。氷垣君のためなら、私は何だって厭^{いと}わない。事実、四件目はこれまでと違って現場に血痕が残されていたでしょう？ あれは他の三件との差別化を図ると同時に私なりの決意表明だったの。私は氷垣君のためなら人道的に外れたことだって、何だってやるって」

押し黙る。声色から嫌でもわかってしまう。この娘の決意は、本物なんだ。

「氷垣のためなら何したっていいって言うの？ 殺しも構わないっていうの？」

「ねえ、大野木さん。貴女が私に訊きたいのはそんなことなの？」
——そんなこと？

そこで、ようやく顔を上げた。互いに視線がぶつかった。

蘇子は眉ひとつ動かさず、さっきよりいっそう冷やかな声で続ける。

「そんなこと——と言ったのが気に障ったのかしら。でも、本当の

ことでしょう。貴女が私に尋ねたいのは事件の真相などではないはずよ」

「それは――」

「違うだなんて言わせないわ。それじゃあ何？ 貴方は私にこう訊きたいの？ その怪物たちを操る力、一体どこで手に入れたのって勿論気になっているのは事実でしょうね。でも、今この場に限ってそれは間違いだわ。それは、今ここで貴女が私に一番訊きたいことじゃない」

蘇子は、唇をきつく結んだ。その眼が潤んで輝いた。

「どうしても訊く気になれないのなら、私から教えてあげるわ」

私が今一番蘇子に訊きたいこと。

それは訊かなくてはならないことで、同時に絶対訊きたくないこと。

真相を絶対、確かめたくないこと。だって、それを訊いてしまつたら――

「貴女の義妹さん――大野木ココさんと笹ヶ瀬さんを襲つたのは私よ」

きつと私たちは終わってしまうから。私たちの関係は、脆く崩れ去ってしまうから。

「私が、そうするよう指示を出したのよ」

蘇子が、しばらく視線を泳がせたあと、目を伏せた。

「言い訳がましく聞こえるかもしれないけれど、本当は義妹さんに手を上げるつもりはなかったわ」

「あそこまでやつといて？」

つい鼻で笑ってしまう。蘇子が僅かに怯んだ。傷付いたんだってわかったけど、悪いことをしたとは思わない。そう、胸なんてちくりとも痛んじやいない。

「ええ、本当は笹ヶ瀬さんの方を殺すつもりだったの。貴女の義妹

さんの目の前で」

「は……？」

ココの目の前で、何だって？

「そうすればひとまず義妹さんの動きを止められる。普通眼の前で友だちを殺されたら、しばらくは放心状態でまともに動けなくなるわ」

「ねえ、蘇子」

「何かしら？」

「アンタ——笹ヶ瀬って誰のことかわかって言ってる？」

私と蘇子は、よく晶たちと一緒にお昼を食べる。そのグループの中にはココと笹ヶ瀬もいる。いつだったか蘇子は、食事の席でUM Aウンチク垂れ流す笹ヶ瀬を見て、何だかユニークな娘ね、と困ったように笑っていたはずだ。なのに——この娘はその笹ヶ瀬を殺すって言ったの？ こんなにもあっさり。

「もちろん、わかってるわ。でも、仕方がなかったのよ」

「何が、どう仕方ないって言うのよ？」

「だって、貴女には義妹さんの——つくしさんの件があったから。大野木さんに、これ以上義妹さんを失う哀しみは味合わせたくなかったから」

蘇子の言ってることはおかしい。ココはダメで笹ヶ瀬なら構わないだなんて絶対におかしい。でも、私のことを、友だちのことを、これだけ思いやる気持ちがあるのに。それなのに、どうして——
「でも、無理だったの。耐えられなかったの。いざチャンスを与えられてしまったら、抑えることが出来なかったの。氷垣君のココさんを見る眼でわかってしまったから。氷垣君が好きなのは、私じゃあ、私なんかじゃなくて……っ」

そこから先は続かなかった。蘇子が口許を両手で覆った。

——ああ、そっか。これがそうなんだ。

経験のない私にはよくわかんないけど、氷垣が言った通りなんだ。

ここまでしても構わないくらい——藤枝蘇子は、氷垣蓮太郎のことが好きなんだ。

蘇子は、手を膝に置いた。うつすら涙が滲んだ眼は、赤くなっていた。

「私ね。実はもう彼に一度振られているの。告白したとき、彼は言ったわ。自分は何の罪もない動物を殺すような最低な男だって。だから好きになつてもらえる資格なんかないって。私、それが信じられなくて、つい言ってしまったのよ。そんなのは嘘でしょう——って。そうしたらその夜、学校に呼び出されてね。そこから二人で神社まで行つて——そして、眼の前で猫を一匹殺されたの。金槌で一撃、頭をぱかりと割るようにして。返り血を浴びた彼は振りかえつてこう言つたわ。『ほら、本当だつたらう』って」

語る唇が、蕩けるように甘く緩む。

「でも、私それを見たとき、すごくすごく嬉しかったの。だって、それは意中の人と私の間に出来た初めての秘密だったから。だから私は彼の血まみれの手を握つてこう言つたの。『わかつてるわ。これは二人だけの秘密ね』って。彼は乗り気ではなかったけれど、私にとってあの日の夜は、彼の手によつて今後も繰り返される動物の殺傷は、すべて私たちだけの秘密でなければならなかったの」

でも——と言つて、蘇子は顔を曇らせる。その理由はなんとなくわかつた。氷垣の言つていたことがホントなら、蘇子は昨日の私と氷垣のやりとりを聞いていたんだらう。はつとする。そうか、氷垣は私に脅されて渋々あれを話したんじゃない。最初から私に話すつもりだつたんだ。

「昨日で二人の秘密は終わってしまったわ。私は——二度ふられてしまったのね」

——二人の秘密を守るといふ蘇子の動機を消滅させるために。

蘇子が立ち上がった。本を学生鞆に仕舞い、教室を出て行くとする。

「ちょ、ちょっと待って！」

咄嗟に蘇子の手首を掴んだ。濡れた眼がこっちを向いた。

「何かしら」

「何って、アンタこれ以上何をしようって言うの？ もうあの事件はアンタと氷垣の秘密なんかじゃない。さっきだって言ってたじゃない。アンタ、あいつに」

「二度も振られてしまった——そうね、それは事実として受け止める他ないわ。でもね、私のやるべきことはまだ終わりじゃないの。氷垣君は、私があそこにただ死体を隠していると思っっているようだけれど、それは違う。それじゃあ私が代わりに罪を償うことにはならないじゃない。隠蔽工作と贖罪は別物だもの」

やるべきことは、終わりじゃない……？

「蘇子。アンタ一体——」

学校の裏山で、珠置山で、あいつらを引き連れて、一体何をやってるの？

「ねえ、大野木さん。貴女、氷垣君から事件の動機は聞いた？」

少し迷って、かぶりを振った。

「そう。ココさんになら、話すのかしらね」

「えっ？」

蘇子の腕が私から離れた。自分でも何でこんなあつさり手を離れたのか、わからなかった。

ふと、赤い砂みたいなモノが、蘇子の白いふくらはぎを伝って流れているのに気付く。さらさらと、床に描かれたマールブルは、金属の削りカスに似たツヤを放っている。場所が場所だけに、破瓜の血を思わせるそれは。

——ヒイロゴケ？

「珠置神社」

はつとすると、足許にヒビロゴケらしきモノはなかった。今見えているのは蘇子の背中だけ。

「そう呼ばれている廃神社が山頂近くにあるの。そこが今の私の拠点」

何で——私にそれを話すのよ……。

蘇子に向かって一歩踏み出したかった。踏み出して、今度こそ離さないようにその手を掴みたかった。なのに、足はまるで床に根づいてしまったかのように、ぴくりとも動いてくれない。

どうして——

「大野木さん。私たち、友だちよね」

頷いた。伝えたい思いは声にならなかった。

「だったら——」

三つ編みがふわりと踊った。蘇子は、潤んだ瞳で微笑むと、

「絶対に珠置山には来ないでね。ささめちゃん」

初めて私のことを、そう呼んだ。

しゃりしゃりと小気味良い音が聞こえる。石段を覆う苔が、私に踏み潰されている音だ。

腕時計の針は午前二時半を指している。目線を学生鞆へ移した。さんざん迷った末、結局持ってきてしまったけれど——どうしよう。あの人に会えるかどうか、まだわからないのに。

鳥居をくぐったところで、足を止めた。

境内のあちこちにいるカエル人間が、皆こつちを見ていた。いつもなら相撲を取ったり、チンチロリン——スゴロクを使ってやる博打らしい——に興じていたり、手水舎を銭湯代わりに使ったり、組み手なのかケンカなのかよく判らないものをしているはずの彼らが、皆。

息をゆっくりと吐きながら、瞳を閉じた。吐き切ったところで開けた。賽銭箱の上で胡坐を掻いているボスと眼が合った。

カエル人間たちが、そそくさと参道の脇へ並ぶ。それから、任侠映画でよく見るあのお辞儀をした。

私が賽銭箱の前まで来ると、

『おかえりなさいませ。お嬢』

ボスに会釈をされた。うん、と小さく頷いてそれに応える私。

『お怪我はもう宜しいのですか？』

『お怪我って……知ってたの？』

三日前のあのことを。

『ええ、まあ俺たちには俺たちで情報網がありますから。それで、行かれるのですか』

『えっ？』

『俺たちに力を借りに来たのでしょうか？』

うん、ボスの言っていることは正しい。だけど——。堪らず、目を伏せた。

「ねえ、ボス。前にボスは言ったよね。俺たちは自分が強いと認めたヤツの言うことしか聞かないって」

『ええ、確かに申し上げました』

「私、もうあれから二回負けてるよ」

一度目は 狸 の変化^{へんげ}の前に、二度目は のっぺらぼう の圧倒的な力の前に。

「それでもボスたちは、私なんかのために」

『お嬢』

ボスの野太い声が私の言葉を遮った。目線を上げると、眉間に深い皺が刻まれていた。

『お嬢は何故ご自分が俺たちにお嬢と呼ばれているのか、その所以^{ゆえん}はおわかりか』

「所以……？」

ボスは、傍に置いてあつた煙管を咥えた。

一匹の力エル人間が、賽銭箱に跳び乗って、マッチの火を差し出す。ボスの隣にいつも待機している右大臣か左大臣のどっちかだと思つ。

『お嬢。俺たちはそう簡単に人を信用しねえ。けどな、一度信じると心に決めた相手なら、何が起ころうとことん信じ抜く。そのとことん信じてる キョウダイ が、俺らの知らねえところで、学友人質にされ罫にハメられ木っ葉喰わされた。ここまで言やあ、もう、俺が言いてえこたあおわかりでしょう』

まったりとした煙草の煙を鼻から漏らしつつ、睨むような上目遣いで私を見る。

『俺らはな。肚^{はら}あ立ってんだよ。俺たちが認めたキョウダイを、ボ口雑巾みてえに扱われてどうしようもなく頭に来てんだよ。お嬢の恥は俺らの恥。お嬢の敗北は俺らの敗北だ。お嬢が戦に負け、面に泥お塗られた時点で、例えそれが如何なる理由によるものであるうと、もうそれはお嬢だけの戦じゃねえんだよ』

これまでの戦い—— 狸 と戦ったときだってそう。彼らが

私に力を貸してくれるのは、出来の悪い子どもを放っておけない親心みたいなものだと思っていた。でも違った。彼らにとって私は対等、もしくはそれ以上の存在だったんだ。だから、身体を張って、命を懸けて、一緒に戦ってくれてたんだ。

稲荷神社に足を運ぶ度、彼らが言ってくれる「おかえり」の意味。そっか、そんなにも強い絆で——私たちは結ばれていたんだ。不意に、差していた日傘がずしりと重くなった。

『ヒヤッハー！ キョウダイと来たかキョウダイと！ まっ悪くねえセンスだわな』

陽気な声。姿を見なくたって誰かはわかる。

『ご無沙汰だねえ、お嬢。相変わらず白いお肌が赤い世界によく映える。いや、ここからじゃ全く見えねえーンスけどね』

「うん、とりあえず、早く降りてくれないかな？」

『おっ？ ソーリーソーリー。へへっ何か懐かしいやり取りだな』
ヘビドリがボスの隣に着地した。さっきマツチを差し出した大臣が、露骨に嫌そうな顔をした。

『さっきカエルの旦那が言ってたこと、おいらだっておんなじ気持ちさ。いいかいお嬢？ 人間の戦争ってえのは大きく分けて二つのモノを奪い合う。一つは糧で一つは誇りだ。二つのうちどちらか一方でもキープしてりゃあ人間生きてはいける。誇りはなくとも糧がありゃあ腹は膨れるし、糧はなくとも誇りがありゃあ空腹を耐え忍べる。でもよ、両方無くなっちゃったら、それはもうお終いだ。両方失っちゃったら、それはもうおっ死んじまっていることと何ら変わらねえ』

喋り方こそ軽い感じだけど、今日のヘビドリは何だかいつもと違う。らしくない、凄味がある。

『けどな。おいらたちは——妖怪は違うんだ。おいらたちの戦争は、いつだって一つのものしか奪^とり合わない。それは誇りだ。賭けるモンがプライドしかねえんだ。食はおいらたちにとって欠かせぬ三大欲求じゃあねえ。ただの娯楽だ。つまりよ。おいらたちの戦争って

えのは、人間サマのそれと違って後がねえんだ。糧という名の滑り止めがねえから、負けたらソッコー 死 なんだよ。そしてお嬢が敗北喫した今、ここにいるおいらたちは当てどなくこの世を彷徨う餓鬼ドーゼンってわけだ』

らしくないっていうのは、そういうこと。ヘビドリも心の底から怒ってるんだ。

この広い世界で真剣に悩んだり、考え込んだりしている人間は、存在は私だけじゃない。

私は、一昨日それを笹々瀬さんから教わった。

世界はこんなにも——たくさんの強い思いで成り立っているんだ。

『さあてお嬢よキョウダイよ。決断の時来れりだ。キョウダイなんて呼ばれた以上、もう迂闊に私なんかとか抜かして自分を卑下することは許されねえ。戦うのか戦わねえのか、俺たちの戦を決めてくれ。言つとくがぁ、おいらは死にっぱなしで終わりなんざ御免だぜ？』

ヘビドリが翼を私目掛けて突き出した。指を指されているのだとわかった。

ボスが頷いた。だから私も——しっかりと頷き返した。

「ボス、前に教えてくれたよね。誰かのために命を懸けて戦うのは良くないことなんだって。私も——そう思うよ。理由がどうあつても、やっぱり誰かを傷付けたり殺したりするのって良くないことだもの。大切な人を守りたいからって、正当化されていいものじゃないもの。だから、私は自分のためにしか戦わない。大切な人のために血で血を洗うようなマネ、絶対したくない。でもね。私、死にそうになって、やっとわかった。自分のために戦うってすごく難しいことなんだね。実際、私は自分の負けを、一瞬、笹々瀬さんのせいにしようとした。多分今の私には、頭ではわかってても無理なんだと思う。自分のためだけに戦うこと。一人じゃ、ダメなんだと

思う」

だから――。

「だから、私、今回は皆のために戦わせてほしい。一人じゃ無理だから、ボスやヘビドリたち、皆に私を支えてほしい。私はまだまだ弱いけど、今はこれが精一杯だから。少しずつだけど、これからもつとつと強くなってみせるから。だから――」

日傘を畳んだ。背筋を伸ばし、頭を下げた。

「お願いします。私に皆の力の貸して下さい」

私だって、死んでしまったままだから。

『お嬢、顔を上げて下さい』

言われた通りにする。ボスが、少し呆れたように微笑んでいる。身体ごと振り返った。お辞儀を止めたカエル人間たちが皆整列していた。こんなにも大勢の視線に晒されたのは、多分小学校の学会以来のこと。彼らは深々と私に向かってお辞儀をした。

『これが――俺たちの答えです』

もう一回頭を下げた。心臓がすぐドキドキしている。強い思いから心が奮える。

本当に――ありがとう。

『ところでヘビドリ。お前敵情視察に行つてたはずだろ。何でお嬢の私なんかの下り聞いてんだよ』

『へっ、おいらは有能だからな。ンなモンちゃっちゃと終わらせちゃったぜ。ウチのお嬢を可愛がつてくれたあの顔ナシ野郎、どうやら珠置山にある廃神社を根城にしてるらしい』

「珠置山!？」

慌てて振り向いた。ヘビドリがうひゃあつと仰け反ったあと、羽先で嘴を掻きながら応える。

『えっ、ええ、お嬢の学び舎裏にあるあの珠置山ッス。憎き相手のアジトが裏山たあまさに灯台デモクラシーってやつだな。まあ、あ

の顔ナシが何で人質取つてまでお嬢にケンカ吹っかけてきたのかはまだわかんねえんだけどよ。あー、あれか？ お嬢も最近ブイブイいわせて、おいらたちの世界じゃ有名になってきたところだし、ぶっ飛ばして名あ上げようつてえ魂胆か？ うへえ穏やかじゃねえ。どこのストリートギャングだよ」

珠置山にあいつはいる。ということは、笹ヶ瀬さんの言つてたのっぺらぼう と私が戦つた のっぺらぼう はやつぱり……？

「ねえ、ヘビドリ」

「ん？ どうしたお嬢？」

「その廃神社にいたのつて……その顔ナシとか 豚 たちだけだったの？」

そりゃあまあそうでしたけどと言つて、ヘビドリが首を傾げた。

「お嬢？」

言いたいことがあるなら言えばいい——そう言いたげなボスの眼差し。

私は少し戸惑つた末、口を開いた。

「あのね、これつて本当に 彼ら だけがやったことなのかな……？」

「と、おつしやいますと？」

「うん。私、何か違うような気がするの。巧く言えないんだけど、でも——やつぱり何か変な感じがする。 彼ら の裏に大きな何かがあるような、まるで私たちが今からあの山に向かおうとしていることまで、仕組まれているみたい——」

と、背後から玉砂利を踏む音が聞こえた。そう、苔に全てが閉ざされているこの世界で、玉砂利を踏む音が。この世界に属していない者の立てる足音が。

「ああ？ アレは確かいつぞやお嬢と一緒にいむぐお！？」

咄嗟にヘビドリの嘴を掴んだ。左右に激しく首を振るヘビドリを押さえつけたまま、ボスが訝しげに睨み付ける先を——見た。

「やあ」

その人がここに現れないこと、予想していなかったと言えはウソになる。うつん、むしろ期待さえしていた。でないとこんなもの、持ってくるはずがないんだから。

「大野木さん。少し——お話、いいかな」

鳥居前に立つその人——氷垣先輩が微笑んだ。

前にここで見せたそれよりも、ずっとぎこちなかった。

視界　を元に戻すと、夜空に三日月が浮かんでいた。今夜は月も星も、暗い昏い海の中でキラキラと輝いている。いつだったか、台風が近づいているときの夜空は、星の光がよく見えるのだと鏡花さんが教えてくれたのを思い出した。

枯れた手水舎の縁に二人腰掛けてから、氷垣先輩は語りたかったことすべてを語ってくれた。悠朝村連続動物盗難事件が、実は「盗難」事件ではなく「殺傷」事件だということ。その事件は三件目までは自分の犯行で、四件目は　彼ら　の仕業だということ。三日前、私と笹々瀬さんが　彼ら　に襲われたのは自分のせいだということ。そして、その　彼ら　を操っているのが、藤枝蘇子先輩だということ。

藤枝先輩——ささめ姉さんのお友だち。「清楚」という言葉がよく似合う綺麗な人で、学校で姉さんと二人一緒にいるところを何度も見かけたし、一緒にお昼を食べたこともあった。

あんなにも、優しそうな人が——。

心の中でかぶりを振った。俯いて、やるせなさの下唇を噛んだ。

——案外人って人のこと見てないもんなんだよ。

笹々瀬さん。やっぱり私もその一人だったみたい。

「けど、不思議だね」

氷垣先輩は僅かに俯いていた。寂しげな横顔が月の光に照らされて、より一層白く見える。そして、一度だけ私の顔を見て、またすぐに視線を落とした。

「僕が事件の犯人だって聞いたのに、大野木さんは驚かないんだな」

「これでも結構驚いてます。私、あんまりそういうの顔に出ないタイプですから」

氷垣先輩が、口に手を当てて小さく嘖き出した。

「あんまり感情を表に出さない人が、あそこでメロンパンを渡したりはしないよ」

「それもそうですね」

笑いを押し殺す氷垣先輩を見つめながら、幽かに頬を緩める。声に出して笑わないのは、そういう場所じゃないと思ったから。そのとき浮かべる表情が、そういう人の前で見せるそれではないと思ったから。

もし、氷垣先輩がそういう人でなかったなら――。

「氷垣先輩。私たちが最初に会ったのって、ここじゃないですよ」

私もためらうことなく、笑うことができたのに。

「そりゃあ、同じ学校に通ってるんだから、何度かすれ違ったりはしてるだろうね」

「氷垣先輩」

私の声は、思った以上に大きく夜の中に響く。ややあつて氷垣先輩が口を開いた。

「ああ、そうだね。……君の言う通り、僕たちが最初に出会ったのはここじゃない」

氷垣先輩は空を仰いだ。ときに白く、ときに赤く、ときに青く、様々な色で瞬く星に目を細めてから、私を見た。そして、とある日付けを口にした。忘れもしない日付けだった。

「覚えてるか？ それは、僕たちが最初に出会った日だ。僕たちが――最初に出会った夜だ」

「はい」

「そして――僕が初めて事件を起こした日だ」

最初の事件が起こった日。それは、一匹の飼い犬が殺された日。

「あの日——私はちよつと 用事 があつて、その 用事 を片付けるために外へ出ました。私はその途中で氷垣先輩を見たんです。氷垣先輩は大きな斧みたいな物で、犬を襲っている最中でした」

そう、私は稲荷神社で氷垣先輩に会ったときから気付いていた。メロンパンを渡すとき、手が触れ合つたのにドキドキしなかつたのも、付き合つてると訊かれて動揺しなかつたのも、すべては——私が最初から氷垣先輩を、そういう人として見ていたせい。

「ああ。けど、よく僕だとわかつたね。あの日は今日みたいに月明かりもなかつたのに」

「月明かりは、要らなかつたんです」
「要らなかつた？」

「はい。だって私はあの日、向こうの世界にいましたから」
向こうの世界は、 彼ら の世界。 彼ら の世界には時間の流れがあつても、空の移り変わりがなから、夜も暗くて歩けないということはない。だから、視えたのだ。暗闇の中、氷垣先輩の犯行が。

「向こうの世界は、夜でも明るいんだ」

「はい」

「そつか。月明かりも街灯も要らないのか。夜の散歩が楽しそうな世界だ」

氷垣先輩が、幽かに笑つた。

「氷垣先輩は……いつ、私を？」

「ああ、僕が大野木さんを見たのは——大野木さんが丁度、怪物たちと戦っている最中だった。そのときはまだ藤枝さんも普通だったと思うから、あのときの僕は——まだ怪物たちの存在を全然知らなかつた」

「なら、そのときの氷垣先輩には、私が変な人に見えたんでしょうね」

氷垣先輩には 彼ら も赤い苔も視えてはいないのだから。

「いいや。確かに普通の娘じゃないな——とは思つたよ。でも、そ

れ以上に——何と言えはいいのかな。戦っている君が、とても羨ましく思えた」

——羨ましい？

この人は知らない。あの眼に焼き付くような、見ていてだけで眩暈のするような、夢に何度も現れるような、あの 赤 を知らない。何も——知らない眼をしている。そんな人に何が——。

「だって、とても綺麗な眼をしていたから」

こんな人に——。

「僕にはいくら頑張ったって見えないような、何かとても綺麗なモノを視ているようだったから」

どうしてだろう。氷垣先輩は何も視えていない人のはずなのに。

綺麗——その一言だけで、胸のあたりがすつとした。

この人は悪いことをした人なのに、どうしてこんなにも屈託なく——。

「だから、とても羨ましいとそう思ったんだ」

屈託なく……？ どこが？ どのあたりが？

だって今、氷垣先輩が浮かべている笑顔は、どう見たって私がよく使うあの笑顔なのに。

氷垣先輩が三日前の昼休みに見せたあの笑顔、氷垣先輩が今日ここで私に全てを話してくれた理由。

違ったんだ。猫じゃなかつたんだ。あの日、氷垣先輩が本当に身を案じていたのは——。

「氷垣先輩。私、何であのとき先輩が私と笹々瀬さんに事件の話を振ったのか、ようやくわかりました。——先輩が心配していたのは、私だったんですね」

氷垣先輩が目を見張った。それから、何とも言えない表情でしばらく眼を泳がせたあと、まるで私から顔を隠すように俯いてしまった。

「あれは違う。あれは僕のミスだったんだ」

「違います。そうじゃないです。氷垣先輩はわざとあの話を私たち

に振ったんです」

「僕が藤枝さんを利用して、故意に君たちを襲わせたっていうのか？」

私は、何も言わず頷いた。

「事实は——そうです。でも、氷垣先輩が求めていた結果はそうじゃなかった。……氷垣先輩はこう考えたんじゃないですか？ 私なら、藤枝先輩を止められるって。藤枝先輩の操っている彼らを倒せるんじゃないかって。だから、先輩はあそこで私たちに事件の話題を振って、私たちを標的に仕立て上げた。自分の力ではもう藤枝先輩を止めることができないと諦めてしまったから」

でも——と言って、一端口を噤^{つぐ}む。

「私は、氷垣先輩の期待に応えられなかったんですね」

あの日、私は のつぺらぼう に負けたのだから。藤枝先輩を救い出せなかったのだから。

「恨んでいないのかい？ 僕を」

氷垣先輩の声は震えている。

「君をあんな目にあわせた僕を、死ぬような目にあわせた僕を、君は恨んでいないのかい？」

「恨んでなんか——いません。だって、氷垣先輩のために戦ったわけじゃないですから。私は自分の意思で勝手に戦って、勝手に負けて、勝手に死ぬような思いをしたんです。あの戦いは私だけのモノだから、私は先輩を恨んでなんかいません」

「そんなんっ！」

そこで、氷垣先輩はようやく顔を上げた。暗がりの中、瞳がちらりと輝いて見えた。

「どうして君はそうなんだ！ どうして君は、事件の犯人である僕を責めないんだ！ どうして君は、藤枝さんのことを君に押し付けて逃げ出した僕を侮辱しないんだ！ どうして君は、君を騙した僕

を――」

「多分、資格がないからですよ」

腰を上げ、後ろで手を組んだまま歩く。月の光が優しい。身体ごと氷垣先輩の方を振り返る。

「私、こう見えてたくさんの命を奪ってきてますから」

氷垣先輩が、あつと呟いた。ふらふらと視線が落ちた。

「でも、君のは正当防衛だろう？」

「仮に正当だったとしても殺してることに変わりはないですよ。氷垣先輩。先輩が思ってるほど、私って綺麗な娘じゃないんです。先輩が夢に見ているほど、彼らの世界は綺麗なモノじゃないんです。そんな世界で、来る日も来る日も氷垣先輩より多くの命に手をかけている――そんな私に氷垣先輩を責めたり、恨んだりするような資格ありませんよ」

「君は――」

「はい？」

「大野木さんは、それで平気なのか？」

資格がどうかそんな言葉で飾り立てて、溢れそうな思いを押し殺して、怪物たちと戦いながら、生きてきて平気なのか。

幽かに――本当に幽かだけれど、笑みが零れる。

「割と平気ですよ」

一緒に罪を背負ってくれるキョウダイたちがいますし――と言うのは、心の中だけに留めておいた。

本音を言つと、氷垣先輩が動物たちを殺したことについて特別な感情なんてなかった。もう単純に慣れてしまっているんだと思う。自分とは直接関係のない命が、彼らによって奪われて仕舞うことに。

日傘を差し、氷垣先輩に背を向けた。

「氷垣先輩、殺すってこういうことだと思っんです。私みたいに、何も感じなくなってしまうことだと思っんです。私は、自分みたいな人がこれ以上増えて欲しいとは思いません。だから氷垣先輩。先

輩がどうしてあんなことしたのか、その理由はわかりませんが、今の私を少しでも『怖い』と思う気持ちがあったなら、もうあんなことは止めて下さい。自分がしたこと、貴方なりのやり方でしっかり反省して下さい」

でないと――。

「でないと先輩は――私みたいになってしまいます」

私が歩き出そうとしたところで、

「大野木さん！」

氷垣先輩が強く私の名前を呼んだ。

「君は――僕と出会ったことを後悔しているかい？」

弱々しい声。深呼吸をひとつした。ちよつとだけ頭が冴えたような気がした。

「氷垣先輩。私、そこに鞆置いてますよね」

「えっ、あ、ああ……」

「その鞆、先輩に預けます。中に私の日記帳が入ってるんです。夜が明ける頃には必ず戻って来ますから、その、悪いんですけど、できればそれを持ってここで待っていて下さい」

「……日記帳？」

突然のお願いと「日記帳」というあまりに場違いな単語に、首を傾げる氷垣先輩の姿が目に見えかぶ。私は、はいと静かにけれど力強く頷いて、

「――私、その日記帳にその日起こったいいことしか書かないんです」

と言った。

稲荷神社の石段をボスとヘビドリを連れて下りる。

『あゝ、なあんか引つかかるんだよなあ』

私の頭ほどの高さを飛びながら、ヘビドリが首を捻った。

「何が？」

『あの氷垣とかいうヤサ男が言ってたことだよ。あの顔ナシ集団を指揮してんのお嬢の姉貴のダチで、先輩なんだって？』

「……うん、みたいだね」

「そこなんだよ、そこ！」

ヘビドリが顔を近付けてきた。飛び散る唾に眉根を寄せながら、ああやっぱり舌割れてたんだとどうでもいいことに気付く。

『今更言うまでもなく、おいらあついさっきまで珠置山に偵察に出た。そこで山頂にある神社があいつらの根城だつてことを突き止めた。でもよお。その根城に人間はいなかったんだ。これは何もおいらの視野に人間が入らなかったとか、そういうこと言ってるんじゃない。本当に全くこれっぽっちもヒトがいた痕跡がなかったんだよ。ヒト特有の残り香すらそこにはありやあしなかった』

のつぺらぼう と 豚 を使役しているはずの藤枝先輩が、肝心の根城にいたことがない……？

氷垣先輩は言っていた。藤枝先輩は、珠置山に隠した氷垣先輩の罪 を今もなお死守していると。それなのに珠置神社にはヒトがいた痕跡が残っていない。それって一体――。

――その神社には「ヒト」がいた痕跡がない。

思わず、あつ……と声が漏れた。

もしかして、まさか、そんな。藤枝先輩はもう。

『お嬢』

「えっ？」

ボスの低い声で、我に返った。

『俺にも今回の事件、引つかかる点はいくつもあります。あの氷垣という男、藤枝蘇子が怪物を操っている――と断言していました。だが、少なくとも俺の知る限りじゃ、例え俺たちの姿形が視えたところで、この世界の人間に本当の意味でそんなマネできるわけがね

えんです。だとしたら、その怪物たちとやらも何らかの目的があつて藤枝蘇子に力を貸しているんでしょう。とはいえ――」

ボスが最後の石段を跳び下りた。着地点にあつた苔が澄んだ音を立てて潰れた。

『もう、お膳立ては整えちまいましたし、全員肚あ括った。脳味噌こねくり回して考えるのは、ひとまず保留と致しまして――」ここからは全員一丸、五体^{からだ}で真実に辿り着く時間と参りましょう』

振り返り、不敵な笑みを見せるボスの隣に、私も最後の一步を氣持強めに下ろす。

「うん……そうだね。皆で行こう、珠置山へ」

真相は、きっとそこにあるんだから。

『無傷』

【大野木 ココ】

斜面のきつい獣道が続き、僅かに息が弾みだした頃――。
しゅー、しゅー。しゅー、しゅー。

聞き覚えのある呼吸音に顔を上げると、そこはもう私の知ってる
珠置山じゃなかった。

地面から這いずり出してくるモノ。木の表面から熟れ過ぎた木の
実みたく落っこちて来るモノ。

肩に乗っているボスが腕を組んだ。

『邪か』

邪――地中に棲む豚の形をした中国の妖怪。それが 豚 の正体
だとボスは教えてくれた。

「すごい数だね」

『ええ、何せ邪は存在^{モノ}ではなく現象^{コト}。天変地異の地異と同義故、その
数に際限などありません。そんな連中相手に太刀を振るうな
ど、賽の河原の石積みが如し。真に討伐すべきは、大地に宿る気を
御し土塊から邪を創り出している――形ある存在です』

「つまり 豚 を倒すのは時間の無駄で、どこかにいる親玉を倒せば
いい――ってこと？」

『聡いキョウダイ分を持つて、ボスは幸せです』

自分のことをボスと呼んでいるのが何だかおかしかった。

その間も、邪の増殖は止まらない。世界を覆う苔を日焼けあとの
薄皮みたくぺろりと捲れば、真っ白な 豚 たちが寿司詰めになっ
ているんじゃないかって思うくらい。

『お嬢』

「うん、大丈夫。覚悟はできてる」

日傘を畳み、その石突^{てっぺん}で地面を二回突いた。目の前の地面が盛り
上がっていく。私の身長の二倍はある真っ赤な海坊主。すでに五つ
以上のそれが、視野を遮るように現れつつある。打ち合わせ通りな

ら、私の遙か後方にもいくつか浮上しているはずだ。

日傘を振り上げ、息を吸い込む。戦場の空気いくさばが身体に行き渡ってゆく。背筋が震えた。

「——行つて！」

振り下ろす。直後、海坊主が一斉に噴火し、真つ赤な津波と化した。木々をなぎ倒すほどの勢い。そこに潜むカエル人間たちが、豚の群れへと迫っていく。

最初に波から飛び出したのは、抱っこするにはちよつと厳しいくらい大きなカエル人間。石斧を担いだ彼らは、松ぼっくりに似た生物——四本脚は皮がルーズソックスみたいになつてのによく走る——に跨っている。名前は特にない。眼が蜻蛉みたいだから『トンボツクリ』とかどうかと言つたら、何故かヘビドリにこれ以上犠牲者を増やすのだけはマジ勘弁して下さいと頭を下げられた。カエル人間たちも周りでうんうんと頷いていたけれど、あれはどういう意味だつたんだろう？

その後ろ、一丸となつた大ガエルが続き、彼らの背を石槍で武装したカエル人間が追いかける。

緑の津波と白の防波堤が、ぶつかった。

走るトンボツクリが邪を蹴散らし、跨る大ガエルが石斧でそれを払い除ける。敵陣に決じ開けられる、大きな穴。そこを二列目が押し広げ、バラバラに逃げる邪を三列目が追い掛け、叩いていく。

「すごいね」

『ええ、相手も隊形であるのなら理想的な戦運びと言えましょう』

「——どういう意味？」

『相手は隊形ではないという意味です』

隊形ではない？——ああ、そっか。

表情から察してくれたのか、ボスは続ける。

『お察しの通り、邪は主の命ある限り無尽蔵です。長期戦に持ち込まれれば不利なのは言うまでもなく、何より脅威とすべきは連中が神出鬼没であること。陣形に死角から攻め入ることが奴等にとって

造作もない以上、このままなら敗走は必至でしょう。』

ボスが、私の肩から下りた。枝切れを拾い、両手で握り竹刀みた
く中段に構えた。

「ふんっ！」

気合の一声に、苔が枝切れへと群がっていく。そうして現れたの
は、白木の鞘に収まった小刀。ボスが持つてると「ドス」という言
い方がよく似合う。

ボスは、それを両手でこちらへ差し出すと、

『姫君に懐刀は付き物でしょう。』

口の端を歪めた。柄には、布が巻かれていた。

これが、今回の私の武器。苔を使った武器の精製と自己暗示の併
用は、とにかく脳に負担をかける。二つを同時に使っているのはこ
そぞというとき。私にしか斬れない大将首を前にしたとき。

「ありがとう。大事に使うね」

そう言つて、私がそれを受け取るのと、

『はいはい珠置神社へと続く安全安心なルートを再度確認してくる
というそれはそれは偉大な軍功を成したヘビドリちゃんが無事お嬢
の御肩に帰還しましたよーっと。うつわ何ナニこのスペクタクルな
眺め。こんな関ヶ原見たことねえ！』

肩にヘビドリが羽を休めるのはほぼ同時だった。爪が食い込んで
ちよつと痛い。

『ヘビドリ』

『オウ。何だいカエルの旦那？』

『それは本当に——安全安心なルートなんだろうな』

恐い声で念を押すボス。ヘビドリが肩を竦めた。

『ああ、正真正銘安全安心さ。豚サン連中が出てこないって意味じ
やあな』

邪が出現することのない神社までのルート。それが「ある」とい
うことは、ここに来るまでの間にヘビドリから聞かされていた。同
時に、それが間違いなく罷だろうということも。

「ねえ、ヘビドリ。そのルートが藤枝先輩の見落としてってことは、本当じゃないの？」

『期待を裏切るようで悪いが、有り得ねえよお嬢。たとえその藤枝とやらがミスに気付かなかったとしても、そいつが侍らせてンのはこと　土遊び　に關しちゃ一級の地宰じさいだ。龍脈りゅうみくを操しって豚やら人型やらを作り出せるあの干からびた羊の肝っ玉が、こんな間抜けな見落としするとは思えねえ』

「じゃあ、やつぱり——」

『ああ、百パーセント罠だぜ。しかも、こっちが罠だとわかつてるのに突っ込まざるを得ないクソ仕様だ。プライド的な意味でな。何せそこには——』

ヘビドリが、ボスに視線をよこす。

『お嬢の面に泥を塗った張本人がいる』

私を、私たちを、一度殺した相手。

左腕ひだりうでがずきりと疼いたような気がした。

「無傷むしょう、だよな」

地宰が起こす地異によって生まれた、無傷という名の地底人。それが　のっぺらぼう　の正体。

——宇宙人じゃなくて、地底人だったんだ。笹ヶ瀬さんに話したらどんな顔するかな。

『お嬢！』

ボスの鋭い一声。一匹の邪が、こっちに飛んで来ていた。ぶつか——目を瞑った直後、バチーンという乾いた音が響いた。恐る恐る眼を開けると、そこには背を向けたボスとぴくりとも動かない邪。多分力エル人間の攻撃で吹っ飛んだ奴が、こっちに飛んで来たのだろう。邪の横腹には、椀型がくつきり付いている。ジャンプしたボスが、バレーのスパイクよろしく叩き落としたのだろう。

『少し悠長にし過ぎたな』

ボスが戦場を見つめながら、肩を回す。

——そう、最初から私たちはこのつもりだった。ボスたち力エル

人間が邪の足止めをしている間、私はヘビドリ先導の下、珠置神社を目指す。最初から二手に分かれて行動しなかったのは、道中二つの武器を禁じられ丸腰な私を、ヘビドリだけで守るのはほぼ不可能なため。のっぺらぼうを倒してなお、地宰と戦えるかどうかは不安だけど、もう引くわけにはいかない。

『ヘビドリ。お嬢は任せたぜ』

『おう！ 合点承知之助！ さあ、おいらに付いてきなお嬢！』

ヘビドリが肩を離れた。すぐに飛び出さず、頭上で羽ばたいているのは、私の準備を待っているからだ。近くの杉から雫った苔を耳へ押し込む前に、ボスの小さくて、けれど大きな背中へ声をかける。

「ボス！」

ボスが振り返る。目が合った途端、頭の中が真っ白になった。稲荷神社で氷垣先輩にメロンパンを押し付けた日のことが頭を過ぎる。どうしよう。何か、何か励みになるような言葉を――

「にっ」

『に？』

「逃げてもいいから――死なないで」

ボスが――眼を点にした。眼を伏せて、口の端をつり上げながら、
『御意』

と頷いた。

こねていたビー玉大の苔を耳に入れる。

瞳を閉じ、瞼の裏に描くのは――狼。戦場と化した紅の杉林を吹き抜ける一陣の旋風。仲間が隣にいなかったって心はいつも共にある誇り高き獣。

苔を踏み潰す音よりも、心臓の音の方がよく聞こえる。

どきん、どきん、って。憑依しているときのこの感じは、結構好き。

右手に小刀、左手に日傘を持って、ヘビドリの尻尾を追いながら、

頭の中でおさらいする。

地宰。千年経った羊の肝が化け、大地を流れる気——いわゆる地^ち気を操る中国の妖怪。邪と無傷は藤枝先輩ではなく、正しくはこの地宰に使役されている。だから必然——地宰を倒せばこの戦いは終わる。

正直なところ、話し合いの中で「気」という単語があまりにも自然に出てきたときは、どういう顔をしていいのかわからなかった。ヘビドリが言うには「人間の体から地球まであらゆる場所に宿っている眼には見えないエネルギー」のことをそう呼ぶらしい。

そして、地中を流れている気の道を「龍脈」という。これは人の神経構造とそっくりで、龍脈にとつて悪いことをしたら、色んな病気を引き起こしてしまう。例えばよくある怪談で、校庭にある樹齢何百という木を伐採したら、工事の人が事故に遭ったというお話があるけど、これがそういうことらしい。正しい龍脈のツボを押さえていた木を切ったから、土地が病気にかったのだ。

左右に視線を走らせる。今走っているのは木馬道^{きんまみち}で、両脇にはたくさん邪が見える。

『お大名様つてのあこういう気分なのかね』

私は、どうだろうねとだけ言つて、軽い笑みを返す。

——本当にこの道は結界の外にあるんだ。

邪が入って来れない安全安心なルート。ならこのルートの守りは、間違いなく あいつ だ。

お腹の底が、ずしりと重くなる。

珠置山に張られている結界の規模は、地宰の力量を遥かに超えているらしい。そうなると、当然誰かが影で地宰をサポートしていることになる。その役目を果たしているのが、殺されたウサギ八匹ではないかとボスたちは言つてた。

ウサギは「更新され続ける生命」のシンボル。なら、その死体で正しくないツボを押すと何が起きるのか？ 地宰が張った「主の命ある限り邪が無限に湧き出す」という結界に「更新され続ける生命」

という相性のいいタイプが加わって——結果、邪の増えるペースが大幅にアップしたそうだ。

これから逃れる方法は、地震と同じ。震源地——ウサギの死体が埋まった場所から距離をとればいい。ウサギ一匹の有効範囲なんて見当もつかないけど、さすがにこの山をすっぽり覆えるほどではないと思う。

実際——こうして 穴 はあった。話し合い中、せっかく防衛陣の手薄なところがわかってんだし一点突破しやうぜと、とある力エル人間が提案したけれど、すぐボスに却下された。

この見落としてはどう見ても憚だし、もしかしたらウサギはゾンビ化しているかもしれない。それはウサギが動けば結界も動くということ。皆で進んでいるところを、八重の結界で包囲されては一溜まりもないと、ボスは言っていた。……「ゾンビ」という単語が出てきたときも、やっぱりちよつとくらりときた。

ちなみにヘビドリが、どうやってこのルートを発見できたのかというところ。

——へへっ、そりゃあウサギの臭いでわかったのさ。こう見えておいらってば鼻が利くんだよ。死臭にドンマな現代っ子のお嬢と一緒ににされちゃあ困るぜ。

……もう蛇なのか、鳥なのか、犬なのか。

今頃ボスたちは、十匹程度のチームに分かれて走り回っている頃だろう。そこまでは作戦通り。ボスたちの役目は相手が動ける結界であることを想定し、逃げる振りをしながら結界を分散させること。たとえ動かないタイプだったとしても、広い範囲を逃げ回られれば地宰だってそれだけ多くの地気を操らなければならない。ボスたちが疲れ果ててしまう前に、無傷と地宰を倒して藤枝先輩を止めないと。

——無傷と地宰を倒して？

足にぐつと力を込めたのは、そうしないと止まってしまいそうだったから。

藤枝先輩は、氷垣先輩を庇うためにこんなことをやっている。

氷垣先輩のことが好きだから。

じゃあ、無傷と地宰を倒したら——藤枝先輩の　好き　は止まるのかな？

と、頭上で葉擦れの音がした。

見上げると、枝の上にいた二匹の邪、その内の一匹が宙に浮いていた。

「えっ」

突っ込んでくる。それも、きりもみ回転しながら。

小刀を薙ぎ払った。邪が、空中で真つ二つになった。

もう一匹も宙に浮く。いや——違う。浮いたんじゃない。私には視えている。邪を持ち上げる両腕が、真つ白な身体が、黒い半分の月が。

地底人。無傷。のっぺらぼう。私たちを一度、殺した相手。

投げ付けられた邪を横つ跳びで避ける。自分の意思で結界を出られなくても、こういう出方はできるんだ。

無傷は、木馬道を挟んだ向かいの木へ。そこにいた邪を、こつち目掛けて蹴り飛ばして——

目の前が、真つ赤になった。両腕で顔を庇う。邪をわざと爆発させて、煙幕代わりにしたんだ。慌てて後ろに跳んで、無傷を探す。いない。どこにもいない。木の上にも、茂みの中にも。

「一体——」

どこに？

『畜生！　何なんだよあの色白マツパは！　忍の末裔か何かあ？』

辺りを見回すヘビドリの真下をなんとなく見た。地面が——盛り上がったいた。

「ヘビドリ！」

その声を掻き消したのは、白い影が地中から飛び出した音。無傷

だ。その腕がヘビドリの尻尾を掴んで、お嬢と呼ばれたような気がして——頭にすっごく血が上った。

——助けなきゃ！

ヘビドリが叩きつけられた。翡翠の鱗と千切れた赤い苔が散った。日傘を放って、たった今踏みしめている苔にお願い。苔を使って滑走し、胸目掛け小刀を突き出す。

だけど——その先にあるはずの手応えはなくて。躲されたって思ったときには、世界がぐるりと回っていた。受け身を取り、小刀を構え直し、無傷を再び見据えたところで、

「な——」

言葉を、失った。

無傷が日傘を持っていた。それだけなら、いい。それだけなら、まだ。問題は、武器を精製するときの——あの紅い蟲たちが、それへ群がりつつあったこと。傘布が、親骨が、持ち手が、蛾やムカデ、ミミズへと姿を変えた苔に喰われていく。急いで止めないと——そう思うのに、身体が言うことを聞かない。

やがて出来あがったのは、日本刀じゃなかった。反り返った刃、ピストルの持ち手みたく曲がった柄からぶら下がる赤い飾り布。似たような刀が、まるで舞うような動きで振り回されているところを、テレビで見たことがある。

——中国刀。

『嗚呼、マタダ。マタ五月蠅イノガ来タ』

無傷が、胸に手を当てた。

『ドウセ御前モ此処二来ルノダロウ？ 主ガソレヲ望ムノダロウ？』

「主……？」

それは——地宰のこと？ 藤枝先輩のこと？

『ダガ、モウ不要ダ。否、元ヨリ不要ダ。コレ以上ノ魂ハ耳障リナダケダ。俺ノ存在ヲ虚無ヘト近付ケルダケダ。本当ハ主ノ声ダツテ、モウ良ク聞コエテイナインダ。俺ノ居ル深い深い闇ノ底マデ、届イテイナインダ』

刀を払った。私が刀を振るったときに出る——あの独特の音は聞こえなかった。けれど、その一太刀が脅威であることに変わりはない。刃先が、私に向いた。

『ダカラ御前八要ヲナイ。——白子ヨ。陽光ト月影ガ渦巻イタ末ノ虚無ヘト還レ』

わからない。こいつの言っていることはちつともわからない。

——でも、確かにわかっていることが二つある。

刀を持った手首を沈め、跳び込んでくる無傷。半歩、下がった。躲すならこれで充分。案の定、バネのように跳ね上がった刃は、私の鼻を掠めるだけに終わった。それが振り下ろされるより早く、回転しながらジャンプ、蹴りを放つ。無傷の喉に、足刀がめり込んだ。呻き、よろよろと数歩下がった。

『御前……っ！』

また襲いかかって来る。感情的な声に内心びっくりした。荒々しく踊る刃はまるで嵐のようで。最中、無傷が背を向けた。やって来るのは、多分回転の勢いを乗せた一撃。頭を下げて躲しつつ、ローキックを出すと、あっさり避けられた。当然。だって、避けられるスピードで出したんだから。

すかった右足を、すぐさま逆廻し蹴りへ。横に身体を倒しつつジャンプ、全体重を乗せて、無傷の頭を蹴っ飛ばす。これは——あのときの戦いで、無傷が私に見せたコンビネーション。落ちる寸前で横受け身を決め、すぐさま立ち上がると、三メートル程離れた木の根元に無傷がのびていた。

「……ざまあみろ」

慌てて口を押さえる。

えっと、そりゃあんな目に遭わされたら、これくらいの仕返し誰だってしたくなる——よね？

無傷が、刀を杖代わりにして立ち上がろうとしている。

——ひとつは、無傷が私のキョウダイを傷付けたということ。

無傷のいるところまで続く苔に、念を送る。さっきよりもさらに速く、無傷の懐へと運んで欲しい。しやらしやら苔が擦れ合った。それは、彼ら かなりの了解の表現。直後、世界が加速した。走る狼から見える景色ってこんな感じなのかな、と思ったときには——もうそこは、無傷の懐。突き出す。粘土の塊に刃を突き刺したような手応え——柄を離し、後ろに跳んだ。

無傷のお腹に刺さった小刀から、じわじわ赤が広がる。手から、中国刀が滑り落ちた。

——もうひとつは、私の方が無傷よりも強いということ。

両腕を大きく広げる無傷。来る。踏み出された一步、その膝へカウターの踵蹴り。そこを足がかりに空中でくると一回転し、脳天へ踵落とし一閃！ 着地後、顔を上げると、無傷の首から上がなかった。刺した小刀は、引っ張ればあっさり抜けた。

無傷が両膝をつく。あちこちからさらさらと苔を漏らしながら、残された身体が崩れていく。

何気なく小刀を見た。刃に映っているのは、どこかぼんやりしてる私の顔。

——でないと先輩は……私みたいになってしまいます。

小刀を胸に抱いた。柄を両手で握り締めた。

「氷垣先輩——」

名前を呟く唇が——幽かに震える。

「やっぱりこんな人、増えない方がいいですよ」

頭の上には、黒と赤で彩られた空が広がっている。

何だか——月が見たくなつた。

——ヘビドリは？

はつとして、辺りを見回す。見当たらない。埋もれてる？ とにかく早く助けないと。

頬を風が撫でていった。その冷たさに背筋が震えた。

どことなくざらついた感じがするのは、風に苔が混じっているせいな。

——風？

立ち止まって、心の中でかぶりを振る。おかしい。だって、彼らの世界には風がない。ヘビドリのように空飛ぶ。彼らは、みんな風以外の何かに乗って空を自由に舞っている。じゃあ、どこからともなく吹くこの風は……？

ふと、細長い霧のようなものが一筋、顔の横を流れていることに気付いた。赤い糸を何本も束ねたようなそれは、まるで地を這う蛇のよう。五匹、八匹、十匹と、それぞれが意思を持っているかのように、傍を横切っていく。ゆたりゆたりと。まるで私の後ろに獲物がいるのだと言わんばかりに。

「うし……ろ……？」

でも、嘘、そんなはずは。振り返る。蛇の群れは大きく螺旋を描きながら、そこへと吸い込まれていく。さっきまで無傷がいた場所むしょうに。無傷の死体が崩れた場所に。

「あ……」

蛇たちが創る。目の前で、苔に命を吹き込んでいく。いけない。苔が寄せ集められていく。戻ってきてはダメ。赤い苔が赤いヒトガタへ。だって、私が倒したんだから。大の字になったヒトガタ。まるで時間を巻き戻すみたいに。もう二度と。全身を覆う苔は銅色へ。こつちに戻って来てはいけないのに。ペリペリと剥がれた銅色は宙へ。

地底人。無傷。のっぺらぼう。

未だ銅色の苔に隠された貌に、青筋すら見えないミルク色の身体。その姿に、二、三步後退ったところで――両脚が地面を離れた。一瞬息が止まって、小刀が手から落ちた。宙に浮いた身体を無傷の両腕がロックする。そのまま、私を担いで走り出した。後ろに何が待っているのかはわかる。樹だ。このまま、そこへ叩き付けるつもりなんだ。無傷の頭に肘打ちするけど効いてない。止まらない。――間に合うの？

途端、無傷が大きく傾いた。視界の端からやって来た何かが、無傷にタツクルを喰らわせたのだ。赤いトサカ、黄色い蛇腹、全身を覆う翡翠色をした鱗。

『どおつくうわぁんえええええ！すつ！！』

言ってることは、叫んでる内容はやっぱりよくわからない。

でも、今はその声で――こんなにも奮える。

無傷の頭を押さえつけ、膝蹴りを喰らわせる。苔の仮面がひび割れた。ロックが僅かに緩む。もう一発――そう思ったところで、突き飛ばされた。まだだ。後ろにあった樹を強く蹴り、その反動で無傷の貌に跳び膝蹴り。カウンターが決まる。二回、三回と転がって、四つん這いになった無傷が貌を上げる。苔の仮面が剥がれ落ちた、その貌には――

「え――」

ぼつかりと、満月が浮かんでいた。

口周りの空気が、陽炎のように揺らめいている。

赤い苔の消滅。ナイフが家の鍵へ。切り離された二つの世界。

――啼かせてはダメ――！

そう思ったら、聞こえた。しゃらしゃらと。苔が風もないのにそよぐ音が。こつちだよ、こつちにあるよって知らせる声。だから、そつちへ走った。素早く小刀を拾い上げる。

「阿ッ――！」

びりりと肌を震わせる確かな「音声」。飛んでくる揺らぎは丸い形をしている。小刀で受け止めた。重い。水に浮いている油みtainな七色がちらつく。固まった水飴に、刃を捻じ込んでいるような感触がする。小刀の背目掛け手刀を押し出し、当てる瞬間捻じり込んだ。打つのではなく押し込むイメージ。ボス直伝の掌底だ。弾いた小刀で、揺らぎを空へと押し返す。

ややあつて——空に穴が開いた。

打ち上げ花火が花開いたときと同じくらいの大きさだった。穴からは私たちの世界の空が覗いている。やっぱりそうだ。無傷の聲は苔だけじゃない。彼らの世界そのものを消し去るんだ。無傷は、ぴくりとも動かない。

『お嬢オ——!!』

聞き慣れた声に振り返る。

「へビドリ！」

『お嬢オ——!!』

飛びながら、翼を大きく広げる。なんとなく考えていることがわかったので、ギリギリまで引き付けてから、咄嗟に身をかわした。へビドリは、ええ——っという驚きの声を上げながらしばらく進んだあと、木にぶつかって止まった。そんなに勢い余ってたかな？

「もしかして——」

『何ス力』

大の字に張り付いたへビドリが、首だけをこちらに向ける。

「ぶつからないとオチがつかないからと思って、わざとやったりした……？」

『お嬢。おいらたちにあげ損なっちゃった菓子パンを、誰か他の家族にでもやりやあいいのに、それを家に持って帰ってきたそれっぽい理由が思いつかないからって、いや、そもそもそれっぽい理由なんて帰り道偶然見かけて美味しそうだったからとかそれっぽっちの

ことで構わねえのにそれすらも上手く口で伝えられなくって、結局無理して晩メシ前に菓子パンを食う羽目になるくらい普段は要領クソ悪いのに、こういうときの勘はイイのな』

「それ、要領関係ないよね」

ヘビドリがへへつと悪戯っぽく笑って、木から離れた。身体に付いた苔を翼ではたき落とす。

『いやあ、ソーリーソーリー。一体どこの聖堂騎士パラディンだよって言いなくなるくらいお嬢のディフェンスが固いもんだから、ちょっとした嫌味を差し上げようかと。おっ？　おいおい待てよお……。ひい、ふう、……。うっわ鱗ハゲ過ぎ！　私の年収低過ぎ！？　あのマツパ思いつ切りブン投げ過ぎだろ！　本気投げっぱなししていいのはジヤーマンのときだけだぜ！　ったく、この被害で一体何羽のメスヘビドリちゃんが涙あちよちよぎらせると思ってたやがる！　まあ、ハグの件は出来たら出来たで、バレたら間違はなくカエル旦那に五輪砕き喰らわされるんだろつけどな。無論頸椎やられるまで』

ヘビドリは、相変わらずおしゃべりだ。

今、私はヘビドリの声を聞いている。ヘビドリが、私に話しかけてきてくれている。

「なんか——」

『お？』

肩の力が抜ける。鼻を吸る。眉尻が下がる。

「大丈夫そうで——安心しちゃった」

ヘビドリが、大きく目を剥いた。

「どうしたの？」

『——あつ、ああ、何でもねえぜ。何でも。ただ、今の顔で充分元は取れたかなってよ』

「もと？」

『ハグなんて必要なかったんやってことだよ。しっかし、可愛く生

まれてくると女つてのあそんだけで勝ち組だねえ。もっとも可愛いだけじゃねえのがウチのお嬢サマ何だが。それよりさっきマッパがぶっぱなしたあの「んちゃ砲」。ははあん、なるほどそういうワケだったのか……」

翼を組んでうんうんと頷く。

「んちゃ砲」って何だろう……。さっき無傷が口から出したのをそう言うのかな。

とりあえず、何かなるほどなのか訊こうとすると、

『嗚呼…… 嗚呼…… 嗚呼……』

すすり泣くような無傷の声。膝立ちで頭を抱えていた。教室で見たとときとそっくりだった。

『嗚呼、五月蠅イ。何テ五月蠅イ。酷イ雑音ダ。悪夢ノ様ナノイズダ。悲惨魔道ノ世界ダ。コンナ、コンナ身体ガ俺ノ身体ダト言ウノ力？ コンナ他所者ドラケノ身体ガ俺ニ相応シイト、似合イデアルトソウ言ウノ力？』

『ああ、そりやあうるせえだろうよ』

ヘビドリが前に出た。

『顔ナシさんよ。てめえ犬と鶏を、氷垣とかいうヤサ男がぶっ殺した動物の魂を丸呑みにしただろう？』

顔を伏せた無傷が、痛みに耐えるかのように唸る。

氷垣先輩が殺した——連続動物殺傷事件の被害にあった動物たち。その魂を無傷が丸呑みにした？

『そいつを噛み砕いてただのエネルギーにしてから取り込むってえならまだわかる。だが、てめえはそれを魂のまんまで呑み込みやがった。んなのうるせえに決まってるあ。何せ頭ん中にぶっ殺されたそいつらを放し飼いにしてるようなもんなんだからな。しかもそのバカみてえな数——あーっと、十二か？ いや、お嬢が一回やつちまったから十一だな。一つや二つ保険か愛玩目的でってえのならまだ納得もいくが、そんなに喰ったら自分のスペース無くなっちゃうことくらい、想像付いてたろう？』

無傷は反応しない。ただ、ぶつぶつと怨みの言葉を漏らすだけ。

ヘビドリが舌を鳴らした。

『想像は付いてた。だが、主サマが、藤枝とかいう嬢ちゃんがそれを望んだ。だから、そうしたのか』

——やっぱり応えない。

ヘビドリは溜息を吐いて、小さくかぶりを振った。そこだけは、どうしてもヘビドリなりに応えてほしいところだったのだろうか。もう一度、幽かに舌を鳴らす音が聞こえた。

どうしよう……。完全に質問するタイミングを逃してしまった。

『お嬢』

「なっ、何？」

『あの顔ナシが貌の穴ボコから出した声。おいらたちの世界そのものをぶっ壊すサイターのノイズ。ありや鶏を丸呑みして得た能力だ。鶏は「夜の終わり」を意味する鳥って言われててな。ほら、お天道様が昇りやあコケコッコーって鳴くだろ？ でもって、ここで言う「夜」ってのは、おいらたちの今いるこの世界のことだ。あいつは声だけで、おいらたちの住処を消し飛ばせるのさ』

「……その声。ヘビドリは使えないの？」

ヘビドリがずっこけた。わざわざ地面に向かって、それなりの勢いでヘッドスライディングしてくれた。結構真面目に訊いた分、ちよつと傷付いた。苔を払い落しながら戻ってくる。

『おいらは鶏に似てるだけであって鶏そのものじゃねえっつーの！ お嬢、おいらが朝日に向かって鳴いてるとこ見たことないっしょ？ いや、そもそも東からも西からも朝日昇らねえんだけどよ。ああ、まあいいや。鶏は鶏でクソ厄介だが、今回もつとヤバいのはむしろ犬の』

と、強烈な雑音。教室で聞いたものと同じ、たまらなく不快な叫び。両耳を押さえて無傷を見ると、

「え——」

右腕が肘のところで千切れ、落ちるところだった。絶叫に紛れて、

熟し過ぎた果物がやつと枝を離れて落ちたような音。それは苔に変わって。腕の断面から溢れたピンクの液体が、かき氷のシロップみたいに降り注いで。泡立つ断面から、新しい腕がよきによきと生える。いや、腕なんかじゃなくって、それは犬の頭。赤い眼に白い毛並み。ナイフのように鋭い牙。

身体を丸める。背中の骨——「天使の羽」と呼ばれる骨の左側がいきなり出っ張った。突き破って飛び出した。真っ白な鳥の翼。鶏の頭も、肩の辺りから一緒に飛び出す。

無傷が啼いて、右腕の犬が吠えて、片翼の鶏が鳴いて。

堪らず——目を背けた。

その醜さに、痛々しさに。

——これが、いくつもの魂を閉じ込めた檻のなれの果て。

『結局、そういうオチか……。従うだけが忠義じゃねえたあよく言ったもんだぜ』

「じゃあ、藤枝先輩がああなるよう命令したって言うの？」

『さあて、どうだかな。こうなることを見越してなかったとしても、全くの無関係ってこたあねえだろうよ。魂を自ら何個も丸呑みするような自傷行為、ご主人様から尻でも叩かれなきゃ普通はやらねえしな。それよりお嬢。さっきの続きなんだが、犬つてのは「死者の魂を導く者」としての扱いを受けてる』

「死者の魂を導く……？」

『お嬢はその能力をもう身を持って体験してるはずだぜ？ 実際——

——あいつはすぐに蘇えっただろう？』

頷く。そう、確かに無傷は蘇えった。

『そいつが犬の魂が持つ能力だ。いくら魂のストックがあるからって、普通あんなにも早く復元して動き回れたりはしねえよ。魂と器が馴染むのには時間がかかる。魂同士でケンカすっしな。今から殺し合いをして一番強い奴だけがモノホンの魂だぜってな具合に。で、

犬の役割は、その待ち時間を大幅に短縮すること。ケン力を強引に仲裁して、はい皆さん一列に並んでねとか、勝手に魂を蘇える順に並べちゃうわけ。でも、今回の場合は流石に数が多過ぎだ。おまけにお嬢が最初に仕留めたのは、消去法で考えるに犬。残る一匹で十一を面倒見るのは、さすがに限度があったんだろうよ。その結果が、まあご覧の通りだわな』

ヘビドリの横顔は、やり切れない思いを押し殺しているように見えた。

——主サマが、藤枝とかいう嬢ちゃんがそれを望んだ。だから、そうしたのか。

……ん？

「ちよつと待ってヘビドリ。消去法って何？」

『お？ ああ、おいら視えてるんだよ。あいつの魂。今残ってるのは無傷の一つ、鶏の十、そして犬が一つ。そこから考えれば必然的にさっきお嬢がやつつけたのは犬ってことになるだろ？』

「あつ、う、うん……」

もしかしてヘビドリは、こう見えて本当にすごいのかもしれない。無傷のあちこちが鳴き喚いた。まるで戦いのゴングのように。

『お嬢。言わなくても、もうわかってると思うが——』

ヘビドリが、苦笑った。

『あの貌ナシ、あと十二回蘇えるぜ』

あと十二回。

じりり……と踏み出した爪先に何かが当たった。目線を下げて、すぐに戻した。目の動きで、それがここにあるって事実を知られてはいけない。それにこっそり意識を集中する。いつも目を瞑ってやるから、やり辛い。無傷がばやけて見える。

——それでも、やるしかない。

と、無傷の膚が赤いブツブツに覆われた。貌も、喉も、胸も、腕も、脚も、犬や鶏と化した部分でさえ残すところなく。びっしりと一斉に。

小刀を振り抜き、無傷へ空気の刃を飛ばす。直後、無傷のブツブツから、真つ赤な糸が飛び出した。それが瞬時に編み込まれ、作り出された盾は、刃をあつさりガードした。

「なっ……」

『なっ、なんじゃあ、その防御方法！？』

無傷が突っ込んで来る。小刀をくるりと逆手へ。手首の動く幅が狭い方が力を入れやすい。大振りな右フック——犬による噛み付き攻撃を、小刀で受ける。牙に挟み込まれた小刀が軋む。犬の吐息が手にかかる。刃を押せばいい？ 引けばいい？

と、背後でギャツという鳴き声。振り向くと、ヘビドリが糸に縛られていた。

「ヘビドリ！」

ぐんつと腕を引っ張られる。手首に痛みが走り、消えた——と思ったときには、こつちを見上げる無傷が見えた。宙に、浮いていた。落ちながら前宙、四つん這いで着地と同時に無傷へ跳び掛かる。獣が爪で獲物を引っ掻くように一閃！ けど、またあの盾に弾かれる。ダメだ。一旦距離を取らないと！

そう思い、滑走し続ける私に放たれたのは、数え切れない程の糸。

木々の間を縫うように追いかけて来るそれは、道中で互いを擦じり合わせていく。私の腕より太く、先が尖ったそれは、もう単なる糸の束なんかじゃなくて――

「来る……！」

――ドリル！

小刀をがむしゃらに振り回す。斬られたドリルは奥に引っ込むと、他のと合体して再び迫って来る。まるでたくさんの頭を持った怪物と戦っているみたい。離れれば離れるほど、あれに意識を集中させるのが難しくなる。途端、視界が歪んだ。

――やっぱり無茶だったかな。

はっとした。ドリルが目の前にあった。避けられない。ぱつと赤が弾け、世界がひっくり返った。背中で地面を滑りながら、何とか両脚を振り上げ後転、膝を着いて――止まった。

……血の入った右目が、痛くて開かない。身体から、どんどん力が抜けていく。額は、多分ワシでゴシゴシされたみたいにささくれ立ってるんだって、鏡を見なくてもわかる。

無傷が、近付いて来る。空気の刃を飛ばしたけど、やっぱり無駄だった。

『サア、夜ハ終イダ^{シマ}』

髪に付いてた苔を摘まみ、とりあえず耳に押し込む。

『モウジキ黎明^{レイメイ}ガ来ル』

無傷の貌に浮かぶ黒い満月――その周りで、あの嫌な感じの虹色が歪んでいる。

ふと、気付いた。無傷の胸辺りに一つ、輪郭のはっきりしない黒い塊があることに。

さっきまで、こんなの見えてたっけ？

それは、一つじゃなかった。数えてみると、十二はあった。

最初、胸に目が止まったのは、そこにある影が一番大きかったから。

お腹にも、腕にも、脚にもそれはあった。

あつて、膚の上を漂っていた。規則性なく、人魂みたいに、ふよふよと。

——ああ、生きている。

そのとき、わかった気がした。藤枝先輩が、どうして無傷に動物たちの魂を丸呑みさせたのか。どうして無傷をこんな姿にしななければならなかったのか。

——生きていて、欲しかったんだ……。

死体を隠して、証拠を消して、氷垣先輩が犯人だという事実を「隠蔽」したいんじゃない。「抹消」したいんだ、この世から。殺された動物の命を、無傷の一部として生かすことで。そうすれば、氷垣先輩が殺したことはない——それが恐らく藤枝先輩の考え。藤枝先輩にとつて、氷垣先輩の為になる行い。

『サラバダ白子。御前ノ無ヲ喜ブ声ヲ聴ケ』

私は、想像する。瞼の裏に思い描く。大丈夫、あれが鶏の魂による能力ならば、朝を象徴する鳥の鳴き声ならば、これで必ず打ち破れる。

蜘蛛が動き出した。浮遊感がやって来る。足許が瓦礫になって崩れたけど、怖くはない。小刀を順手に。足の裏に地面が戻って来る。世界を塗り替える。声は、もうそこまで来ている。だから、目を開けるより先に振るった。ただ、水平に。

それで——世界は静かになった。

固まった水飴に刃物を通すような感覚は、微塵もなかった。

ゆっくり瞼を開くと、無傷が棒立ちになっていた。

『何ヲ……』

「前に——」

私の話を待つことなく、無傷は攻撃を再開した。小刀を振り下ろ

す。迫っていたドリルが、一瞬で元の形を失った。宙を漂う糸屑は、彼岸花に似ていた。

「義妹から聞いたことがあるんです。ナイチンゲールには『小夜鳴鳥^{どり}』という呼び名があって、夜の訪れを告げる鳥として考えられているんだって。だから、ナイチンゲールを憑依して、打ち消しました。貴方の夜を終わらせる 声 を、私の夜をもたらすこの刀で」

『其レ、ダケカ？』

「はい」

『本当ニ、其レダケナノカ？』

多分今の私は、さつき小刀に映っていたような、ぼうつとした眼をしているのだろうなと思う。

『有り得ナイ……ッ。有り得ナイゾ！ 教エ口白子！ 何時^{イツ}ダ！

一体何時其ノ刀ヲ呪物ト成シタ！？ 憑依ダケデ、想像シタダケデ、タツタ其レダケノ過程ヲ経タダケデ、魂ガ宿ツタ際ト同等ノ効果ヲ武器ニ付与スルコトナド、人間ニ出来ルモノカ！！』

無傷が、唸り声を上げた。それは、夜を終わらせる鶏の 声 ではなく、無傷自身の怒りの声。

十数本のドリルが、あらゆる方向から襲いかかってくる。でも、無駄だ。小刀を一振りすれば、全て粉々になる。刃先を、無傷に向けた。

「もう——そんな 幻戯^{げんぎ} は通じない」

力はいらない。迅さも要らない。殺意も要らない。

ただ、腕の力だけで小刀を振るう。

それだけで——たったそれだけの動作で、ドリルは糸屑になってしまう。

視界を埋める鮮やかな紅。彼岸花の群れ。

赤は血の色だと、命の始まりの色だと、以前どこかで聞いた憶えがある。

でも、違う。私が散らしたいのはこの色じゃない。

見えて切なくなるような、それでいて命の鼓動を感じさせるような色じゃない。

私が散らしたい色は——白い膚を漂う十二の黒だ。

滑走し、無傷との距離を一気に詰める。どくんつと。一際大きく心臓が打つ。

そう感じたときにはもう、無傷が目の前にいた。突き上げた小刀は掌で受けられた。

——無駄だ。どこに刺さったって結果は変わらない。

「お嬢の懐刀」に込められた夜の闇は、その身体にある十の太陽に必ず届く！

無傷が幽かに呻いた。私は柄から手を離し、後ろに跳ぶ。犬の頭が、目の前を下から上へ通り過ぎて行った。これで手許に武器はない。けど、大丈夫。本命は、ついさっき完成したばかりだから私は、じっと見つめる。白い身体に閉じ込められた魂の群れを。空気が、鈴のような音を立てて揺れた。

ころころと。とても清らかで、素敵な音。これは、もしかして——

「ナイチンゲール小夜鳴鳥……」

眼に映るいくつかの魂が、ぐにやりと歪んだ。そして、しばらくでいったあと、消えてなくなった。

「届いた……」

鶏の頭が、最期の一声を上げる間もなく崩れ落ちた。片翼も地面に落ちて苔に還った。

「ア、嗚呼……？」

無傷が、頭を揉み込んでいる。何が起こったのか理解できていな

いのだろう。それはそうだ。さつきまで頭の中で騒いでいた鶏十羽。それが一斉に消えてしまったのだから。二度と、鳴かなくなってしまうのだから。

『コノ空漠ハ、何ダ……？』

それは、多分自分自身に向けた問い。

「あと——二回です」

宣告する。残る黒色は、二つだ。

無傷がこっちに満月を向けた。そして、啼いた。すぐくうるさいでも、それだけだ。その声にもう朝を呼ぶ力はない。

——本命 をここまで持つて来て。

しやらしやらしやら。

無傷が走って来た。掌には小刀じゃなくて木の枝が刺さっていた。「お嬢の懐刀」は役目を終えたんだ。ありがとう、って呟いた。

手を前にかざすと、ソレは勢いよく苔の中から飛び出した。掴み取る。その感触が、何だか懐かしい。引き抜いて、すぐさま斬り上げた。何かがくるくる宙を舞った。犬の頭——無傷の右腕だった。ゆったりと中段に構える。うん……やっぱりそう。あなたが一番しつくりくるよ。

それは羽のように軽く。

まるで身体の一部かと思うくらい手に馴染み。

あくびが出るような迅さの一閃でも構わず空気を抉って喰らい。

どんなに乱暴に扱っても決して折れたり曲がったり刃こぼれしたりしない。

そんな——冗談みたいにデタラメな刀。

無傷と戦いながらもこっそり創っておいた、私の大本命。

残る魂は一つ、胸の辺りに一際大きな黒があるだけ。

『ソウカ……。ソウイウコトカ、白子』

無傷が、斬られた右腕を見ながら笑った。笑っているんだとそう

感じた。

『御前ガ、俺ニクレタノダナ？ モウ一度見セテクレタノダナ？
アノ澄ミ切ツタ世界ヲ。アノ安息ノ日々ヲ。俺ヲ、助ケテクレタノ
ダナ？ アノ魂ノ獄カラ。雑音ノ洪水カラ。ケレド何故ダ。何故ダ
ロウナ？ コノ五体ハ、ドウヤラ俺ガ無傷デアルコトヲ忘却シタラ
シイ。躰ガ思ウヨウニ動力ナインダ』

もう——見ているのも哀れだった。

足の裏全体で大きく一歩。それだけで、間合いに無傷はあった。
その足で体重を引っ張り、二歩目を出しつつ、振り抜いて——

無傷と世界を、遙か後ろに置き去りにした。

『月ダ……』

言われて、空を見たりはしない。あの 声 が空に開けた穴は、
もうとつくに閉じているとわかっていたから。そこに月はないって
わかっていたから。

『初メテ 声 ヲ得テ鳴イタ時、月ヲ見タ……青イ光ガ美シカッタ
脳裏に、あるイメージが浮かんた。黒い点が徐々に小さくなつて
いき——

『嗚呼、コレデ……ヤット静カニナル』

やがて、消えてしまった。苔の崩れる音がした。

とても——静かな決着だった。

「あ……」

脚から力が抜けた。刀を杖代わりにしようとして、し損ねて——
抱きとめられた。

——えっ？

びつくりして目を見開く。顔を上げて、もっとびつくりした。
黒いのつぺらぼうがいた。煙が渦を巻いていて、その上にシルク
ハットが浮いていた。私が掴んでいるのは、ケープを長くしたみた
いな黒いコートで、両肩に置かれた手は、執事みたいな手袋をつけ

ていた。

『出遅れてしまったようだね。手遅れにならなかったようで何よりだが』

「あ、あの……」

『私かい？ 私の名はクロ。親愛なる我が相棒^{パートナー}より授けられた名だ。以後お見知りおきを、大野木ココ君。否、別段見知って置いてくれなくとも構わぬのだが、頭の片隅にでも置いておいてくれれば、それはそれで実に喜ばしく思う』

……何だろう。ヘビドリに比べると、喋る早さも言葉遣いもずつと落ち着いてる。なのに、何だかすつごくついていくのが大変そう。なオーラを感じる……。あれ？ 今私の名前――

『ところで、大野木ココ君』

「は、はい……」

『君に一つ尋ねたいことがあるのだが、構わないだろうか』

ちよつと考えて、頷いた。

何だろう、いきなり。

『君が無傷に挑んだのは、君と 彼ら の誇りのためか。それとも――』

それとも……？

『藤枝蘇子が肩代わりした氷垣蓮太郎の罪を、さらに君が肩代わりするためか』

思わず、目を剥いた。それから、伏せた。

『無論、罪とは肩代わりできるものではなく、動物たちを殺めたのはあくまで氷垣蓮太郎の所業だ。しかし、藤枝蘇子はそうは考えなかった。彼によって無残に破壊された動物たちの器、そこから解放され森羅万象の概念に還らんとする魂を、彼女は無傷に一呑みさせることで現に留まらせた。それによって彼の代わりに罪を償うことができると思じた。姿形が異なれど魂が健在でさえあれば、動物た

ちは生きている。故に氷垣蓮太郎は何もしていない。罪のない動物たちを殺めてなどいない、と。藤枝蘇子にとつて、あの無傷こそが氷垣蓮太郎に対する想いの証だったのだ。だが今宵、君はそれを斬った。そこに生きる動物たちの魂諸共無傷を滅ぼした』

クロさんはそこで語るのを止めた。わかつてる。私の言葉を待っているんだ。

「私……」

声を絞り出す。それだけのことで、胸が苦しい。

「そんなに難しいこと、考えてません……。でも、無傷の中に黒い魂が視えたとき、ああ生きてるなあって思つて、そのときやつと藤枝先輩がどうしてこんなことしなきゃいけなかったのか、わかった気がしました。わかったのは……そのときです。戦つたのは、私とボスとヘビドリと皆のためです……」

『わかつたときに、逃げ出そうとは思わなかったのかね。斬ることを恐れなかったのかね』

無傷の中に生きていた十二の魂ごと。

「逃げようとも思つたし、怖かつたですよ。でも——」

『でも？』

「無傷と動物たち、すごく苦しそうでした」

だから、止めなかった。他に何とかする方法はあつたかもしれないけど。

視界が、端から暗くなつていく。コートをぎゅつと掴んだ。もうダメかも。この声はヘビドリだろうか。やけに低い位置から聞こえるのは、どうしてかな？ まあいいか。元気ならそれでいいや。

そして、私はしがみ付いていた世界から、そつと手を離れた。

『囚われのお姫様』

【大野木 ささめ】

悠朝中と裏山を仕切るフェンス前。

フード被った頭をぽんぽん叩くと、積もってた苔が目の前を落ちていった。ふと、小学生の頃図工で使った色砂を思い出す。そういえば、絵の具にせよ色砂にせよ赤は中々減らない色だった。別に嫌いってワケじゃないんだけど。

手に着いた苔をパーカーの裾で拭い、ケータイを出そうとして――止めた。アイツは一度だって、約束の時間に遅れたことなんてなかった。だったら、時計を眺めてたって無駄にイライラするだけだわ。

フェンスにもたれかかって、ぼんやり空を眺めていると、

『おや、待たせてしまったかな』

文字通りの意味で煙みたくクロは隣に現れた。

「何してたの？」

『定刻通りに来た相手に対する発言とは思えないね』

そう即答され、自分の声が低くなっていたことに気付く。

「別にそういうつもりで言ったんじゃないわ。ただ本当に、私の知らないときアンタが何してるんだろうなってふと思っただけ――」
言いかけて、何か惨めだったから止めた。

「ごめん。何かイライラしてるわ、私」

『そうかい。神経のいらだちにはじゃこを摂るといい。そして責める意図がなかったのはお互い様だ。とはいえ、このまま話を打ち切ったのではまるで私が他人様に口外出来ぬような行いに興じていたのではないか、とあらぬ妄想をされかねないからね。報告しておく』

「そりゃあ……イイことしたわね」

『ああ、実に良いことをした。ちなみに虚言ではないよ。残念ながら舌は無いがね』

相変わらず氣い遣ってボケてんのか、素なのか判断に困る。多分後者だろうけど。いや半々？

フェンスに凭れるのを止め、背中をはたいた。なんとなく控え目な深呼吸をした。

「さて、さっさと行きますか」

『ふむ、私は問題ないとしてささめ君はどうする？ 乗り越えるのかね』

「ううん。さっきそこ壊したからそっから入るわ」

手を拳銃に見たて、壊したフェンス門扉の施錠を指差す。

「こつ、バンツとね」

手首を軽く上に曲げた。まっ、私の使うそれに反動はないんだけど。

『壊したのかね』

「いや、あとで直すわよ？ 流石に」

ヒヒロゴケを使って、ね。

苦笑しながら、フェンス門扉に手をかける。

『そうかい。ところでささめ君』

「何よ？」

『つい先ほど藤枝蘇子の目的は達成不可能となった』

押そうとしていた手が、止まった。

ココが学校を休んだ日、杉林にある分校跡地。

「どうして、私に何も言わなかったのよ？」

私は、クロを問い詰めていた。蘇子が事件に関わってることを、クロはいつから知ってたのか。もし知っていたのなら、どうしてそれを教えてくれなかったのか。あからさまに非難するような声で。

今思えば、クロにはホント悪いことをした。あのときはクロへの不満だけじゃなくて、蘇子の異変に気付けなかった自分の不甲斐なさとか、また義妹を危険な目に遭わせてしまった自分の愚かさとか、ただの八つ当たりでしかないものまで、一緒くたにしてぶつけてい

ただろうから。

結論から言うと、クロは私が依頼する前からそれを知っていた。なのに、何も教えてくれなかった。

「何よそれ。私のこと相棒だパートナーって言っというて、結局私の力なんて信用できないっていうの？ だから、自分だけで あいつら を倒して、それでこっさり終わりにしようなんて考えてたの？」

それは、願望だったんだと思う。これなら、この現実であつてくれれば、まだ私は受け入れられるっていう甘い幻想。でも、教えられた現実はそのまんじゃなかった。

『此度の件、仮にささめ君から調査依頼がなかったとしよう。それならば、私はどうしたと思う？ ささめ君に見つかからない内に、藤枝蘇子と共にいる妖怪を始末する？ そして、人知れず事件を解決する？ 残念ながら不正解だよ。私はきつと——何もしなかった』

何もしなかった？ 予想と違ったクロの台詞は、いつも以上に遠回しで、意味深で。それでも、私の幻想にヒビを入れるくらいには、充分だった。

『まず、異界の事件に興味がなかったというのが理由の一つ。二つ目、藤枝蘇子の目的は珠置山という狭い世界だけで事足りるものだった。彼女はあの山が強大な魔窟であり続けさえすればそれで満足だった。そして三つ目、私は四件目直後の藤枝蘇子の様子から、彼女がこれ以上能力を行使することはないだろうと推測した。もっとも、此度はその甘い見解がささめ君の義妹君に怪我を負わせるという事態を招いてしまったわけだがね。その点については深く反省している』

クロはシルクハットを脱ぐと、立ち昇る煙でできた頭を下げた。ヒビが入ってはいけないものに、どんどんヒビの広がる音が聞こえる。

「何でよ……。どうして、蘇子がもう何にもしないって思ったのよ……」

そして、頭を上げたクロが口にした言葉に、

『彼女の身体がその時点で既に限界を迎えていたからだよ』

幻想が、砕け散る音を聞いた。

粉々に、バラバラに、砂糖菓子みたいに呆気なく。

「限界って——」

『そう遠くない内に消滅するということだよ』

ようやく絞り出した声は、容赦ない言葉に撃ち落とされる。

『狭き世界にて自己完結する野望。もはや風前の灯であるにも関わらず、身を隠す筈だけはやたらと強固。そんな相手をわざわざ打倒しようとする変わり者、そうはいないよ』

クロはシルクハットを被ると、くるりと背を向けた。振り返って私を見た。

『ささめ君。君が如何なる行動をとるにせよとらぬにせよ、これだけは胸に留めておきたまえ。この物語の結末は変わらない。藤枝蘇子がこの世から消えるという幕引きは、絶対に避けられない。それを理解した上でなお君にやりたいことがあるのであれば、その行いに私の力が必要不可欠だというのであれば、そのとき私は喜んで君に力を貸そう』

そう言い残すと、クロはいつも通り宙に漂うように消えた。

そのあと、どういう道順で家に帰ったのかは憶えていない。ただ、意味もなく暗くなるまで、そこにぼーっと突っ立っていたことだけは憶えている。

翌日の放課後、私は蘇子と話をした。

そこで、初めてあの娘のあんな顔を見て、あんな声を聞いて、あんな想いを知って。

スカートの中から零れ落ちる苔に、クロの言っていた消滅の兆しを見て。

そして、初めて「ささめちゃん」って呼ばれた。

そう——初めてだったんだ。

『もつともあの目的に「達成」などはなかっただろうが。説明は必要かね?』

黙ってじつとしてれば、そう訊かれもするだろう。かぶりを振った。

私は、蘇子の目的を知らない。あの日、蘇子が言った隠蔽工作と贖罪の意味もわかっていない。クロに訊けば、きっと大体のことは教えてくれると思う。でも、そうしようとは思わない。それは、どうしても蘇子の口から真実を聴きたいと思ってるからじゃなくて――。

「ぶつちやけさ、知らなくていいんじゃないとか思ってるわけよ」

『何の話かね?』

「蘇子の目的とか、そーゆーの。もちろん知りたくないってわけじゃないけど、あの娘が話したからないもの無理矢理訊き出して、これが蘇子との友情がまだ続いている証なんだって、私だけほっとすんのは、なーんか違うと思うのよ」

息を吐いた。ちよつとだけ肩が軽くなった。

「蘇子ね、『来ないで』って言ったの。でも、私には『来てほしい』としか聞こえなかった。でもさ、あの娘が何であんな言い方したのかなーって考えると思考がストップしちゃって。蘇子の想いを知るためには、やっぱりその目的ってのを知つといた方がいいのかなーなんて迷ったりもしたんだけど、ふと、つくしがいなくなつて引きこもつてた頃を思い出したとき、なんとなくわかった。あの頃の私が欲しかったのは、理解じゃなかったもん」

クロを見上げる。今の私はいつもより優しい顔をしてる気がする。

「あるとき私、『助けて』って言ってたんだわ」

まさかこんなにも早く、あるときとは逆の立場が回って来るなんてね……。

ただ違つのは、蘇子がどう足掻いたって助からないという事実だけ。

「あ……」

思わず、声が漏れた。フェンスを開けようとしていた私の手に、クロの手が重ねられていた。そこで、やっと自分の手が震えてるつてことに気付いた。手袋の中身は真つ黒な煙だけ。それなのに、確かに触れられているという実感があつて。生きてるんだなつていうあつたかさがあつて。

『ささめ君』

うん、と私は心の中で頷く。

『共に行こう。藤枝蘇子が君を待っている』

うんつ、と頷く。今度は心の中じゃなくて、クロに見える形で、はつきりと。

「クロ、今の内に謝つとくわ。私ね、蘇子のところに行つて何しよとか、実は全然考えてない」

『だと思つたよ。全くそんな不明瞭な目的で共に命を懸けると言うのだから、毎度それについて行く私の身にもなってもらいたい』

「いや、いっつも喜んでついていくつて言つてんのは、アンタでしょーが」

『対外的要素を取り入れた上での発言だよ。だがね、ささめ君。そのことで君に伝えておかなければ——否、伝えておきたいことがある』

「何よ？」

『私がささめ君と共に行く理由は、これから君が親友のもとへ行く理由と酷似しているのだと思う』

その先にどんな結末が待っているようと、じつとしていることだけはできないから。

クロがシルクハットのつばを下げる。それはコイツなりの照れ隠しだったのか、それとも気を遣つて、ちょっとだけ赤くなつてるっぽい私の顔を見ないようにしてくれたのか、まあ、よくわからない

けど。

私とクロは、フェンス門扉を力強く押した。

私が先に押したかもしれないし、クロが先だったかもしれない。でも、気持ちとしては二人一緒に。境界を越えた。

終わりました。全て終わってしまいました。

その場に、ぺたんとへたり込みました。

死体を隠せば罪になる、けれど魂という全く異なる形で生かし続ければ、それは罪にならない。そう信じて、何よりその行いが氷垣君のためになると信じて、今日まで無傷という魂の揺り籠を維持してきました。

しかし、氷垣君がささめちゃんに秘密を打ち明けた今。ココさんが無傷を倒した今。私と元の世界を繋ぐものは、全て断たれてしまいました。

さっきまでここにいたあの娘の言う通り、好都合と言えば好都合なのでしょう。どのみちささめちゃんたちと過ごしたあの日々に戻れはしないのですから。この身体はここで朽ち果て、私はこの世の土ではなく、異界の苔に還るのですから。

いいえ、たとえこの身が消えゆく運命になかったとしても、もうあの日常に私の居場所はないのです。何せ私は二人の女の子を手にかけてようとしたのですから。その事実を知る者たちは、決して私の非人道的な行いを許すことはないでしょうし、決して許してもいけないのです。藤枝蘇子という文字通りの人でなしを受け入れてはならないのです。

それなのに――

「どうして――あんな言い方をしてしまったのかしら」

友だちだから来ないでね――なんて、ずるい言い方だわ。

落とすように、自嘲します。その答えがわかっている分、余計に力なく。

『蘇子』

歩み寄って来た地宰の頭を撫でます。地宰はそうしてもらいたくて近付いたわけではなかったようですが、私の手を嫌がったりはしません。優しい子で、サイケデリックな体色の羊さんです。この子は、あの娘から選択肢を用意されたとき、何故か私と最期を共にすることを選びました。青い首輪——付けている限りは飼い主と一心同体にあるコントラクトリング。彼はそれを外すことを拒んだのです。だから、優しい子ですけど、優し過ぎて、ちょっぴりお馬鹿さんなのかもしれません。

「どうしたの地宰」

『蘇子。あれを見よ』

地宰が顎で指す先には、銅鏡に酷似したモニタの群れが浮かんでいます。フラフラッほどの大きさをしたそれらは、九面ともあの娘が用意してくれたもので、戦場と化した珠置山の光景を今なお映し続けています。その一つ、中央のモニタに——

「え？」

映っているはずのないものが、映っていました。

地宰が気を遣ってくれたのでしょうか。そのモニタだけがズームされます。

『まるで夢語の王子じゃの』

嘲るようでも呆れたようでもなく、むしろ感心すら込められているような地宰の声。

「どうして——」

口を両手で覆います。もはや視界は明瞭ではありません。

酷いことをしたじゃない。来ないでって突き離れたじゃない！

「ささめちゃん……っ！」

言葉を失う——とは、きつとこういうことを言うのでしょうか。

景色が目まぐるしく流れている。それでも、苔が顔に張り付いたりせず、枝葉を揺らす音が遠いのは、私とク口に乗せたこのペルシャ絨毯が、風のバリアみたいなので覆われているからだ。

空飛ぶ絨毯——クロがどこぞの露店で、破格の値段で買ったという飛行アイテム。普段は、ほぼ四次元ポケットと化しているクロのコートの中にあつて、常時張っているバリアは仕様、でもってその最高速度は特撮ヒーローのバイクかよつてツツコミたくなるくらい速い。で、何で私たちが上空からではなく、山道から頂上を目指してるのかというと、絨毯が高所恐怖症だかららしい。……安値には必ず理由があるっていうけど、まあそういうことね。

「ねえ、クロ」

『何かね、ささめ君』

クロが振り向いた。バリアのおかげで声を張り上げる必要がないってのは助かる。

「さっきから気になってたんだけど、アレ何？」

クロの腰——っぱい部位に両腕を回したまま、そっちを顎で指す。平たく言つと、蛙と豚が喧嘩してた。いや、喧嘩つて表現はちょっとヌル過ぎるかも。蛙は蛙で明らかにやるための得物振り回してるし、豚は豚であの数で押し掛かるのはマジで殺す気満々だし。とにかく双方加減がなさ過ぎる。

「あの蛙、稲荷神社によくタム口つてるわよね」

『ああ、この辺りは元々彼らの縄張りだったからね。きつと縄張り争いだらう。彼らの珠置山攻略と私たちのそれが重なるとはいやはや何たる偶然』

クロがふい、と前を向いた。

……ホント、マジで隠したいのか、何か勘付いてほしいのか、よくわかんない。

回している腕に力を込めた。クロの背中に頬を押し付け、聞こえるはずもない鼓動に耳を澄ます。

きつとクロとあの蛙たちには、私の知らない繋がりがあるんだろう。それについてとやかく言つつもりはないし、言える道理もないと思う。

なのに——なのに何で、今私はコイツに無言のままひつついてる

んだろ？

これじゃあまるで、嘔吐かないでって抗議してるみたいじゃない……。

「クロ」

反応はない。もう一度声をかけようかどうか迷ったところで——クロが身を固くするのがわかった。緊張が伝わる。勘が良いねと背中が言った。まあ、それなりにねと苦笑いを返す。

『絨毯にしっかりと掴まっていたまえ』

言うが早いか、クロが腕の中から消えた。いや、こんなペラペラどこ掴めっていうのよ！ とりあえずクロのマネをして、絨毯の前の反り返ったとこにしがみつく。

淡い緑色に光る何かが、木々の間を縫いながら迫って来ていた。距離が狭まっていくにつれ、それが蛇に似た あいつらの類なんだとわかる。くそつ、輪郭ぼやけてて数把握できない。全身を覆う緑色の正体はやらぬめり気のある炎。ケータイには手を伸ばさない。あと僅か数メートル。口が裂けるように開いて、涎みたいな炎が溢れて、思わず手に力が入って——。

蛇たちの頭上から、クロが降って来たこと。

鯉口を切る音が聞こえたことに、ニヤリとする。

途端、絨毯がカーブした。クロを避けたと思ったところで急ブレーキ、身体が宙に浮いた。落ちる——そう思ったのに、クツシヨンに飛び込んだような感触があって、押し戻された。ああ……：そういうええバリアがあつたのよね。ちょっとくらくらする頭を抑えながら起き上がった。

クロの周りを緑色の火の粉が漂っていた。色からしてさっきの蛇たちの末路ってとこだろ。こっちの意図を察したのか、絨毯がクロへ近付いていく。

『病龍の具現か……』

クロが、刀を鞘に収めた。

「びょうりゆう？」

『ささめ君。この山の頂には荒廃した祠堂があるのだったね』

「荒廃した祠堂って——珠置神社のこと？」

『ああ道理で。まったく理に適った龍を見付けてくれたものだ』

顎を撫でるクロに眉を顰める。

「そうやって独りで納得すんの止めてくれない？」

『ふむ、すまない、説明が必要だったね。風水において山は龍と呼ばれていてね。「山が清楚だと優秀な人材を輩出し、山が汚濁していると愚昧な人間が出る」と言われるほど絶対的な条件とされている。そして龍の姿形からその中に潜んでいる精気——龍脈の良否を判断する方法を看龍法といって、それによると龍は十二種類に分類される。五格の吉と七格の凶。先ほど私が言った病龍とはその内の一つでね。「病」という字面からわかる通り凶格に当る。今回のように山頂に祠堂を建てられたことで頭を損傷した龍や、洞窟や井戸を掘られたことで本身を傷付けられた龍などがその例だよ』

「あー、それってつまりこの山には悪い気が流れてるってことよね？」

『その通り。まさに欠陥が生じた龍、悪疾敗亡の凶格だよ。だからこそ、この山の淀んだ地気は奴が操るに適している。なあ地宰』

——地宰？

クロの視線の先を見る。

ピンク色の綿菓子みたいな羊がいた。神経質そうに細められた眼はまるで透明感のない黄水晶^{シトルン}。濃い紫色をした角はくるくると渦を巻いている。何つーか、アメリカ人の子どもが喜んで食べるケーキみたいな色してるわね。そして、地宰と呼ばれたそいつの首辺りを見て——目を疑った。

どこか東洋っぽい二オイを漂わせている謎の文字。

その羅列で構成された首輪が、ぼんやりとした青い光を放って、そこにあつた。

「何で――」

アンタが。その一言が続かない。無理矢理声にしようすると気持ち悪くなる。

何で。どうして。アレは一体何なのよ。どうしてアイツがアレを着けてんのよ。私からつくしを奪っていったアイツと。ロクに攻撃できない私をつくしの姿で嘲笑ったアイツと。私が自ら壁を作って閉じこもるきつかけになったアイツと。私の知らないところで死んでしまったはずのアイツと。同じモノを。同じ首輪を。

『大野木ささめか』

聞き慣れないしわがれ声が、頭の中に降って湧いた。

今のつて……地宰の？

『通れ』

「は……？」

『大野木ささめは通せ。しかしその連れは通すな。それが我が主からの達しじゃ』

「我が主つて――それつて蘇子のことを言ってるの？」

返事はない。クロが一步前へ出た。

『そのわりにはえらく手荒な出迎え方をしてくれたね』

『なあに、お主がおるのはわかっておったからのう』

『過分な評価誠に恐悦』

『心にもない言葉を並べて世を渡っておるところは変わらん』

地宰がふんつと鼻を鳴らした。

「知り合いなの？」

『同じ根源より生まれたのだ。知り合っていない方がおかしい』

もっともできることなら忘れたい部類に入る顔だと付け足して、地宰を睨み付けるクロ。

同じ根源？ 出身地の言い換えにしては変……よね。

『まあ良いわ。それでどうする。通るのか通らぬのか』

地宰はこつちに顔を向けたまま、横ざまにゆったりと歩く。

「もし、私とクロでアンタを倒してから先に行くと云ったなら……？」

言いながら、ポケットの上からケータイに触る。

地宰が歩くのを止めた。ただでさえ寄り気味な額に、さらなるシワが刻まれる。

『それを腕に宿しておきながら、この首輪の機能を解しておらぬか。良いか、この首輪がある今、儂が過度に力を消費することは我が主の導力——メテイション儂らギノーを媒介者とし、彼岸の智慧より、実効性のある魔術、呪術、妖術等を受信する 人工回線——の酷使に直結する。その果てに待つは我が主の脳髓の死じゃ。お主らが共に儂を打倒するのであれば、必然儂は自身の許容範囲を凌駕する力を消費せざるを得なくなるじやろう。大野木ささめが指示に従わぬ場合は、我が主の脳を厭うことなく全力を以てその連れ諸共足止めせよ、というのが儂に下された命めいじゃからの』

え、ええつと……。

「と、とにかく?」

『ここで私たちが共に彼と切り結んでしまつては本末転倒ということだね』

「……そういうことみたいね」

どうする? クロをここに置いていくの? クロだけにアイツを押し付けていいの?

ふと、呆れたような溜息が聞こえた。

『やれやれ何を躊躇うことがあるのか。地宰がここにいる時点でもう答えは出ているだろう。ささめ君が先へ進み、私はここに残ればいい』

「で、でも……っ」

『いいかいささめ君。考えてもみたまえ。地宰がここにいる今、藤枝蘇子は独りなのだ。そこへ君が私のような妖を連れて行けば彼女はと思う? 彼女の目に私の姿はどう映ると思う?』

諭すような声。蘇子の目にクロがどう映るか……?

『この山に立ち入ってからここへ辿り着くまでの間、一度も あれ

を撃たなかった君なら、もうわかっているはずだよ」

はっとした。ケータイをぎゅうと握り締めた。

私がここに来るまで、ケータイを武器に変えなかった理由。

クロには言ってた。力を温存しておきたいって。でもホントは違った。見抜かれてた。

それは、変えたらダメだって思ったから。私なりの決意だったから。私はここに戦いに来たんじゃないって。アンタともう一度話したい、ただ会いたいからやって来たんだって。

でも、私が戦わないってことは……。

——そのことで君に伝えておきたいことがある。

手の甲に触れる。そこにはまだ、あときの熱が残ってる。

ああ、そうね。こうなるってわかってたから、こういう気持ちで私が足を止めるかもしれないってわかってたから、アンタはあんなこと言ったのね。

自分がじつとしていられないだけ。この行動は誰かにやらされているものじゃない。

アンタはホントに、ホントに……ああチクショー。

緩みそうになる頬を左右から二回叩いた。よっし気合注入。絨毯を、しっかりと掴む。

「クロ！」

行く先をまつすぐ見据えたまま、名前を呼ぶ。

「私はアンタのこと、相棒だって思ってる」

『知ってるよ。そして私もまた君のことをそう思ってた止まない』

「知ってる。でも、今回はアンタに汚れ役を全部任せる。だからゴメン」

『ああ、酷い話だ』

「クロ」

ぎゅっと眼を瞑って、開いた。ほんの少し視界がクリアになった。

「もしダメそうになったら呼ぶのよ」

『承知。もしそうなったとしたら、君がすぐさま駆け付けざるを得なくなるような、それはそれは情けない悲鳴を上げよう』

行つてと絨毯に言い放つ。見えないバリアが展開される気配がして、絨毯が飛び出した。上昇は抜きでいきなりの飛翔。両サイドで苔が舞い上がる。地宰の横を通り過ぎた。あつという間だった。振り向かない。だって、この場はアイツに任せたんだから。

——蘇子！

ややあつて頭の隅に届いたのは、心底不機嫌そうに鼻を鳴らす音だった。

暗い水底のあぶくのように、浮かんでは消え、浮かんでは消え。伝えなければならぬ言葉は、いつまで経っても形になりません。それはきつとあの娘に嫌われることを恐れているから。

「虫のいい話だわ」

この期に及んで、まだあの娘の心が自分から離れていないと信じているんだなんて。目が合えば、あのどこか大人びた優しい笑顔をを見せてくれる。「蘇子」と下の名前で呼んでくれる。そんなあの娘は、もう思い出の中にしかいてはいけないのに。

「ささめちゃん」

——まだ、そう呼んでも構わないのかしら。

あの娘が私のことを「蘇子」と呼ぶようになったのは、いつからでしょう。こめかみに触れ、目を瞑れど、暗闇のキャンバスを記憶の画筆が彩ってくれることはありません。ただ、金属を擦り合わせるような音が痛みを伴って頭の中に反響するばかりです。あの娘と出会ったのは中学一年生のときで、その頃から一番の友だちだったはずなのに。そんなにも最近のことを、大切なことを、どうして思い出せないのかしら。内腿に苔が深く根を張っているように、いつの間にか脳までもあれに侵されてしまったのかしら。

「もし、そうなら……」

少しは楽かもしれません。

このままいけば、きつと死ぬまでには、おこがましくも未だ戻りたいと願うあの日常さえも——

背後で、さくりと霜柱を踏み潰したような音がしました。身を固くします。

振り向かなければ、声にしなければ、形にしなければ。

息が——震える。

絨毯から跳び下りて歩き出す。ふわふわとついて来るそいつを手で制した。ありがとうとだけ言って、振り向きはしない。ちよつとでも目を離したら、あの小さな背中が消えてしまいそうだったから皮つきの丸木を組んだだけの粗末な鳥居の向こう。社と思しき掘っ建て小屋の前で――

スタンダードな三つ編み。見慣れたセーラー服。薄ら苔の積もった華奢な肩。

蘇子は、まるで彫像みたいにぴくりとも動かず、立ち尽くしていた。

「蘇子」

呼んだつもりだった。でも実際は唇が思っていた通りの形に動いただけだった。ほつとしている自分にムカムカする。振り向いてくれたところで、どんな言葉を続ければいいのかわからなかったから鳥居を潜る。出迎えてくれる狐はいない。狛犬がいたような形跡もない。稲荷神社とそう変わらない広さの境内には、社務所や手水舎らしき建物も見当たらなかった。これじゃ神社っていうより寺みたい。いや、寺と神社の正確な違いなんて知らないんだけど。ただ寺の方が鳥居や鈴がない分、地味っていうか、見映えしないっていうか……。

――寂しい。

根を張るように足が止まる。あともう五歩も進めば手が届く。

ここには何も無い。塗り絵みたいな空と苔の重みで今にも潰れそうな社しかない。こんなにも寂しい場所に、アンタは――

「いつから……いたの」

たった独り、氷垣のことを想って。

「何をしに来たの？」

蘇子の声は冷やかだった。こっちを見てはくれない。

「私を止めに来たの？」

馬鹿みたいと蘇子は吐き捨てるように言った。

「止めて、連れ戻して、それでどうするの？ 兎を殺しただけじゃ

ない。ココさんを、笹ヶ瀬さんを殺そうとした私を貴女は……ささめちゃんは赦せるの？ またいつかあの二人に……ささめちゃんにだって手を出すかもしれないのよ？ こんな私があの日毎日に帰っていいと、これからもささめちゃんたちと何食わぬ顔をして同じ時間を過ごしていると、本気でそう思ってるの？」

胸の前で組まれているだろう両手は私からは見えない。でも、きつく握り締められたそれが震えているんだってことは何となくわかる。

「そんなわけないわ。そんなわけない。きっと氷垣君だって……赦してくれない」

氷垣君。氷垣蓮太郎。

好きだから。言葉にすればたったそれだけの理由で、蘇子にここまでさせたアイツに腹が立つ。元はと言えば全部アイツが悪い、とまでは言わない。氷垣が事件の犯人だってことは事実で、蘇子がそれに加担したのも事実。でも、蘇子が私と同じ 眼 を手に入れたこととアイツは無関係だろうから。けど、やっぱり一発くらいぶん殴っとけばよかったかも。今の蘇子を見てたら尚更思う。

——好きだから、か。

「蘇子。私、アンタに訊かなかったよね。アンタがどうやって私と同じ 眼 を手に入れたのかって」

振り向きそうな気配がした。脈絡ない話題を振られて戸惑ってるのかも。

「確かにあれは優先して訊くことじゃなかった。でも、本音を言う……怖かったの。私の 眼 は小四の頃からある日突然見え出して、いきなりだったからこそ、こうなっちゃったワケを詳しく知りたいって思う一方で目を背けてた。もしアンタの経緯が私のと違ったら？ しかもとんでもなくおぞましいものだったら？ もう……戻れなくなるって。結局、私は自分のホントの姿を知るのにビビって、蘇子の傍を離れたのよ」

だからあのとき手を離してしまった。スカートの中から零れ落ち

る苔にアンタの死だけじゃなく自分の未来さえ見たような気になって、怖くなった。

でも。

「もう怖くないとまでは言えない。けど、逃げたくはないの。だから、正直に言うわ。私、アンタのことを赦せる自信がない。アンタを連れ戻せたところで、これまで通りの大野木ささめとして一緒にいられるかっていうとその自信もない」

蘇子が、肩を強張らせるのがわかった。

「でもね……嫌いにはなれないの。アンタは酷いことをしたけど、それでこれまでアンタといた時間を全部帳消しにできるかっていうとそうもいかない。私の思い出の中の蘇子はどのシーンを思い出しでもいいヤツで……だから、そう簡単には割り切れないの」

ささやかなあの娘の嗚咽が、胸に沁み込んでく。

「私はまだ蘇子のやったことを赦せない。でも、これだけは確かに言えるの」

アンタが何をして、何を言っても、何処へ行ってしまうても、たったひとつだけ、これだけはって誇れるもの。

「今でも変わらず、私は蘇子のことが好き」

三つ編みがふわりと踊った。信じられないものを目にしたような顔だった。何かを伝えようと口を動かして、言葉にならない声を漏らして。出そうとしていた想いを全部呑み込むように歯を食いしばって、俯いて――

「私……もう助からないのよ？」

胸を、撫でるように抉られた。

「ささめちゃんがどんなに優しくしてくれたって、好きって言うてくれたって」

――藤枝蘇子がこの世から消えるという幕引きは、絶対に避けられない。

「私は……消えてしまう」

前髪に隠れた瞳から、真珠色の滴がポロポロと落ちる。

知ってたんだ、そこまで。自分がもう長くないってことまで。

死ぬって、消えるって、わかってて——なのに、ひとりぼっちで、ここにいる。

ひとりぼっちで。

足が独りでに一步、前へ進んだ。当たり前だけど足の裏に根なんて張っちゃいなかった。触れたい。手を伸ばすと、視界の端から木漏れ日色が覗いた。どっかで見た光だと思って、慌てて後ろへ跳ぶ。着地と同時に滑走、苔を利用してさらに離れる。

「蘇……子……？」

私と蘇子の間に土木機械で抉ったような溝ができていた。あちこちに緑の炎がこびり付いていた。

スカートの端を握り締めたまま頂垂れる蘇子。その周りで、蘇子の背丈を遥かに越す火柱がうねっていた。その数は十本の指じゃ足りない。まるで蘇子を捉えている檻みたいに見える。地中から生えているそいつらには、眼と鼻がなかった。病龍。欠陥が生じた龍の具現。

「最初はね……」

蘇子は自嘲気味に微笑むと、語り始めた。

これを口にしたら、地宰に頼みさめちゃんをここに通してもらったことを無意味にしてしまう。そんなこと痛いくらいわかっていきます。それでも尚この気持ちを表に出そうとしている私の何と我儘なことでしょう。結局、あの娘の言う通りだったではありませんか。氷垣君を好きだと言っておきながら、ココさんに嫉妬しておきながら、ささめちゃんに好きだと言わせておきながら、本当に好きだったのは……。

——ああ、今日も私の一途な想いは変わっていないって。どこまで……最低なのでしょう。

「最初はね……突き離すつもりでいたの、ささめちゃんのこと」

絶対来るなって言ったのに何をしに来たの？ 連れ戻すって一体どこに連れ戻す気なの？ 今更私が戻っていい場所なんてあるの？ 教えてあげるわ。私もう死んじゃうのよ、手遅れなの、そういう運命なのよ。貴女私を助ける方法知ってるの？ 今にも崩れてしまいうそのなこの身体を元に戻す術を知ってるの？ 知らないなら最初から来ないで。何も出来ないくせに期待させないで——って。

「そうすれば嫌ってもらえる。あんな奴いなくなって清々した。死んで良かったと思ってもらえる。そうすればささめちゃんを苦しめずに済む。身近な人を喪う哀しみを味合わせないで済む」

——大野木さんにこれ以上義妹さんを失う哀しみは味合わせたくなかったから……。

そう言ったのは、いつだったかしら。頭が痛い。

「でも、いざ顔をあわせれば口から出るのは貴女の情を誘うような言葉ばかり。本当に狡い。でも、そんな卑怯な私のことを貴女は好きだと言ってくれた。助からないと聞いて尚距離を縮めようとしてくれた。そして——」

一拍間を置きました。言葉が即座に続かなかったのです。

「貴女はこんな私のために涙まで流してくれている」

ささめちゃんの眼に溜まっていた涙が、頬を筋になって流れ出しました。一瞬目を丸くしたのは、泣いているという自覚がなかったのかもしれない。ささめちゃんはそれを拭いもせず、火のように熱く潤んだ瞳で私をじっと見ています。頬が綻んでしまいました。

「そんなにも、私のことを大切に想ってくれてありがとう。貴女の清らかな心の一部に私なんかを友だちとして置いてくれてありがとう。そして、そのスペースには私より遥かに相応しい人がいたはずなのに、私なんかを置かせてしまっでごめんなさい」

一匹の病龍に指示を出します。左腕を差し出すように横へと伸ば

しました。

道連れにしてごめんなさい地宰。ありがとう。

「私もささめちゃんのが好きよ。本当に大好き。でもだからこそ、貴女が私の最期を看取るようなことはあつてはならないの。だつて——」

それは——

「私なんかには、勿体なさ過ぎるもの」

左腕を引つ張られるような勢いに、転んでしまいます。真横を病龍の吐いたエメラルドグリーンの火球がすり抜けていったのです。見ると、左の二の腕から先がありません。痛みどころか血の一滴さえありません。代わりに断面から光り流れるのは焰色の苔。人でないことの証。私にはお似合いの末路です。

蘇子——と呼ぶ声が掻き消されます。ささめちゃんの進行を病龍が妨げたのでしょうか。そう、これでいいのです。ささめちゃんは片膝をついていました。目線が高いのは、私の後ろに並ぶ病龍の群れを睨んでいるからでしょう。

目が、合ってしまいました。

「蘇子！」

力強い声に応えなければなりません。

さよなら、と言葉にすればたった四文字。

諦めさせなければ、何より諦めなければ。他ならぬ私自身が。

「ささめちゃん！」

私よりずっと素敵な友だち、貴女ならきつと見付けられるわ。

「
」

——今、私は何と言ったの？

蘇子を囲う病龍を睨む。殺意めいたものはあまり感じない。目的はあくまで進行の妨害ってところか。視線を下げると、倒れている蘇

子と目が合った。左腕がない。どうしようもないくらい胸がざわつく。

「蘇子！」

言わなくちゃ。アンタは大きな勘違いをしてるって。アンタは自分には友だちに看取られる資格がないって思ってる。だから私を遠ざけようとしてる。でも、そうじゃないの。本当に私のこと好きって思っんならやっていいのはそれじゃない。私はそれをつくしから教わってるのよ。

「ささめちゃん！」

助けられない命とわかってても傍にいたい。

これは単なるエゴかもしれない、でも、それでも――

たすけて。

声としてはほとんど聞こえなかった。けど、口は確かにそう動いて見えた。

蘇子が口を手で覆った。首をぶんぶん横に振った。もう充分だった。

――私はここに戦いに来たんじゃないって。

ただ近付くために、そこでアンタと話をするために。

私は、ケータイを手に取った。

ヒンジのボタンを押しケータイを開けると、ボタンの隙間からプツプツ血の玉が浮かんだ。それは、斑点模様のないテントウムシ。ごぼつと一気に溢れた。ケータイが血の塊を吐いたみたいだった。待ち受けのネココボシスターズ——音ゲーのマスコキャラで「コボシ」は「オキアガリコボシ」が元みたいだけど、キャラデザにそれっぽい所は見当たない——が、足からじわじわ蝕まれていく。尻ポケットに入れてたナイフを抜いた。畳んでた刃を起こし、腕にそつと当てる。切るのはどーせ皮膚一枚、だからビビんな躊躇うな。痛みが跳ねた。傷口を舐めると、舌に目当ての感触。噛んで、引っこ抜いた。

「え……」

蘇子の声。身を起こし、眼を丸くしている。
そりゃそうよね。

今私が啜えてんのは一本の釘で、しかもそれは私の傷口から出てきたんだから。

ナイフでつけた傷はもうない。綺麗さっぱり治ってる。

群がるテントウムシの中から、色の悪い舌が飛び出す。そいつ目掛け、釘をぶつと飛ばすと、一瞬で絡め取り、引っ込んでった。

グリップは——すでにできあがってる。

標的は、蘇子の後ろ。あの娘の腕を奪ったアイツ。

右手で構え、トリガーを引いた。耳をつんざく銃声。けど、姿勢^{スタ}安定装置のおかげで反動はナシ。手首辺りまで覆ってたテントウムシがお弾きみたく散らばって——狙ってた病龍の全長は、半分になった。

肉体的なものから精神的なものまで、ありとあらゆる痛みを釘にして引っこ抜ける。

その力をどうやって攻撃に転じるのか——考えて、辿り着いた結

果がコレだった。

『まさか痛みの釘をネイルガンの弾として再利用するとはね』

ソイツを品定めするクロの姿は、白手袋してるのもあって余計それっぽい。

今クロが持つてるのは、ガラクタを寄せ集めて作ったような拳銃で、これでも元駄菓子屋の水鉄砲——困るのは携帯してるのバレたとき説明にテンパること。コレみたいに「銃」をイメージしやすく、さらに携帯していて不自然じゃないモノがあればいいんだけど——。ぱつと見レトロな玩具——と思えなくもないけど、バレルに巻かれた朱色のボロ布と、そこに墨で描かれた多分釘抜きと釘なんだろう怪しげな模様、何よりフツーならリアサイトのある辺りにぱっくり開いた 供給口 が、コイツはただの拳銃じゃないってことを教えてくれる。

「けど、釘をそのまんま撃つてたんじゃこつちが持たないわ」

『一本につき一発では撃つ度自傷行為に走らなければならぬからね。もっとも負傷する——釘を抜く対象は必ずしもささめ君でなければ、というわけではないが』

「そりゃそうだけど……」

何が言いたいの？

『事実を述べたまでだよ。君が望むならこの身を 弾薬貯蔵庫 として捧げることも吝か^{やぶや}でなし、という意図から言っただけではない』

クロは、まだ銃を見てる。

そして今、私はクロを睨んでる。そのことにコイツは多分気付いてるはずだ。

こういうジョークは返しに困る。だから——

「弾薬貯蔵庫っていうより工具箱ね。釘だけに」

誤魔化す。テキトーに。

「それに、放つとけば釘って 鮮度 落ちるから作り置きもできないし」

『装填された分は、一度水鉄砲（元）に戻せばリセットされる』

「そ、だから——」

『釘を分解し、より強力な複数の銃弾へと再構成する鍊成炉を内蔵した』

ちよつと考えて、頷く。レンセイ口つてのが未だによくわかんないけど。

『そして、この鍊金術と呼ぶに相応しい精製過程が、結果として弾の威力向上に繋がっている』

「……そうなの？」

知らなかった。傷の深さ関係ナシに強力な弾を複数同時精製できる——そんな私の願いから出来たのがレンセイ口であつて、そういう効果を発揮するスジの通った仕組みなんて、そもそもないと思つてたから。

『仮定の話をしようか。もし今ささめ君が、霊界の精霊によつて解体された拳句、腸、はらわた眼玉、骨、血液を取り出され、新しいモノに入れ替えられていると最中だとしたらどうだろう？ シャーマンの卵イニシエーションが成巫儀礼を経て覚醒する際に見る死と再生の幻視ヴィジョンのように』

「そりや……痛いでしょ」

『そうだね。解体と再構築の過程にささめ君が痛みを覚えるように、釘もまたそれに痛みを覚える。そして、ダメージの具現である釘にとって痛みと餌はイコールだ。釘が本来持ち得る苦痛の質はこの銃によつて数倍以上高められる』

数倍以上、ねえ。

「つまり、その気になれば掠り傷で象が仕留められるかもつてこと？」

クロが、当然とばかりに肩を竦めた。

『ささやかな痛みは細胞の一つひとつが脚を生やして駆けずり回らんばかりの激痛へ、しばし安静にしていれば快方に向かう病み患いは万人が死に至る大病へ、一睡すれば薄れてしまうような苛立ちは親類縁者を総じて眼前で辱められた拳句その命を奪われたかの如き

憎悪へ——ダメージを釘として可視し、捉えられるささめ君ならばどれも決して不可能な所業ではない』

何か……チョー怖いこと口走ってるわね、コイツ。

ちなみに身体の傷からはあっても、心の傷から釘を抜いたことはこれまで一度もない。これから先もきつとしない。

『その気になれば逆剥けで雄鶏が仕留められる』

「……何で雄鶏？」

『ささめ君こそ象に何か恨みが？』

「ないわよ。ただ……象の方が強そうでしょ」

この手の例えじゃ、鶏より向いてるわ。絶対。

『強いと判ったらそれだけで引き金を絞るのかい。蛮族か君は』

「じゃあ、アンタは鶏にどんな恨みが？」

『そんなものはないさ』

何せ私の座右の銘は寛仁大度だからねとクロは言ったあと、

『強いて言うなら鱗の青味泥色が癪に障るかな』

銃の先でシルクハットのツバを押し上げながらばそつと付け足した。

鶏で、青味泥みたいな色の鱗……。

「ソレ……どこの世界の夜店で売ってんの？」

『兆が一誤ってコルク銃で撃ち落してしまったとしても私なら突き返すね』

トリガーガードに指をかけてくるつと回転、グリップを差し出すクロ。随分な嫌われ様ね青味泥の雄鶏。同情するわ。別に会ったことないし、射的で当たっても要らないってあたり同感だけど。それを受け取るうとしたところで、

『率直な感想がひとつ』

手を止めた。目線を上げ、眼のない顔と見つめ合う。

『釘抜き能力が持つ特質と君のあり方はよく似ていると思う』
つい眉間にシワが寄った。

「どういう……意味？」

『君ほどこの能力を行使するに相応しい者もそういないだろうという意味さ』

——何もその傷口を凝視し続けることはあるまいに。

傷から目を背けないことこそ克服だと信じ、ホントはもういっぱいいっぱいこのクセにそれを見つめ続ける私と、眼に見えない傷にまでわざわざカタチを与えるこの力。

言えてる。確かにこの力は、私にお似合いだ。

銃口を、下げた。

「ねえ」

蘇子がぶるつと震えた。

ク口は手遅れだと言った。アンタは消えてしまうと言った。

だから、いなくなってしまうアンタのために何ができるのか
って考えてた。でも——

「私も、諦めらんないよ」

まだまだこれからも、一緒にいたい。傍にいたい。
だからさ。

「だから、助けるよ。蘇子」

言っちゃったよ。無責任だな、私。

でも、この気持ちはホントなの。嘘じゃない。心からホンキの言葉だから。

蘇子が、目を閉じた。頬には、転んだときの苔がついたまんまだった。息を吸う音がして、吐くのと一緒に出てきたのは、ひっ——という掠れた声。何が起きるのかは、すぐわかった。それが込み上げて、どうしようもなくなる瞬間を私は知ってるから。

泣き出した。

哀しくて、悲しくて、聞いているこっちの胸まで締め付けられるような声を上げて。

さっきまでのどこか人目を意識した、遠慮がちな泣き方じゃなかった。

本当に、見られてるってことを無視した——ひとりぼっちの泣き方だった。

その姿と、

——姉さんが持つてるのが、一番いいかなって思ってた。

どっかの誰かさんが重なった。

右手を走らせる。撃った。蘇子のすぐ傍、膨らんでいた病龍の喉が裂け、粘ついた炎が噴き出した。大丈夫、その下に蘇子はいない。火は、当たっていない。

「今度は……私の番よね」

提げてんのは日傘と違って、随分物騒なシロモンだけどさ。

——ああ、来てるな。

肩越しに銃だけ向け、トリガーを絞る。熱が背中を叩くけど、つのめるレベルじゃない。後ろから頬の脇を抜け、ふよふよ現れたソイツをキャッチする。じゅうつて音が聞こえた気がした。反射的に開けた手を、もう一回握る。アツアツのスライムみたいなこれは、病龍の残骸。何十秒にも思える一瞬を終え、手を開けると——そこには、火傷に代わる釘が三本。

やって来る病龍を連射で薙ぎ払う。トリガー引きっぱにしていれば、コイツは勝手に連射式^{フル}へ切り替わる。弾が尽きたところで、すかさず釘を 供給口 へ。三本、立て続けに。

釘一本につき作れる弾数は一五発。試した結果、この数が釘の質——つまりは釘になる傷の深さ——によって変わることはない。質に左右されるのは弾の威力だけ。だから、本来ならこれで四五発分新たに撃てるんだけど、それはしない。

錬成炉のもう一つの特徴——それは、複数の釘を同時分解し、一発の特殊弾を作れること。

ぱん、と一発だけ、撃った。

迫ってた病龍の頭が破裂する。フツーならここでおしまい。けど、コレは違う。

次に吹っ飛んだのは、ソイツの後ろにいた病龍の下顎。後ろつつても真後ろじゃなく、純粹な直線射撃じゃまずヒットしないポジション。やったのは、苔と同じ赤錆色に輝く特製弾。

その次も、そのまた次の病龍も、ときにジグザグだったり、ときに螺旋だったり、ときに地中から飛び出るその閃光によってバラバラにされていく。

思い出すのは子どものお絵描き。まだ鉛筆の持ち方すら知らない子どもが、グーで握ったクレヨンを走らせる。気の向くまま、思うまま、時に画用紙からはみ出すほどの勢いで。その弾道のデタラメっぷりは、まさにそんな感じだった。

赤錆色が、木漏れ陽色を八割方塗り潰したところで、目の前に着地する。その正体は手乗りトカゲ。トゲ状の背ビレに発光する身体。鼻には長い釘が付いてるっていうか生えている。ソイツを武器に空を翔びながら、一撃必殺で獲物を仕留める小さなハンター。

トカゲが首を振って、釘に付いてた粘液を払う。眼が合った。どーよ、とでも言いたげな眼差し。

私は、ちらつとだけ笑って、見た。

あちこちから性懲りもなく噴き上がった炎が、再び病龍へ変わっていくのを。

「は」

笑えてくる。モチ余裕とは違った意味で。けど――

「行くわよ」

それでも進むのは、自分の意思だから。私が、決めたことだから。応じたトカゲが、高く翔び上がるのと一緒に滑走スタート。

蘇子の檻を担ってたヤツらが数匹、滑るように迫って来た。

ナイフを取った矢先、その内の一匹が火を吹いた。

軌道を変える。横を火球がすり抜けてった。

肌に感じる余波にヒヤツとしながらも、右手小指をさくつ。ヤバ、切り過ぎたかも。

そこから釘を引っこ抜き、素早く装填。

病龍たちが一斉に首をもたげ、立ちほだかる。

貌が裂けて、口が開いて、燃える涎が飛び散って――

次に飛び散ったのは、ソイツらの頭だった。

トカゲが、横合いから突貫を喰らわせたんだ。

束の間フルオート射撃。頭のないソイツらの残りをかき消す。

道が開けた。直後、いくつもの火球が襲いかかって来る。

けど、どれも私には当たらない。

私目掛けて吐き出される火球の全てを、トカゲが撃墜しているからだ。

あのデタラメな動きからじゃ到底信じられない程の、正確無比さで。

射抜かれ、火の粉となった火球が漂う、その先に――

こっちへ向かって手を伸ばす、あの娘が見えた。

まだ、ある方の手を。

――蘇子！

口を開けると、熱気が喉に押し入って来た。痛くて、声が出ない。言葉なら、もう充分届く距離だったのに！

手を伸ばした。あの娘の手を掴もうとした。

なのに、指の先すら当たらない。距離が、縮まらない。

ベルトコンベアの上を走ってるみたいく、一向に。

――何で？

宙を、ただただ引っこ掻いて――

気付く。蘇子は、もう泣きじゃくってなんかいなかった。潤んだ目がまっすぐこっちを見てた。

気付く。蘇子の手首には 腕輪 があった。物理的なカタチのな

い、光る文字が並んで出来たそれは、 狸 と地宰が嵌めてたアレにそっくりだった。

気付く。ああ、この手は違うのね。そういう気持で出された手じゃないのね。

目の前が、木漏れ陽色でいっぱいになった。吹っ飛ばされ、苔の上を跳ねるように転がって——止まった。復活しやがった檻の向こう、へたり込む蘇子が、見えた。敵の頭数的な意味でも、距離的な意味でも、またふり出し。チクシヨウ、銃を手離さなかったのが救いってどこか。

起きようとすると、痛みが脳天を突き抜けた。右脚が、炭みたいにどす黒かった。この黒は……血？ それとも焦げてんの？ とりあえずフツーに痛いし神経まで死んでるってことは……。目を、逸らした。教室で見たココの腕——とてもさっきまであの娘の一部だったとは思えないカタマリ——を思い出して、吐きそうになったから。

そういえば、トカゲは？ 思ってたすぐ、頭上で轟音がした。細かい紙切れみたいな炎と一緒に、チカチカ光る赤錆色が落ちていくのが見えた。

——嘘でしょ？

その弱々しい輝きは、正体を確認するヒマもなく、やって来た病龍に一呑みにされた。

火球に追いつかれた？ あの猛スピードであんだけ変則的に動いて？ そりゃ多勢に無勢だったけど。それとも、今まで連中がマジじゃなかった？

ゆるゆると目線を下げた。

蘇子が、空に向かって手を突き出していた。さっき私にしたのと同じように。

「もう……わかっているのでしょうか？」

腕が下がる。合わせて、光の腕輪がすっと消えた。

「この子たちは皆私の意思で動いてるの」

……でしょうね。

「貴女を拒んでいるのも私。自分で腕を焼いたのも私」

……でしょうね。

「そして、貴方を傷付けたのも、私なの」

バカね。そんなの――

「わかつてるわよ。とっくに」

右脚をそつと撫でる。釘が浮き出てくる感じ。見なくてもわかる。脚の火傷が癒され、元の形へと整えられていつてる。パラパラと釘の落ちる音がした。

ホントなら、さつき私に火球を直撃させることだつてできたはず。けど、蘇子はそれをしなかった。わざと足許に火球を落として、能力を使えば治せる程度の傷に抑えてくれた。

チャンスを、与えてくれた。

起き上がる。右手には銃、左手にはさつと集めた釘八本。右脚の

怪我は言うまでもなく。

「どうして……」

「おんなじよ。きっと」

釘を三本、静かに銃へ込める。

「アンタが氷垣のためにコレを創つた理由と多分おんなじ」

言つて、ニュアンスはまあ違うでしょうけど、とちよつとだけ笑う。

そう、コレ――蘇子が、ヒトであることを捨ててまで創り上げた、かつて珠置山だったこの砦。

あの娘にとつては、氷垣への想いを形にした大切なモノ。

だけど――

「ごめん蘇子。私今からアンタにとつてすごく酷いことをする」
手を広げ、残つてゐる釘五本を見せ付ける。

諦め切れない。助けたい。

それで動いて、結果、どんなに嫌われたつて、軽蔑されたつて、絶好されたつて。

「この釘で、全部終わりにする。この山の結界、綺麗さっぱり消滅させる」

私の 好き は、もう止まんないから。

結界を、消滅させる？

俄かには信じられないその言葉に、つい眉根を寄せてしまいます。この結界を支えている柱は三つ。一つは地宰。一つは兎の死体。そして、私自身。

地宰には、その身に危機が及ぶようなら、私の身を顧みず力を使いなさいと頼んであります。もし、あの「クロ」と呼ばれていた黒煙の妖人が、あの子に危機を予感させる違いとますら与えず、あの子を打倒できる程の腕前だったとしても、結果は同じです。

私に力を与えてくれた、あの昏黒こんくの少女が言っていました。契約した以上、主である私の命が尽きない限り、従者である地宰は死なない。けれども、もし、地宰が倒された——苔こけによって構成された身体が、自力では修復不可能なほど損傷した——際は、私の精神エネルギーをもって地宰を蘇生させるのだ、と。その「精神エネルギー」が何を指しているのかは、今でもよくわかっていません。それは具体的に何が消費されるということなの、と私が尋ねても、今の貴方にとってはたとえ微々たる量でも失えば酷く困るものよ、とか、少女は応えてくれませんでしたから。あの、加虐サディスティック的な笑いを浮かべて。ただ、わかっているのは、すでにこの身体が限界だということ。こんな状態で、もし地宰が倒れてしまったら——きっと、それがお終いなのでしょう。

そのシステムを、ささめちゃんとはもかくとして、地宰と近い存在である、あの妖人なら理解しているはずです。そして、ここに来るまでのお互いのやり取りを見ただけでも、あの妖人がささめちゃんのことを第一に考えていることは善くわかります。となると、このタイミングであの子が倒され、柱の一つが欠けてしまうことは有り得ないはずです。

なら、狙いは兎？

兎の死体は、この山の地気を澱ませ、結界の性能を高める役割を担っています。だからこそ、そう簡単に掘り返され、排除されてはならないと、私は、あの少女の協力を得て、兎をゾンビ化することにしました。ゾンビといっても、アニメや映画でよく見る緩慢な動きではありません。彼らは生前と何ら変わらない、命令によってはそれ以上の速度で、半永久的に走り続けることができるのです。そんな、すばしっこく逃げ回る彼らを、山頂にいながら捕捉し、始末する。その術がささめちゃんにはない——と、あの銃を見た今では言い切れません。むしろ、それぐらいあっさりやってのけそうです。けれど——兎はあくまでオプシオンなのです。事実、ココさんと一緒に来たあの蛙たちによって、現在兎の数は三匹にまで減らされていますが、結界の維持に問題はありません。一定の空間に一度に召喚できる邪の数と、その召喚までにかかる時間に支障がはじめていくくらいです。仮に全滅したとして、ささめちゃんの言う「消滅」に至るとは思えません。

じゃあ、一体どうやって……？

そのとき、乾いた音が響いて。

はっとすると、ささめちゃんが右腕を上げていて。

さっきの音は、銃声だったのだと気付いて。

見上げると——空にはすでに落書きがありました。

枷を外されたことを歓喜する獣のように、獲物を求め、疾走しています。

多くの病龍を一瞬で蹴散らした、あの赤い光が。

一匹の病龍が、それ目掛けて襲いかかります。命令などしていません。異物を排除するためのツールとして、結界が勝手に 作動させたのでしよう。

赤い光も病龍へと向かっていきます。自分より遥かに巨大な相手を避けようとしません。

そして、お互いが衝突したと思ったときには——

一匹だった病龍が、二匹になっていました。頭から、まっぴたつにされてしまったのです。

続けてやって来た他の病龍たちも同様で。

身体を天へ伸ばし、それを一呑みにしようとするけれど。

次の瞬間にはもう、生気のない、たくさんの火の塊となって墮ちていくのです。

——心なしが先程撃ち出されたモノよりも苛烈さが増して見えるのは気のせいでしょうか？

圧倒的です。あまりにも圧倒的過ぎます。

でも——

目をささめちゃんへ向けます。単なる力押しで結界を消滅できない以上、あの光は言わば布石のはず。その証拠とばかりに、ささめちゃんは今、片手ではなく両手で銃を握っています。銃口を下げているせいで狙いはまだ読めませんが、ここにきて両手でしっかり握るということは、次の一撃こそ絶対に外せない——本命だということでしょう。

ならば、取っ掛かりの時点で崩すが最良。幸いにもささめちゃん は先程私がどうやってあれを仕留めたのか、見ていなかったはずで す。

もう一度アレを、と右手を上げようとしたところで——

「二本よ」

身体が、ぴたりと止まってしまいました。

一瞬、何のことかわからなくて呆けている私へ——

ささめちゃんが向ける眼差しは、真っ直ぐで、澄み切っていて。だから、

だから私は、

「たった今銃に入れた釘の数。だから、残り三本」

誤解してしまう。

ささめちゃんが言った、全てが終わる、という言葉の意味を。

この結界が、シャボン玉のようにぱちんと弾けて消えてしまっ

たら、氷垣君が犯した罪も、自分が犯した罪も、この身体も、全てなかったことになって、ただの悪い夢になって、またあの幸せな日々が戻ってくるんじゃないかって。

ええ、そう、幸せだった日々が。

——だったら今日の三時間目みたいに、またペアを組んでもらえない？

「もしも——」

軽い頭痛。

「その三本で結界を消せなかったら」

ああ……あれはいつした頼みごとだったかしら。

ただ、あのとき前に座っていたのは、ささめちゃんだったと思います。

「そのときは、私を」

「心配しなくても」

聞き慣れた声が、私の声を思考ごと遮ります。

「ちゃんと取っ払ってみせるからさ」

見えるのは、いつもより——いいえ、いつもと同じで頼もしい、目だけで微笑む貴女の顔。

「だからアンタは、そこで待ってて」

——ああ、やっぱりこの娘は。

「勿体なさ過ぎるわ。私には」

ゆっくりと右腕を空に向けます。掌を広げると、手首の辺りを温かなものが包んでいきます。眼で見て確認するまでもありません。それは、青く輝く魔道文字——この文字は不思議なことに見る角度によって梵字だったり、ヘブライ文字だったり、とにかくあらゆる文字へと変化するのです——によって造られた光の腕輪。私が力を使う際に現れるもの。

ささめちゃんは、一瞬目を見張りましたが、すぐにどこか呆れた風に頬を緩めました。

だから——もしかしたら私も、つられて緩んだり、しているかも

しません。

「アンタがそんなに強情なヤツだなんて思わなかったわ」

「貴女がそんなに頑固な娘だなんて思わなかったわ」

腕輪をした掌をぐつと握ります。

直後、空が明るくなりました。地面が、翡翠の色に照らされました。

太陽のない世界に現れた、新たな太陽と言わんばかりの輝きを放つそれは――

ここにいる病龍全てを一つにした、ここにある地気全てを収束させた、こうして見上げているだけで創造主である私自身が身震いするほどに、とてつもなく巨大な病龍。

だから当然――と、言うべきなのでしょう。

空が狭くなったと錯覚させるくらいの巨体をもつて尚、彼には顔がありません。

ふと、いつだったか、合体しても顔がないのは変わらないのね、と何気なく呟いた私に、不完全をいくら寄せ集めたところで所詮不完全じゃからの、と地宰が言っていたのを思い出します。いつも通り酷く落ち着いた……いいえ、どこか沈んだ声に聞こえました。

病龍が吼えます。威嚇なのか、それとも痛みの訴えなのか、すでに赤い光の攻撃が始まった今となつては判りません。その猛攻は、病龍の胴体を着々と削っているようですが――やはりそれだけです。ぼろぼろと、降り始めの霰のように零れる火の玉。あれほどの体格差がありながら、その程度の傷を付けるだけで大したものです。

そう、あの赤い光を捕えることが難しいのは、あれが凄まじい速度で、広い空間を動き回るからです。ならば、空間を狭めればいいのです。境内のあちこちにいる病龍という的を一箇所に、それも大きなサイズで纏めてしまえば、必然あの赤い光はあいつた動き――行動範囲を狭める他ないのです。

こうなつてしまえば、もはやあの赤い光こそが私的。
ぎしり……と、右の拳が軋みました。この状態を維持できる時間
はそう長くありません。

四、五箇所にある残り火を、病龍の身体から零れたモノごと 目
視 で集め、瞬時に凝縮。空中に火球を形成します。沸々と音を立
てるそれらは全部で三つ、あの赤い光を撃ち落とすには充分なはず
です。それぞれの火球の周りに、魔道文字で形成された光輪が浮か
びました。

あとは、これを、病龍の近くへ。
距離を 動かす だけ。

——光。

一瞬、鼓膜が吹き飛んでしまったと思いました。

気が付けば、身体はうずくまっていた、瞑った瞼が熱くつて。

白んだ景色が、徐々に色を取り戻してくると——

病龍が、拘束されていました。全身を覆っている黄金色の格子模
様は、まるで電撃の網。身を振り、呻いているようですが、耳鳴り
が邪魔でよく聞こえません。

ささめちゃんは、頭上に向けていた銃を下ろします。そして、残
りの釘を詰め終えてから、言いました。その声はとても静かなもの
であったのに、何故かはつきりと耳に届きました。

「それ……遁甲術とんこうじゆつでしょ？」

「とん……こう」

さっきの閃光のせいだろう。蘇子は苦しそうに目を瞬かせている。
思いの外反応が薄い。もしかして読みを外した？ いや、まだ、

続けてみる。

「遁甲術じゃあピンと来ない？ なら奇門遁甲きもんとうこう？ それとも八門遁
甲こっ？ ああ、アンタがもし距離を操ることメインで教わったんなら、

やっぱり縮地法？」

蘇子の眼の色が変わった。目は口ほどになんとやら。ユリイカだ。縮地法ってのは、地脈を操って距離を寄せたり離したりする術で、さっき私が言った遁甲術の応用に当たる。そもそも遁甲術は、天体の動き、山や河の変化から運不運を読む占いの一種のはずなんだけど、それが中国の伝承じゃ、コイツを応用すれば天気や地形を操作する魔法が使えるぞ、的な扱いになってたりする。有名ドコなら『三国志演義』に出てくる宰相——諸葛孔明しょうかつこうめいが遁甲術の使い手で、風を起こして火攻をサポートしたり、縮地法を使って敵軍の追撃を中止させた、なんて話がある。

……で、私が何でそんなに詳しいのかって言うと、それは間違いない。クロのせいだ。

小四の始まり頃から アイツら が見え出して、程なくしてアイツに会って、それから今日まで、これ系の話はこっちがついて行ける行けてないを完全シカトしたペースで聞かされてる。しかも何が腹立つって、アイツの話って偶に身になんのよ。そう、今みたく「最初から……知っていたの？」

能力の正体を。

気が付けば、蘇子の周りにもう火球は浮かんでいない。

「まさか。アンタを目指して進んでんのに距離は全く縮まなくて戸惑ってた矢先足許で大爆発。そうやって体験して初めてアンタが縮地法を使えるってわかったの。爆発の方は……作った火球を私の足許に 移動 させたってとこね。ついでに言うと、あのデカい病龍を創んのに使ったのもそれでしょ？ 病龍同士の距離を縮めて、ゼロにして、くっ付けた」

蘇子はただ目を泳がせている。いや、そうじゃない。アレは意図的な動きだ。多分魔術で言う呪文の代わりになる仕草。でも、きつと何も起きない。

「残念だけど、病龍ならもう呼べないわよ」

だってアレで全部だからと言って、私は指差す。網に囚われ、も

がくしかない病龍を。ソイツの顎には、赤錆色をしたゼラチン質の塊がパチパチ放電しながらへばり付いている。釘二本を使って召喚したその電気クラゲ——ちなみに本物の電気クラゲは放電しない——型特製弾は、私がいつも撃ってる弾と違って誘導性を持たない。だから撃つとき、頼れるのは自分の腕前のみ。けど、当たればこの通り、着弾と同時に広がるエネルギーネットによって、素になる釘の質次第じゃかなりの時間相手を拘束できる。

「この神社の中に呼べる病龍の数って決まってるんでしょ？」

蘇子は何も言わない。ただ、顔を見れば凶星だってことは察しが付く。

「トカゲ撃って最初の病龍を粗方削ったあと次のが湧いてきたのを見て、なんとなく気付いたのよ。最初と数が変わってないって。多分今見えてんのがこの神社に呼べる病龍の数の限界なんだろうってだから、アンタには病龍をひとまとめにしてもらった。ソイツを捕まえて次を呼ばせないためにね」

まさか、と蘇子は眉根を寄せる。

……どうやら気付いたみたいだ。この場に病龍を呼べない、そのワケに。

この空間には、呼び出せる病龍の限界がある。なら、まずはソイツらを全部呼んでもらって、それからソイツらの動きを一匹残らず封じてしまえばいい。そうすれば、もう次は来ない。だって、たとえ身動き取れなくなつて、ソイツらは皆そこに いる んだから。いる 以上は、一匹としてカウントされるんだから。つっても、言うは易く行ふは難し。アイツら全部を一気に拘束するなんて手段私は持っていない。だから、あの娘の技を利用した。病龍を合体させ、撃つべきが一体で済むよう仕向けた。

「どうして……合体させると思ったの？」

「もちろん確信はなかったわ。でも、病龍が使えて、モノとモノの間の距離が操れて、自分がもしそんなスペックだったらって考えたとき、あのトカゲを墜とすしたら多分こうするって思ったのよ」

囷をデカくし、トカゲの行動範囲を狭めたトコで、囷ごと吹っ飛ばすつもりで攻撃。私も多分そうする。

「でも、私があればもう一度墜とそう思うとは限らないじゃない」「そりゃね。一度返り討ちにした攻撃を相手がもう一回やってきたら、ヤケになってんのか、それとも何か策術しかけでもあんのか、フツーは勘繰る。アンタの言う通り、墜とさない、自分からは仕掛けないって選択肢だつてあり得るわ。……あの前置きナシじゃあね」

「前置き？」

「この釘で全部終わりにするって言ってたヤツよ。ねえ蘇子。今私らがやってることはさ、結局のトコ、頑固者と強情なヤツの意地の張り合いなワケよ。私はアンタを助けたいけど、アンタは私に助けられたくない。私はアンタを攻撃しないけど、アンタも私を本気で攻撃できない。こんなの……戦いじゃない。戦いなんて呼べない。確かな勝ち負けの条件が全くない」

だから――

「だから――作ったのね」

続けようとしていた言葉は、代わりに蘇子の口から出た。私は、少しだけ驚いたあと頷く。

そう、作ったの。単なる意地の張り合いに勝敗の条件を。八本の釘を見せ付け、これで助けられなかったら諦める、と。言われて、私の撃ったトカゲは、結界を破るための布石――蘇子にとって絶対迎え討たなければならぬモノへ、化けた。これさえ攻略すれば勝てる。大野木ささめは諦めてくれる。蘇子は、きっとそう思ったんだろう。

蘇子は溜息をついた。固く張り詰めていた胸から空気が漏れ出るように、長く長く。そのあと、伏せた眼だけで幽かに笑って、「教えて。……結界はどうやって消すつもりなの」

そう訊いた。

何も言わず、私は銃を構える。そして、トリガーを引いた。

蘇子の背後――珠置神社が火を噴いた。格子戸がぐわっと膨らん

で、中から出てきた炎に飲まれた。さっきの落雷じみた銃声よりも、数倍やバい音が鼓膜を打つ。なんつー音の暴力。それでも、神社の破片が私たちに当たらず、爆風も蘇子の三つ編みをなびかせる程度でしかなかったのは、それだけ加減セーブしたからだ。トカゲと同じ釘三本から作れるホタル型焼夷弾——時限式でも地面に当たった衝撃で爆発する着発型でもなく、私の好きなタイミングで爆発する「任意式」、しかも爆風の範囲まで自由に設定できるトンデモ爆弾——の火力を。生物みたいな火焰がべるべる拡がって、空に火の粉を舞い上げていく。そこに、もう病龍はいなかった。やがて、神社は火ダルマになった。

蘇子が上を見ている。私も同じようにした。何か起こりそうなの……うつん、もう起きてた。

色ガラスの雪が降っていた。結界の欠片だって直感でわかった。さっきから顔や肩に当たってるのに全然痛くない。蘇子も同じなんだろう、避けようともしていなかった。ただ、蝶の羽みたいな煌めきに見惚れてた。

「本当に……綺麗さっぱりね」

蘇子の呟きに、小さく頷く。

神社が、ごうと音を立てた。

「クロ……相棒パートナーから聞いたわ。神社を山頂に建てられたりして傷付いた山のことを風水的には病龍って呼ぶって。あと、病龍を流れる気は地宰にとって扱いやすいつてことも。それは、多分結界も作りやすいつてことよね？ つまりさ、この山が病龍だつてことは結界作る上で欠かせない条件の一つだったのよ。なら、そいつを除けばいい。この山を病龍にしてる原因——珠置神社をブツ壊せばいい。そうすれば、アンタに手を出さず……結界を消せる」

ガラスが降り積もり、ゴシック教会のステンドグラスみたくなたた地面——ふと、その中にトタンの破片が混じってるのを見付ける。私からは見えなかったけど、あの神社、壁をコレで補強してたのね。そんなにも脆いモノが、この砦の心臓 だったんだ。

顔を上げると、蘇子がこっちを見ていた。柔らかに微笑んだ。

「助け……られちゃった」

眩暈が、した。でも、実際はそんな気がしただけ。ふらついたり
はしなかった。

ああ、やっぱり自己満足だったのね、コレは。どんな結末が待って
いようと、じっとしていることだけはできない——そんな思いのま
ま飛び出して、助けるよ、なんて約束して、この娘のホントの目的
もわかんないまま 武器 取り上げて、結界ブチ壊して……。結局、
欲しかったのはこの言葉。助けられないとわかってても、親友を見
殺しにするなんてあまりに心が痛いから、せいぜい足搔けるだけ足
搔こう。そうすれば、浅い傷で済む。やれるだけのことはやった。
何もしなかったよりずっとマシだ。だから——赦されるんだ。私は
私だけは。

——クソ。反吐が出る。

ぶんぶんかぶりを振り、銃を捨てた。足早に蘇子へ歩み寄って、
目線合わせて。そっと肩に触れた。もしかしたらまだ、って思って
強く念じた。釘は——抜けなかった。蘇子の苦しみを取り除くこと
はできなかった。震える手に、蘇子の手が重なる。ごめんねって言
った。もういいのよって眼で言われた。

「助けてもらったと思っっているのは本当よ」

嘘よ。

「だって、藤枝蘇子のままでいられるんだもの」

止めてよ。

「最期まで一緒に……貴女のお友だちのままで」

言い終わるより先に、抱きついた。こうすればお互い顔が見えな
い。今更泣き顔見られるのが恥ずかしいとか思ったんじゃない。た
だ、蘇子がこの時間をいつもの自分として、いつもの私と一緒に過
ごしたいのなら、この顔を見られるのはダメだと思った。泣きじゃ
くってる今の私は、少なくとも蘇子の知ってる私とはかけ離れてる
ような気がしたから。

蘇子のない方の腕からは、苔が流れている。

「蘇子」

「なあに、ささめちゃん」

「おしゃべり、しよつか……？」

砂時計だ——と思った。

さっきまで神社だったモノが、童話の暖炉みたいに燃えている。

ガラスの雪は、ちらちらと疎らになりだしていた。積もってたガラス片も、いつの間にか溶けるように土……じゃなくて、苔に消えていた。きつと、そう遠くない内に止むんだろう。

今、私と蘇子は、背中をくっ付けて座っている。それは、そうしたいって蘇子が望んだから。このままじゃダメなのって訊くと、蘇子はスカートの端をちよいと摘まんで、引き上げた。腿に、真っ赤な苔がびっしりだった。頭の芯をブン殴られた気がした。ここだけじゃなくて、今も広がってるのよと言って、ぎこちなく笑う蘇子。スカートから離れた手が、今度はスクールリボンへ伸びて——。

咄嗟に、私はその手首を掴んだ。震えてる——と思ったら、震えてんのはこっちの方で。短く千切るように吐いてる息もまた、おんなじだった。そのまま私たちは見つめ合う。つらそうな顔の蘇子が何か言う前に、私は少しだけ笑って口にした。今のスカート捲るの、ちよつとドキつとしたって。蘇子が——目を丸くした。それから、何言ってるのよもうつと困ったように笑った。

——ホント、何言ってるんだか。私は。

背中合わせになると、不思議とさっきより蘇子を近くに感じた。抱き合っていると自分の鼓動がデカ過ぎて、蘇子のを聞いているところじゃなかったせいかもしれない。ドキドキしていると蘇子が言った。アンタだつてと心の中で返して、蘇子の手に触ると、ざらりとしたヒビロゴケ。固まっていると、力いっぱい握らないでね、崩れちゃうからと忠告された。どこか冗談っぽい感じだったけど、きつと比喩じゃない。うんと首を縦に振って、私たちは手を重ねるだけにし

た。

「初めてで、一番だと思ってたの。氷垣君のこと」
けど、と蘇子は続ける。

「あの日、稻荷神社で氷垣君とココさんが一緒にいたのを見て——」
——稻荷神社？

初耳だ。あの二人、マジでそういうカンケーだったの？

「嫉妬……した？」

そうね、と呟くように蘇子が言う。

「ただ、心のどこかで——お似合いだなあって。氷垣君が幸せならいいかなって。そうも思えたの。けど、それは抱くには遅過ぎる気持ちだった。そのときには私、もう藤枝蘇子を捨てていたんだもの」
藤枝蘇子を捨てる——それは多分、そのときにはもう純粋なヒトの身体じゃなかったってこと。

「彼のことが好き——その一心だったわ。彼のしたこと、見て見ぬふりをして、隠して、罪の肩代わりをしようとか、こんな身体になつて。それぐらい好きだと思っていたの。この恋に、命を削るくらい価値があるって思いたかった。なのに、それなのに、あの二人が話しているのを見ただけで、呆気なく気持ちは揺らいで……。どうしても、受け入れるわけにはいかなかった。受け入れて、一步一步引いてしまつたら、私が今までやってきたことには何の意味があるの？
この身体には、一体……どんな価値があるの？」

震えている蘇子の声。けど、私には手を握って やることすらできない。

砂時計のペースは変わらない。私たちの時間は——止まってくれない。

「そう思つたら、動かずにはいらなかったわ。結界を強固にする努力——その積み重ねをしている内はとても安心できたの。氷垣君のために作ったものだから、これが続く限りは私の恋も終わらない。彼を好きな気持ちは決して色褪せない。そんな風に、気が付けばすり替わっていたのよ。氷垣君のためが自分のために。……いいえ、

本当は最初からすり替わっていなかったのかもしれないけれど。氷垣君の罪が暴かれること以上に、自分が彼を好きでなくなることを恐れていたの」

——でも、無理だったの。耐えられなかったの。

埃色の雨が降っていた、あの日。

——いざチャンスを与えられてしまったら、抑えることが出来なかったの。

蘇子は、そう言った。

目を見なくなつてわかる。今のこの娘はホントのことを喋ってる。でも、じゃあ、蘇子がココと笹ヶ瀬を襲おうって衝動に駆られたのは、ココがいなくなれば氷垣は自分を見てくれるかもとか、そんなんじゃないくて、

「嗚呼、私——恋に恋をしていたんだわ」

笹ヶ瀬だけじゃない。ココも殺せば、より一層氷垣を好きってキモチを高められる。

決してブレない、色褪せない、確かなモノにできるって思ったから。

歪んでる——のかは、わかんない。恋するオンナノコとして。

そんなにも、誰かを犠牲にしてもってくらい激しい、身を焦がす程の恋ってヤツを、私は多分——。

——それは一番か？ さーたんが命懸けて守ったつくしよりもか？ つい、過ぎつちやうのは、

——ドラマで言ってる。美男美女同士友情は有り得ねーって。俺、そういう主義なんだ。

珈琲に角砂糖三つも入れる甘党で、つくしに「かつくいー」とかヘンな言葉を伝染^{うつ}していつて、つくしと二人一緒に膝枕してくれて——だからよ。一番じゃねえんなら、俺たちやもうアカの他人だ。三人で暮せんならどんな家がイイか、なんて妄想に付き合ってく

れて、

——あのシヨボイ雨ン中、俺とさーたんは……出逢わなかった。私なんか人生を台無しにされてしまった、あのオトナ。

「結局、私が一番守りたかったのは初恋そのもので、一番好きなのは自分だったの」

氷垣君じゃなかったのと蘇子は言った。

一番好きなのは。また、一番。順位の話。

「ねえ、蘇子。アンタ、私のこと好き？」

背中越しに、蘇子が啞然としたのがわかった。少し間が合つて、
「う……うん」

らしくない……ある意味じゃらしいと言える、年相応の女の子の返事。この娘のきつちりしてるところも、ちよつと抜けてるところも合わせて、友だちの私は知ってるから。

「じゃあ、いいんじゃない」

「え？」

「一番じゃなくても、好きなんですよ。好きな気持ちは嘘じゃないんですよ。ならいいじゃん」

氷垣が何番だろうと。私が何番だろうとさ。

「好きなら——いいよ」

背を預ける。こつん、と互いの後頭部が当たった。目を瞑ると砂時計の音が遠のいた気がした。流石に全く聞こえなくなったりはしなかったけど、それでも遠く。

「訊いても……良い？」

「うん？」

「ささめちゃんの一番は……誰なの？」

思わず、目を見開いた。蘇子の声はどこか意地悪な気がする。けど残念。私が目を開けたのは、訊かれたことに驚いたからじゃあなくて、あの娘に呼ばれたような気がしたからだ。

——ささめねーちゃん。

頬を掻きながら、素直に答える。

「悪いけど……って前置きするのも変か。蘇子は好きよ。けど、きつと一番じゃない」

そう、と静かに頷く気配。

直後、私を支えてる蘇子の背中が、急速に頼りなくなつて、すごく嫌な予感がして、

「ふふ、今少しだけ」

蘇子の想いを裏切つて、振り向こうつて決めたときには、

「悔しいなつて思つちやつた」

背中から、ぽふりと。赤い苔の上に倒れていた。顔を傾ければ、当然頬を苔がくすぐる。そこだけが特別温かいとか、紅玉^{ルビー}みたいに綺麗とか、そんな風に思いたかつたけど、あいにくそんなことはなくて、炎のように赤いクセに、ただただ冷たいばかりで。

——自然と溢れて仕方がないものはそのままにするべきだ。

ははっ——て短く、掠れ切った声で笑ったあと。

——そして今のこの涙は、きつと。

私は、ちよつとだけ泣いた。

空を彩るのは、しんしんと降る紅だけ。色ガラスの雪は、もう降らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9751j/>

イレイザー　－無貌彷徨－

2011年11月10日03時15分発行